岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第113集

狄森古墳群遺跡発掘調査報告書

国道４号拡幅工事関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

狄森古墳群遺跡発掘調査報告書

国道４号拡幅工事関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,000以上に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化財を保護し、保存していくことは、県民に課せられた重大な責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう交通網の整備と重要な一施策であります。本県を縦断する一般国道4号の拡幅と産業経済発展の大動脈として多方面からの期待を担うものであります。

当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業に伴って止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を実施し記録保存の措置をとってまいりました。

本報告書は、一般国道4号の矢巾地区拡幅工事に関連して、昭和60年度に発掘調査を実施した狄森古墳群遺跡の調査結果をまとめたものであります。今回の調査によって古墳15基の周湟をはじめ、墓壙、竪穴住居跡等が発見されました。また、勾玉、切子玉、直刀等奈良時代から平安時代にかけての遺物が出土しており、古墳の分布がさらに段丘の南西に続くことも明らかになりました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御援助、御協力を賜りました建設省東北地方建設局岩手工事事務所、矢巾町、矢巾町教育委員会をはじめ、関係各位に心から感謝申し上げます。

昭和61年10月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　中　村　　直

例　　言

1．本報告書は、岩手県紫波郡矢巾町藤沢第７地割字狄森58－２ほかに所在する狄森古墳群遺跡の発掘調査結果を収録したものである。

2．本遺跡の調査は国道４号の拡幅工事に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は建設省岩手工事事務所と岩手県教育委員会事務局文化課との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3．本遺跡の岩手県遺跡登録台帳の遺跡番号はＬＥ47－0183、調査略号はＥＭ－85である。

4．発掘調査は昭和60年８月19日から10月31日まで行った。
室内の整理作業は昭和60年11月１日から昭和61年１月15日まで行った。

5．発掘調査及び報告書作成は菊池利和、光井文行が担当した。

6．調査対象面積は2,200㎡、調査面積は1,500㎡である。

7．鑑定は次の方々、機関に依頼した。

石質鑑定	佐藤地質工学研究所	佐藤　二郎氏
炭化材樹種鑑定	岩手県木炭協会	早坂松次郎氏

8．本報告書の執筆、編集、校正は光井文行が行った。

9．発掘調査は川原正造氏をはじめとする地元の方々の協力を得た。また、室内整理作業には臨時職員の協力を得た。

10．調査によって得られた資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目　　次

序
例言
Ⅰ　調査に至る経過……3
Ⅱ　調査方法と整理方法……3
Ⅲ　遺跡の立地と環境……6
Ⅳ　検出遺構と遺物……13
　1．竪穴住居跡……13
　2．古墳周湟……19
　3．土坑・土壙……40
　4．溝跡……52
Ⅴ　遺構外の出土遺物……72
Ⅵ　まとめ……81
付編
狄森古墳群遺跡出土の火山灰の蛍光X線分析……85
狄森古墳群遺跡出土直刀の金属学的解析結果……86

挿　図　目　次

挿図1　スクリーントーン・記号・調整痕・法量の用例……5
挿図2　基本土層模式図……6

図　版　目　次

図版1　岩手県全図……1
図版2　遺跡位置図……2
図版3　地形分類図……7
図版4　遺構配置図(1)……9
図版5　遺構配置図(2)……11
図版6　FⅠ－1住居跡(1)……14
図版7　FⅠ－1住居跡(2)……15
図版8　FⅠ－2住居跡(1)……17
図版9　FⅠ－2住居跡(2)……18
図版10　BⅠ－1号古墳周湟……20
図版11　DⅠ－1号古墳周湟……21
図版12　DⅠ－2号古墳周湟……22
図版13　DⅠ－3号古墳周湟(1)……24
図版14　DⅠ－3号古墳周湟(2)……25
図版15　EⅠ－1号古墳周湟……26
図版16　BⅡ－1号古墳周湟……27
図版17　BⅡ－2号古墳周湟……29
図版18　BⅡ－3号古墳周湟……30
図版19　BⅡ－4号古墳周湟……31
図版20　BⅡ－5号古墳周湟……32
図版21　CⅡ－1号古墳周湟……33
図版22　DⅡ－1号古墳周湟(1)……34
図版23　DⅡ－1号古墳周湟(2)……35
図版24　EⅡ－1号古墳周湟……37
図版25　EⅡ－2号古墳周湟……38
図版26　EⅡ－3号古墳周湟……39
図版27　EⅠ－51土坑……41
図版28　BⅡ－51土壙……42

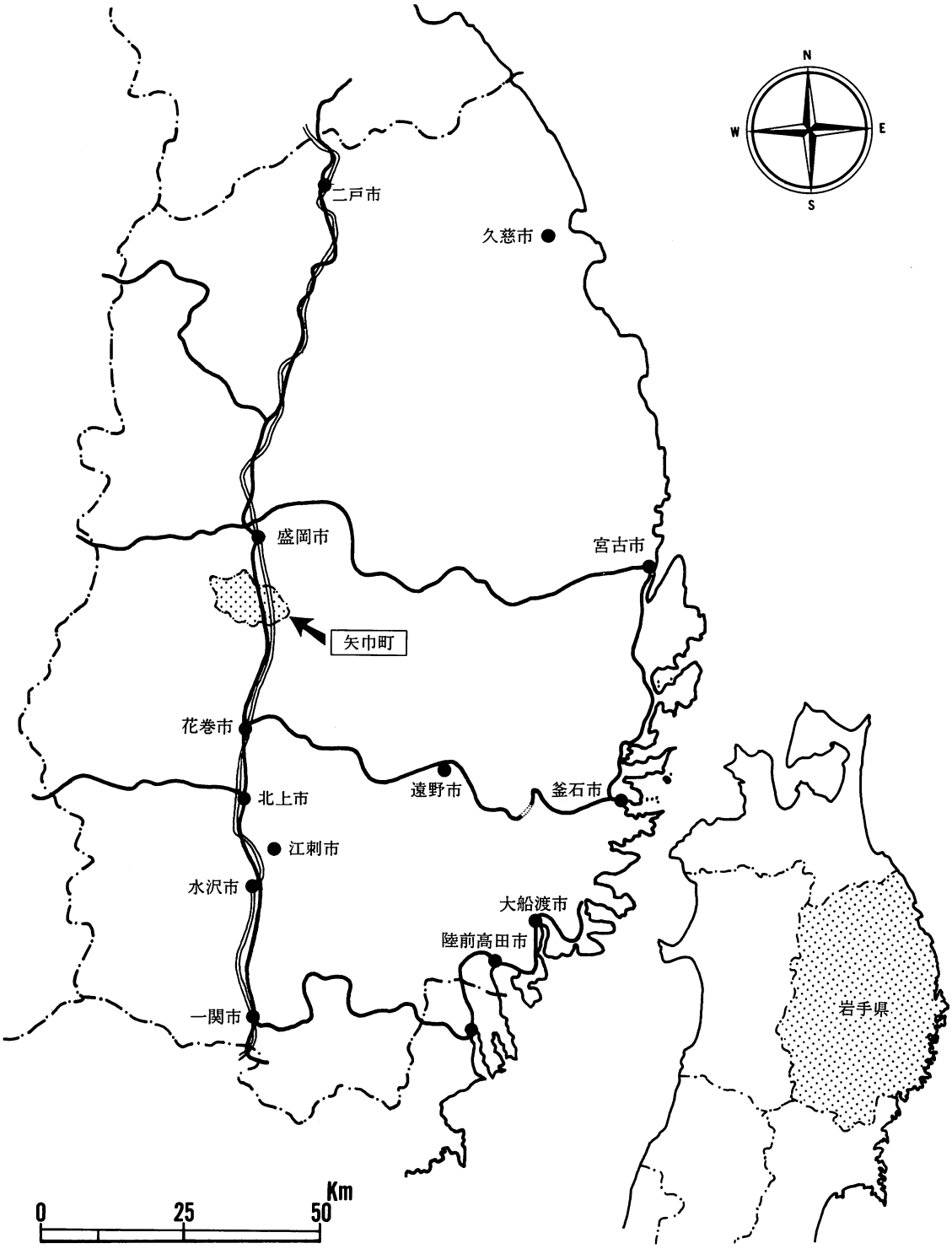
図版29　ＢⅡ－52土坑……43
図版30　ＢⅡ－53・54土坑……44
図版31　ＤⅡ－51土坑……45
図版32　ＥⅡ－51・52・54土坑……47
図版33　ＥⅡ－53土壙……48
図版34　ＢⅡ－ 55･56･60･61土壙･57～59土坑 …51
図版35　ＢⅠ－101・102溝跡（１）……53
図版36　ＢⅠ－101・102溝跡(2)ＦⅠ-101溝跡 54
図版37　ＤⅠ－101溝跡……55
図版38　ＦⅠ－102溝跡（１）……56
図版39　ＦⅠ－102溝跡（２）……57
図版40　ＦⅠ－103溝跡……58
図版41　ＡⅡ－101・102溝跡……59
図版42　ＢⅡ－101溝跡……60
図版43　ＢⅡ－102溝跡……61
図版44　ＢⅡ－103溝跡……62
図版45　ＢⅡ－104溝跡……63
図版46　ＣⅡ－101溝跡（１）……64
図版47　ＣⅡ－101溝跡（２）……65
図版48　ＣⅡ－102溝跡……67
図版49　ＤⅡ－101溝跡……68
図版50　ＥⅡ－101・102・103溝跡（１）……69
図版51　ＥⅡ－101・102・103溝跡（２）……70
図版52　ＢⅡ－105・106溝跡……71
図版53　ＦⅠ－１住居跡出土遺物（１）……73
図版54　ＦⅠ－１住居跡出土遺物（２）……74
図版55　ＦⅠ－２住居跡出土遺物（１）……75
図版56　ＦⅠ－２住居跡出土遺物（２）……76
図版57　ＦⅠ－２住居跡出土遺物（３）……77
図版58　ＦⅠ－２住居跡出土遺物（４）……78
図版59　ＥⅡ－51土壙・遺構外出土遺物…79
図版60　出土遺物　古銭……80

写真図版目次

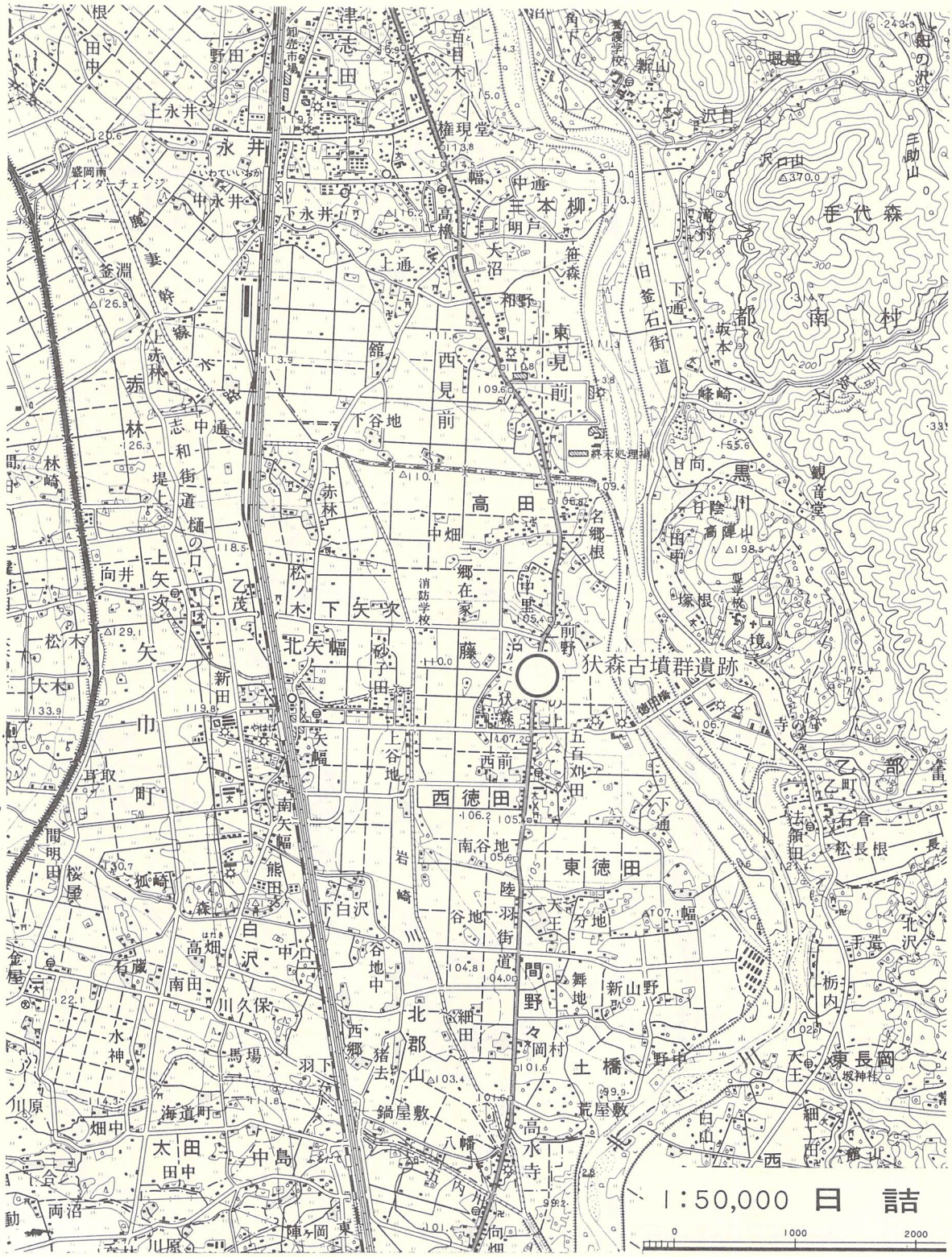
写真図版１……91
　ａ．調査前の遺跡現況西側（ＢⅠ区）
　ｂ．調査前の遺跡現況西側（Ｄ・ＥⅠ区）
写真図版２……92
　ａ．調査前の遺跡現況東側（ＣⅡ区）
　ｂ．調査前の遺跡現況東側（Ｄ・ＥⅡ区）
写真図版３……93
　ａ．粗堀作業状況東側　（ＢⅡ区）
　ｂ．遺構検出作業状況東側　（Ａ・ＢⅡ区）
写真図版４……94
　ａ．東側No.２深掘（土層断面）
　ｂ．西側No.２深掘（土層断面）
　ｃ．西側No.１深掘（土層断面）
写真図版５……95
　ａ．ＦⅠ－１住居跡（埋土断面No.１）
　ｂ．ＦⅠ－１住居跡（埋土断面No.２）
写真図版６……96
　ａ．ＦⅠ－２住居跡（平面）
　ｂ．ＦⅠ－２住居跡（埋土断面No.２）
写真図版７……97
　ａ．ＦⅠ－２住居跡カマド（平面）
　ｂ．ＦⅠ－２住居跡カマド（埋土断面）
　ｃ．ＦⅠ－２住居跡カマド（右袖断面）
写真図版８……98
　ａ．ＢⅠ－１号古墳　（平面）
　ｂ．ＢⅠ－１号古墳周湟（埋土断面No.２）
写真図版９……99
　ａ．ＤⅠ－１号古墳　（平面）

b．ＤⅠ－１号古墳周湟（埋土断面No.１）
写真図版10…… 100
a．ＤⅠ－２号古墳　（平面）
b．ＤⅠ－２号古墳周湟（埋土断面No.１）
写真図版11……101
a．ＤⅠ－３号古墳　（平面）
b．ＤⅠ－３号古墳周湟（埋土断面No.２）
写真図版12…… 102
a．ＥⅠ－１号古墳　（平面）
b．ＥⅠ－１号古墳周湟（埋土断面No.２）
写真図版13……103
a．ＢⅡ－１号古墳　（平面）
b．ＢⅡ－１号古墳周湟（埋土断面No.２）
写真図版14…… 104
a．ＢⅡ－２号古墳　（平面）
b．ＢⅡ－２号古墳周湟（埋土断面No.２）
写真図版15…… 105
a．ＢⅡ－３号古墳　（平面）
b．ＢⅡ－３号古墳周湟（埋土断面No.
写真図版16…… 106
a．ＢⅡ－４号古墳　（平面）
b．ＢⅡ－４号古墳周湟（埋土断面）
写真図版17…… 107
a．ＢⅡ－５号古墳　（平面）
b．ＢⅡ－５号古墳周湟（埋土断面）
写真図版18…… 108
a．ＣⅡ－１号古墳　（平面）
b．ＣⅡ－１号古墳周湟（埋土断面No.
c．ＣⅡ－１号古墳周湟（埋土断面No.
写真図版19…… 109
a．ＤⅡ－１号古墳　（平面）
b．ＤⅡ－１号古墳周湟（埋土断面）
写真図版20…… 110
a．ＥⅡ－１号古墳　（平面）
b．ＥⅡ－１号古墳周湟（埋土断面）
写真図版21…… 111
a．ＥⅡ－２号古墳　（平面）
b．ＥⅡ－２号古墳周湟（埋土断面）
写真図版22…… 112
a．ＥⅡ－３号古墳　（平面）
b．ＥⅡ－３号古墳周湟（埋土断面）
写真図版23…… 113
a．ＥⅠ－51土坑　（平面）
b．ＥⅠ－51土坑　（埋土断面No.３）
写真図版24…… 114
a．ＢⅡ－51土壙　（平面）
b．ＢⅡ－51土壙　（埋土断面No.１）
写真図版25…… 115
a．ＢⅡ－52土坑　（平面）
b．ＢⅡ－52土坑　（埋土断面）
写真図版26…… 116
a．ＢⅡ－53土坑（左）
ＢⅡ－54土坑（右）（平面）
b．ＢⅡ－53土坑（右）
ＢⅡ－104溝跡（左）（埋土断面）
写真図版27…… 117
a．ＢⅡ－54土坑　（平面）
b．ＢⅡ－54土坑　（埋土断面）
写真図版28…… 118
a．ＤⅡ－51土坑　（平面）
b．ＤⅡ－51土坑　（埋土断面No.１）
写真図版29…… 119
a．ＥⅡ－51土壙　（平面）
b．ＥⅡ－51土壙　（埋土断面）

写真図版30…… 120
a．ＥⅡ－52・53土坑（平面）
b．ＥⅡ－54土坑　（埋土断面）
写真図版31…… 121
a．ＥⅡ－53土壙　（平面）
b．ＥⅡ－53土壙　（埋土断面）
写真図版32…… 122
a．ＢⅠ－104溝跡　（平面）
b．ＢⅠ－101溝跡　（埋土断面No.５）
c．ＢⅠ－101溝跡　（埋土断面No.６）
写真図版33…… 123
a．ＢⅠ－102溝跡　（平面）
b．ＢⅠ－102溝跡　（埋土断面No.１）
c．ＢⅠ－102溝跡　（埋土断面No.２）
写真図版34…… 124
a．ＤⅠ－101溝跡　（平面）
b．ＤⅠ－101溝跡　（埋土断面）
写真図版35…… 125
a．ＦⅠ－101溝跡　（平面）
b．ＦⅠ－101溝跡　（埋土断面）
写真図版36…… 126
a．ＦⅠ－102溝跡　（平面）
b．ＦⅠ－102溝跡　（埋土断面No.４）
写真図版37…… 127
a．ＡⅡ－101溝跡　（平面）
b．ＡⅡ－101溝跡　（埋土断面No.１）
写真図版38…… 128
a．ＡⅡ－102溝跡　（平面）
b．ＡⅡ－102溝跡　（埋土断面）
写真図版39…… 1
a．ＢⅡ－101溝跡　（平面）
b．ＢⅡ－101溝跡　（埋土断面No.２）
写真図版40…… 130
a．ＢⅡ－102溝跡　（平面）
b．ＢⅡ－102溝跡　（埋土断面No.２）
写真図版41…… 131
a．ＢⅡ－103溝跡　（平面）
b．ＢⅡ－103溝跡　（埋土断面）
写真図版42…… 132
a．ＢⅡ－104溝跡、ＢⅡ－53土坑（平面）
b．ＢⅡ－104溝跡　（埋土断面）
写真図版43…… 133
a．ＣⅡ－101溝跡　（平面）
b．ＣⅡ－101溝跡　（埋土断面No.１）
写真図版44…… 134
c．ＣⅡ－101溝跡　（埋土断面No.２）
a．ＣⅡ－102溝跡　（平面）
写真図版45…… 135
a．ＤⅡ－101溝跡　（平面）
b．ＤⅡ－101溝跡　（埋土断面No.２）
写真図版46…… 136
a．ＥⅡ－101、102溝跡　（平面）
b．ＥⅡ－101、102溝跡　（埋土断面）
写真図版47…… 137
a．ＥⅡ－103溝跡　（平面）
b．ＥⅡ－103溝跡　（埋土断面No.２）
写真図版48…… 138
a．ＢⅡ－106溝跡　（平面）
b．ＢⅡ－105溝跡　（平面）
c．ＢⅡ－55～59土壙（平面）
写真図版49…… 139
a～c．ＢⅡ－55・56・60・61土壙
写真図版50～53…… 140
遺構内外出土遺物


N
W
E
S
二戸市
久慈市
盛岡市
宮古市
矢巾町
花巻市
遠野市
釜石市
北上市
江刺市
水沢市
大船渡市
陸前高田市
一関市
岩手県
0
25
50
Km

図版 1　岩手県全図



図版２　遺跡位置図

Ⅰ　調査に至る経過

国道４号の交通緩和を目的とした矢巾地区拡幅工事に関連する埋蔵文化財の取扱いについては、昭和57年から岩手県教育委員会文化課と建設省東北地方建設局岩手工事事務所の間で協議が行われた。

紫波郡矢巾町藤沢地内を含めた埋蔵文化財包蔵地の分布調査は、昭和57年10月25日付け建東岩二工事第126号による依頼をうけた県教育委員会文化課が昭和58年４月25、26の両日遺跡分布調査を実施した。調査の結果、関連地域内には島遺跡、西田遺跡、徳丹城跡、狄森古墳群遺跡等９遺跡が確認され、昭和58年５月４日付け教文第97号により、「国道４号線矢巾拡幅事業に係る遺跡分布調査の結果について」として回答した。

狄森古墳群遺跡の発掘調査及び報告書作成については、昭和59年11月22日岩手県教育委員会、岩手県埋蔵文化財センター、建設省岩手工事事務所の三者による協議が行われ、昭和60年度における発掘調査、昭和61年度の報告書作成の方向が提示された。これをうけて県教育委員会文化課は、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターにおける昭和60年度発掘調査対象遺跡とし昭和60年度８月１日付け委託契約をうけた当埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

Ⅱ　調査方法と整理方法

１．調査方法

〈グリッド設定〉

調査区域は国道４号線両側の幅７ｍ、長さ300ｍの範囲である。基準点は幅杭２点を使用した。基準点の成果は次のとおりである

基準点１　Ｔ．45　　（Ｘ＝－42885.268ｍ　Ｙ＝29396.827ｍ）

基準点２　Ｔ．45－１（Ｘ＝－42932.018ｍ　Ｙ＝29393.236ｍ）

基準点１と基準点２を結ぶ直線を南北の基線とし、これと直交し基準点１を通る直線を東西の基線とした。この基線かや四方に50ｍ×50ｍ単位で調査区を大区画した。区画の名称は東西方向に西から、Ⅰ、Ⅱを、南北方向に北からＡ～Ｆを付して、ＡⅠ区、ＢⅠ区のように表わした。また、遺物取り上げのため、大区画に５ｍ×５ｍの小区画を設け、北西隅から東に０～９を、南にａ～ｊを付してＡⅠａ０、ＢⅡｂ３のように表わした。

〈粗堀・遺構検出〉

一部は手掘りを行い、そのほかは検出面までの深さを把握したのち、バックホーを使用して表土の除去を行った。検出された遺構の名称は大区画ごとに、竪穴住居跡、古墳周湟は１から、

土坑、土壙は51から、溝跡は101からそれぞれ分類番号を与え、その前に大区画名を付して、BⅡ－1号古墳周湟、FⅠ－1住居跡、EⅡ－52土坑、AⅠ－102溝跡のように表わした。

〈精査〉

住居址は4分法、そのほかの遺構は2分法を原則としたが、遺構の重複、検出状況等に応じて使い分けた。遺物は小区画別に取り上げ、地点、層位を記録して収納した。遺構出土の遺物のうち、遺構に伴うものは可能な限り写真撮影後、出土地点、レベルを図面に記録した後、遺物番号を付けて取り上げた。

〈実測〉

遺構の平面図は原則として5mグリッドによる簡易遣り方を設定して実測した。実測図は縮尺20分の1で統一した。

〈写真撮影〉

6×7㎝判カメラ（白黒用）1台、35㎜判カメラ（白黒用、カラースライド用）2台を使用した。

2．整理方法

現場から得られた資料の整理は作業計画に基づいて次のように行った。

〈図面〉

図面は第1原図の仕分けを遺構別に行い、点検、修正を加え、トレース、図版作成を調査員の指示のもとに室内作業員が行った。

〈遺物〉

遺物は注記後、登録、接合、復元、写真撮影、拓本、実測、トレース、図版作成を順次室内作業員が行った。主な点検・指示はその都度、調査員が行った。

〈写真〉

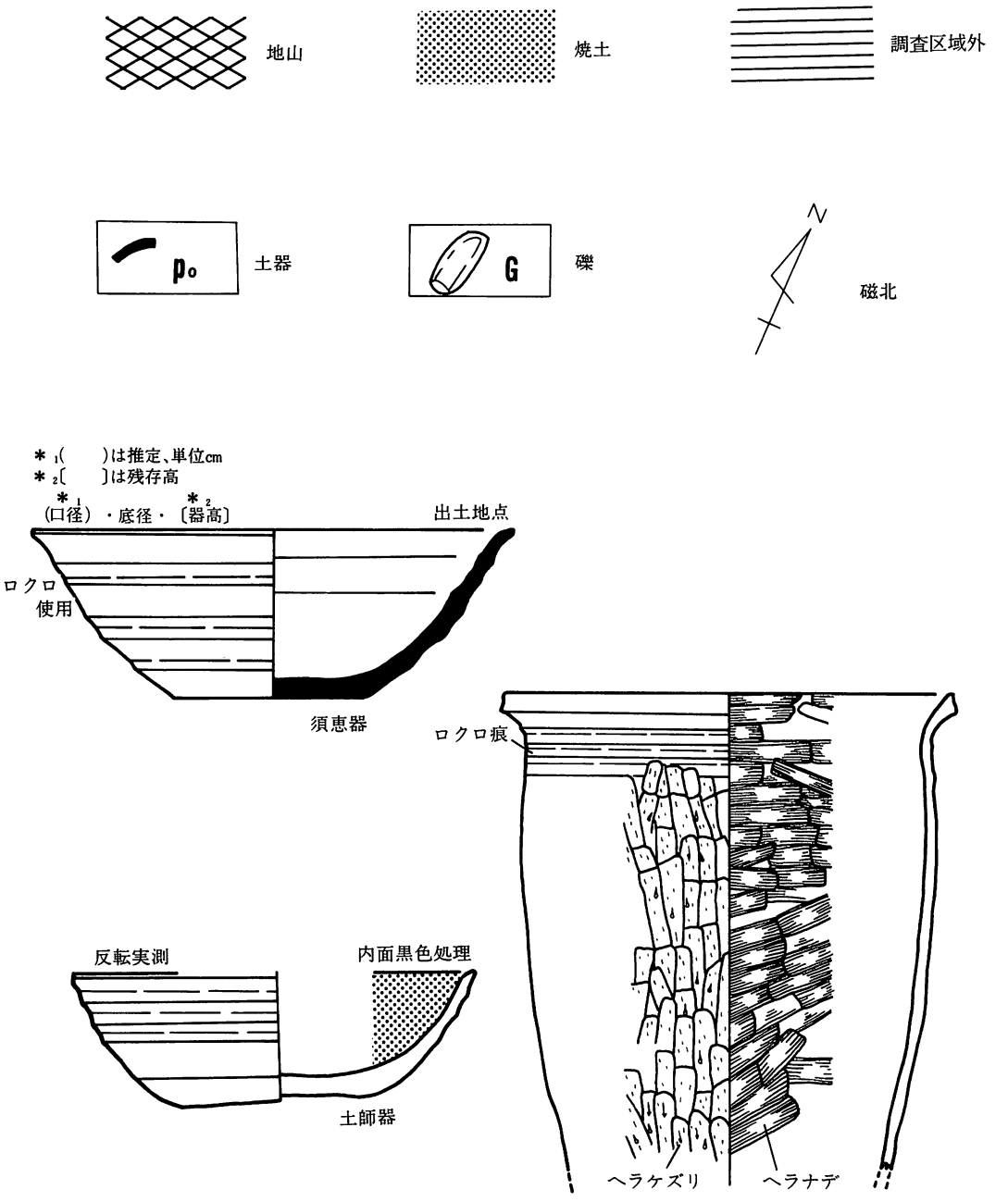
写真は35㎜版白黒・カラースライド、6×7㎝版白黒写真別にアルバムへ収納し、写真登録カードを作成した。

〈縮尺〉

遺構図版の縮尺は40分の1を原則としたが、遺構の大きい場合は、一部不定縮尺とし、それぞれにスケールを付した。遺物図版の縮尺は種類、大きさに応じて原寸、2分の1、3分の1とし、それぞれに縮尺を明示した。写真図版の縮尺は不定である。

〈記号・スクリーントーン〉

図版に使用した記号・スクリーントーン・調整痕・法量等は次の用例に示したとおりである。



挿図１　スクリーントーン・記号・調整痕・法量の用例

Ⅲ　遺跡の立地と環境

狄森古墳群遺跡は盛岡市の南約10kmにある矢巾町の北部にあたり、国鉄矢巾駅の東約２kmに位置している。本遺跡を国道４線が縦断している。東側は朝島山（標高607m）を中心とする北上山地の西縁部があり、西側には東根山（標高928m）を中心とする標高500m以上の山々が連なる奥羽山脈がある。中央部には南北にのびる北上川河谷平野があり、北上川はその東縁を南流している。

１．地形、地質

狄森古墳群遺跡が所在する北上川中流域北部は中川久夫氏ら(1963)によって、石鳥谷段丘(高位段丘)、二枚橋段丘（中位段丘）、花巻段丘、飯岡野段丘、都南段丘（以上低位段丘）に分けられている。

石鳥谷段丘は日詰付近に残片的に発達しているほか陣ケ岡にもみられる。頂面は開析が進んでなだらかである。上部に１ｍ以上の黄橙色～黄褐色火山灰層をのせ、下位に赤色風化したクサリ礫層が堆積している。

二枚橋段丘は石鳥谷段丘の外縁にへばりつく形で分布している。構成層は主に砂礫層からなり、２ｍ内外の黄橙～黄褐色火山灰層に覆われている。

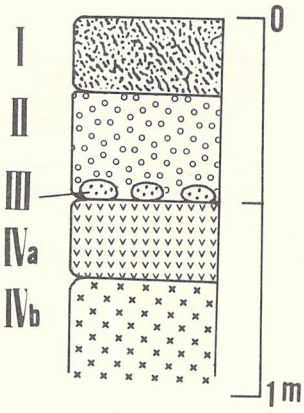
花巻段丘は滝名川、岩崎川などによって形成された複合扇状地として広く分布し、原面がよく保存されている。構成層は新鮮な礫からなり、面上には黄褐色火山灰層をのせない。

飯岡野段丘は西側の後背山地に沿う山麓状地面に発達している。

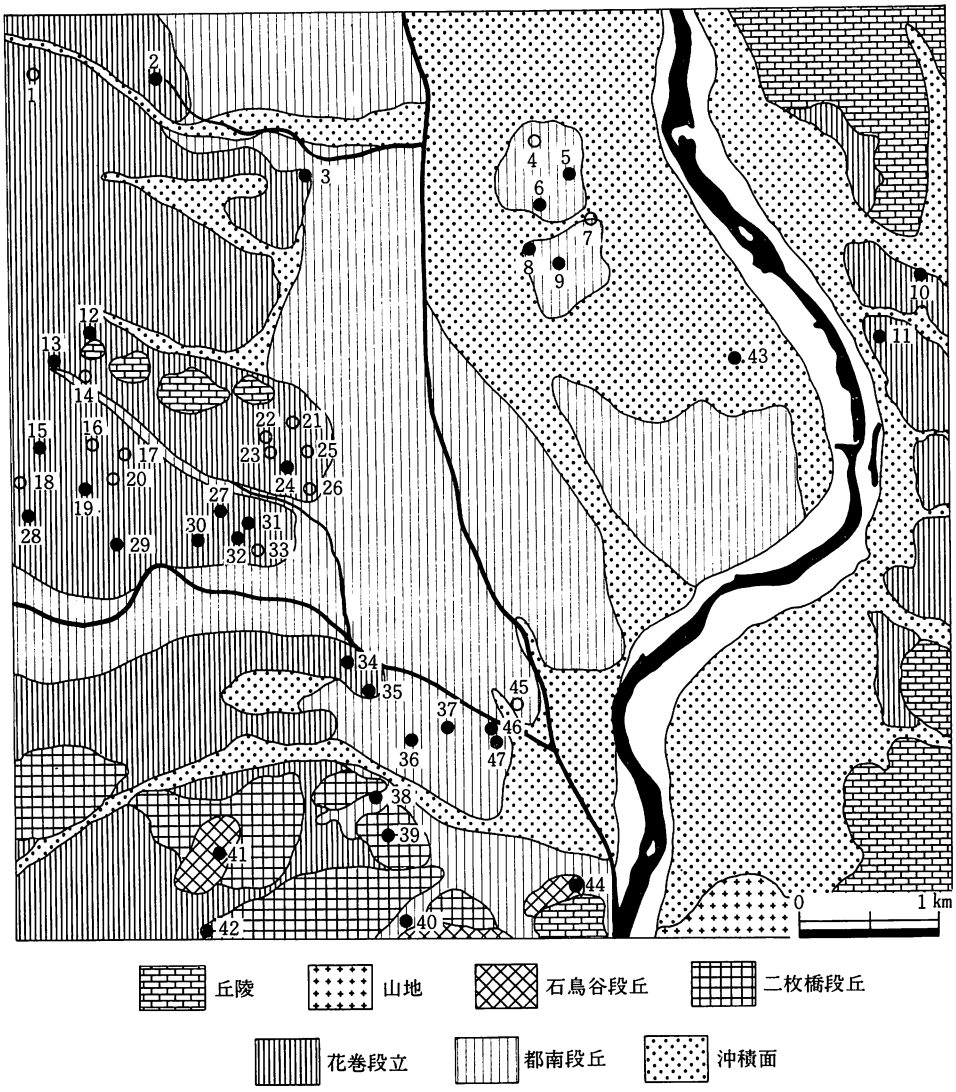
都南段丘は花巻段丘の上部を浸食して形成された段丘で、北上川流域付近、花巻段丘の外縁部に発達している。北へ進むほど沖積面との比高が不明瞭になる。五代川、岩崎川などの下流域にみられる。構成層は新鮮な礫を主として上部に砂、シルト及び粘土を伴っている。

狄森古墳群遺跡は都南段丘上に立地し、西１kmに岩崎川、東0.7kmに北上川が南流している。本遺跡の載る段丘北端部は宅地のほか、畑地、果樹園として利用されている。遺跡の北側、東側には沖積地が広がり田地になっている。沖積面との比高は２～３ｍである。

本遺跡における基本土層は次のとおりになる。Ⅰ層は暗褐色シルト層（層厚20cm）の旧表土でこの上に40～60cmの厚さで盛土されている。Ⅱ層は黒褐色シルト層（層厚20～30cm）で硬くしまっている。下位は上位より明色である。Ⅲ層はにぶい黄橙色細粒浮



挿図２　基本土層模式図



奈良・平安時代の遺跡

○奈良時代

1．煙山Ⅰ遺跡
2．上矢次Ⅰ遺跡
3．南矢幅遺跡
4．狄森古墳群遺跡
5．白山堂遺跡
6．田郷遺跡
7．館畑遺跡
8．西前遺跡
9．徳丹城跡
10．松長根遺跡
11．乙部方八丁跡
12．細屋遺跡
13．下煙山遺跡
14．煙山遺跡
15．煙山Ⅲ遺跡
16．白沢Ⅲ遺跡
17．白沢Ⅱ遺跡
18．白沢えぞ森古墳
19．石蔵遺跡
20．白沢Ⅰ遺跡
21．白沢Ⅻ遺跡
22．白沢Ⅸ遺跡
23．白沢Ⅷ遺跡
24．白沢Ⅹ遺跡
25．白沢Ⅺ遺跡
26．えぞ森古墳
27．白沢Ⅶ遺跡
28．室岡遺跡
29．太田遺跡
30．不動馬場遺跡
31．白沢Ⅳ遺跡
32．白沢Ⅴ遺跡
33．白沢Ⅵ遺跡
34．古館橋遺跡
35．古館駅前遺跡
36．念仏堂遺跡
37．中田Ⅰ遺跡
38．杉ノ上Ⅰ遺跡
39．新田遺跡
40．杉ノ上Ⅲ遺跡
41．陣ヶ岡遺跡
42．柳原遺跡
43．渋州遺跡
44．御堂前遺跡
45．稲村遺跡
46．中田遺跡
47．古屋敷遺跡

『稲村・中田・古屋敷遺跡』の「地形分類図」から転載

図版３　地形分類図

石層（層厚0.5～1㎝）で、三述利一氏の鑑定によると十和田a降下火山灰であるという。古墳周湟の埋土上部にみられる。遺構外では観察されていない。Ⅳa層は暗褐色シルト層（層厚20～30㎝）で下位に風化土をもつ。Ⅳb層は褐色～にぶい黄橙色シルト層（層厚40㎝）である。遺構検出面はⅣa・Ⅳb層上面である。

2．周辺の遺跡

周辺の古代遺跡は『埋蔵文化財地図』(1974・岩手県教育委員会）や発掘調査報告書等によると、奈良時代14箇所、平安時代29箇所、奈良・平安時代の複合遺跡4箇所である。これらの大半は低位段丘である花巻、都南段丘上に立地している。

発掘調査が行われ、奈良時代の竪穴住居跡が検出されている遺跡は、稲村遺跡に3棟、渋川遺跡に37棟などである。徳丹城跡内からも竪穴住居跡が多く検出されている。稲村遺跡の竪穴住居跡は奈良時代後半に位置づけられている。渋川遺跡の竪穴住居跡は奈良時代前半のものがが後半のものより多いという。

平安時代の竪穴住居跡が検出されている遺跡は、古館駅前遺跡、2棟（平安前半）、古館橋遺跡、1棟（平安前半）、杉ノ上Ⅰ遺跡、1棟（平安後半）、杉ノ上Ⅱ遺跡、3棟(平安前半)杉ノ上Ⅲ遺跡、5棟（平安前半(4)・後半(1)）、田頭遺跡、5棟（平安前半）、白沢遺跡、2棟（平安前半）、中田遺跡、7棟（平安前半）、古屋敷遺跡、8棟（平安前半）、渋川遺跡、29棟（平安前半が大半）、徳丹城跡などがある。

創建813年の徳丹城跡は本遺跡の南約0.7㎞に所在している。

《参考引用文献》

鈴木隆英・佐々木勝・細谷英男・菅原弘太郎　1979　「杉ノ上Ⅰ遺跡」・「杉ノ上Ⅱ遺跡」・「杉ノ上Ⅲ遺跡」・「古館駅前遺跡」・「古館橋遺跡」・「田頭遺跡」・『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』

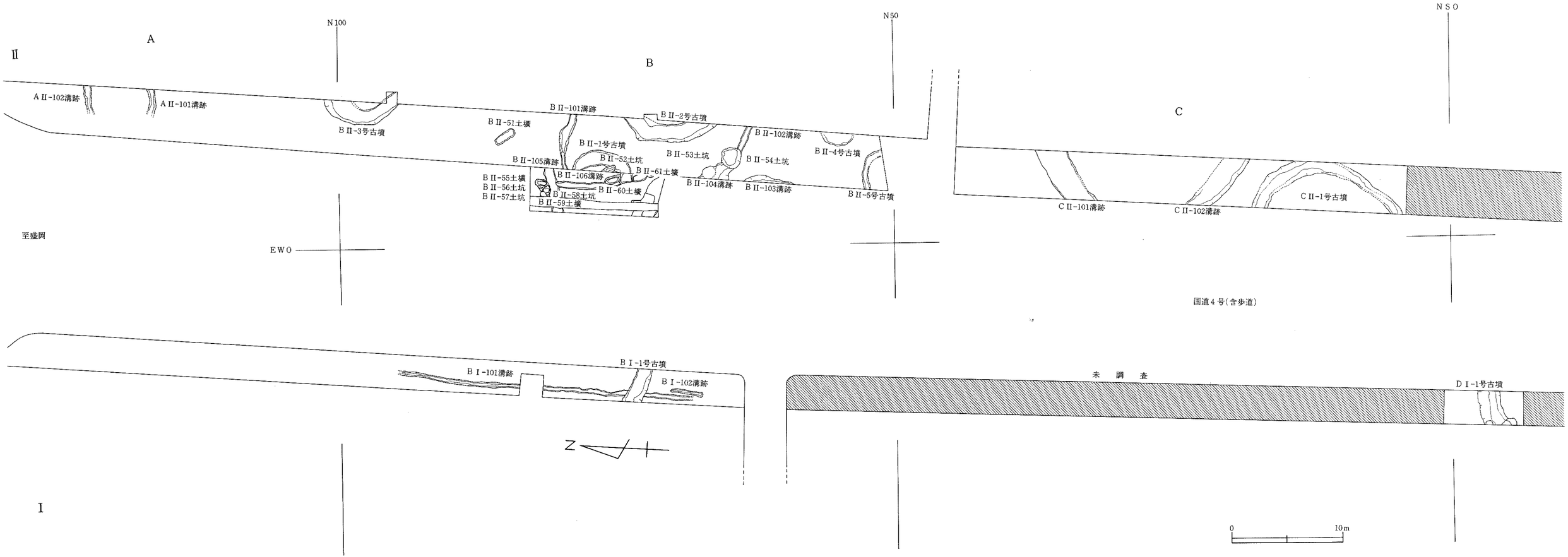
朴沢正耕　1980　「白沢遺跡」『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』

高橋文夫　1977　「地形・地質」『都南村湯沢遺跡』

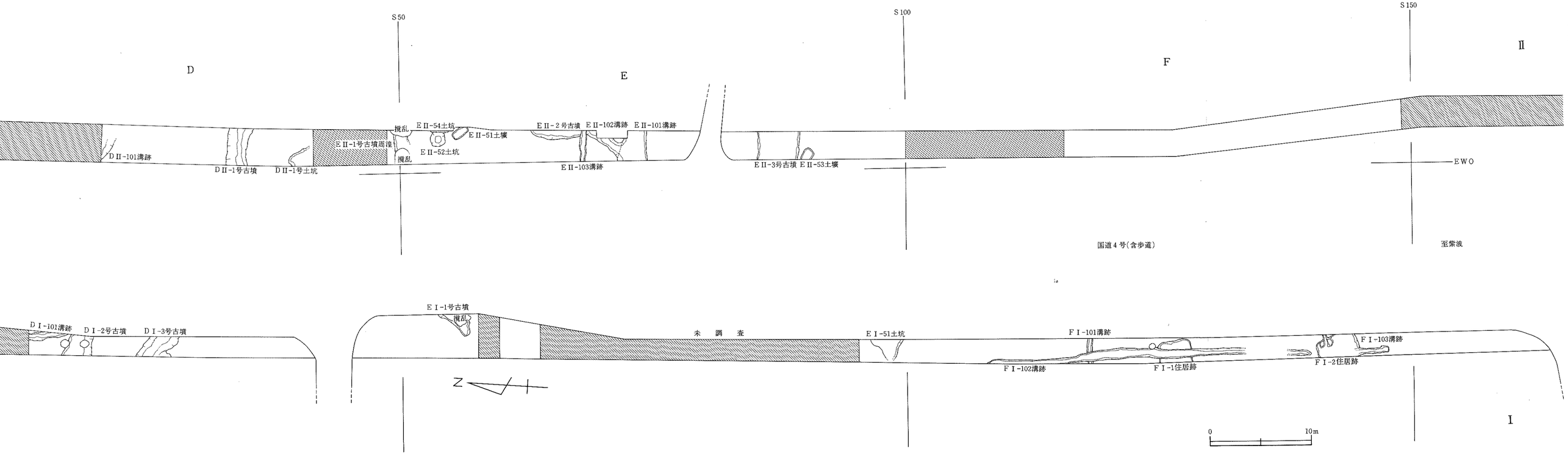
中川久夫・岩井淳一・大池昭二・小野寺信吾・森由紀子・木下尚・竹内貞子・石田琢二　1963「北上川中流沿岸の第四系および地形」『地学雑誌』第69巻第812号

高橋義介・三浦謙一・光井文行　1981　「稲村遺跡」・「中田遺跡」・「古屋敷遺跡」『岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第19集』

岩手県企画開発室　1975　「日詰」『北上山系開発地域　土地分類基本調査』


Ⅱ
A
N100
B
N50
N S O
C
A Ⅱ-102溝跡
A Ⅱ-101溝跡
B Ⅱ-3号古墳
B Ⅱ-51土壙
B Ⅱ-101溝跡
B Ⅱ-2号古墳
B Ⅱ-102溝跡
B Ⅱ-4号古墳
B Ⅱ-1号古墳
B Ⅱ-53土坑
B Ⅱ-54土坑
B Ⅱ-105溝跡
B Ⅱ-52土坑
B Ⅱ-61土壙
B Ⅱ-106溝跡
B Ⅱ-55土壙
B Ⅱ-56土坑
B Ⅱ-57土坑
B Ⅱ-60土壙
B Ⅱ-58土坑
B Ⅱ-59土壙
B Ⅱ-104溝跡
B Ⅱ-103溝跡
B Ⅱ-5号古墳
C Ⅱ-101溝跡
C Ⅱ-102溝跡
C Ⅱ-1号古墳
至盛岡
E W O
国道４号（含歩道）
B Ⅰ-1号古墳
B Ⅰ-101溝跡
B Ⅰ-102溝跡
未　調　査
D Ⅰ-1号古墳
Z
Ⅰ
0
10m

図版４　遺構配置図（１）


S 50
S 100
S 150
D
E
F
Ⅱ
Ⅰ
ＤⅡ-101溝跡
ＤⅡ-1号古墳
ＤⅡ-1号土坑
ＥⅡ-1号古墳周溝
撹乱
ＥⅡ-54土坑
ＥⅡ-51土壙
ＥⅡ-52土坑
撹乱
ＥⅡ-2号古墳
ＥⅡ-102溝跡
ＥⅡ-101溝跡
ＥⅡ-103溝跡
ＥⅡ-3号古墳
ＥⅡ-53土壙
ＥＷＯ
国道４号（含歩道）
至紫波
ＤⅠ-101溝跡
ＤⅠ-2号古墳
ＤⅠ-3号古墳
ＥⅠ-1号古墳
撹乱
未　調　査
ＥⅠ-51土坑
ＦⅠ-101溝跡
ＦⅠ-102溝跡
ＦⅠ-1住居跡
ＦⅠ-2住居跡
ＦⅠ-103溝跡
N
0
10m

図版５　遺構配置図（２）

Ⅳ．検出遺構と遺物

1．竪穴住居跡

ＦⅠ－1住居跡

遺　構（図版6・7、写真図版5）

本遺構は調査区南端に位置し、西側半分が調査区域外にある。地表面から約60cm下の褐色シルト層上面で検出され、南北に走る幅60～90cm、深さ10cm前後のＦⅠ－102溝によって、床面と壁が破壊されている。

住居跡は東壁の長さが3.1ｍ、検出されている部分の北壁、南壁の長さが、1.8ｍと2.2ｍである。検出された壁の輪郭線から、住居址は隅丸方形を呈しているものと推定される。壁高は北壁で最大10cm、東壁中央部で7cm、南壁で最大12cmである。

埋土は褐色シルトの小ブロック及び焼土粒の混入する黒褐色シルトが主体を占める。床面は平坦でしまりがあり、貼り床は施されていない。主柱穴、周溝は検出されていない。柱穴状ピットＰ$_1$（径21cm、深さ20cm）が西側中央に1個検出されている。

北東隅寄りの北壁際と南東隅寄りには現地性焼土が検出されている。北東隅寄りの焼土は溝によって上部と西側の一部が削られている。残存する部分は規模が34cm×40cmで、厚さが11cmである。南東隅寄りの焼土は規模が34cm×26cm、厚さが11cmである。この現地性焼土の周りには異地性焼土が南北に長く76cm×48cmの規模で不整形状に広がっていた。いずれも、その位置などから、カマド燃焼部または、その下底部と推定され、カマドのつくり替えがあったと考えられる。カマドの位置は北東隅寄りのものが北壁中央部東寄り、南東隅寄りのものが東壁または南壁の南東隅寄りと推定される。カマドの1つが下底部近くまで破壊されていることやカマドの残存状態が悪いことから、2つのカマドの新旧関係は不明である。

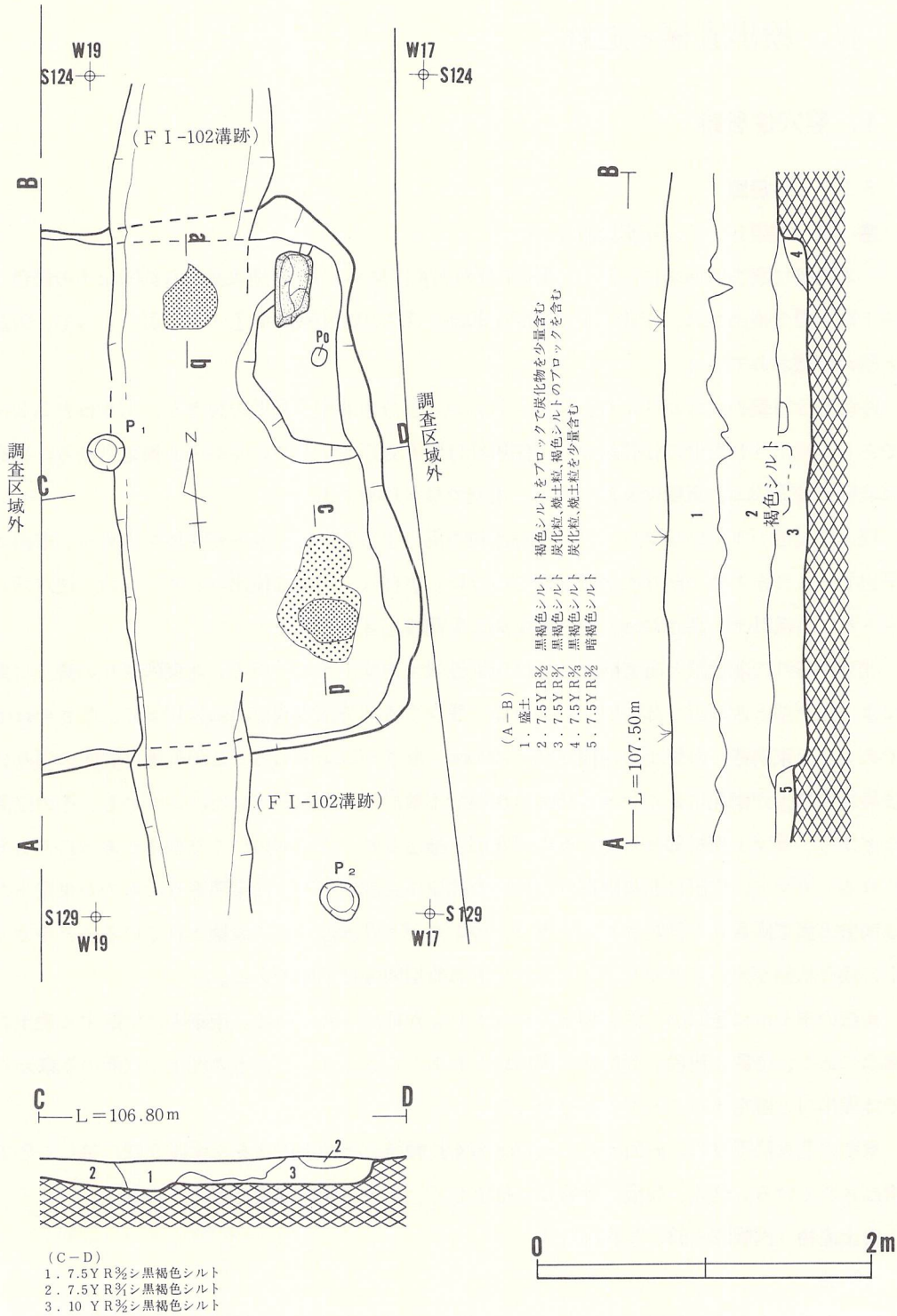
南壁の南1ｍに径23cm、深さ46cmのピットＰ$_2$が検出されている。南東隅に位置する焼土の真南にあり、位置、規模、形態から煙出口とも考えられるが、ピットの埋土や壁面の観察からでは煙出口と断定することができなかった。

東壁の北東隅寄りに、床面から5～12cm高く長軸径62cmの半円状をなす段が壁に接した形で検出されている。位置、規模、形態から推定して、出入口状の施設と考えられる。

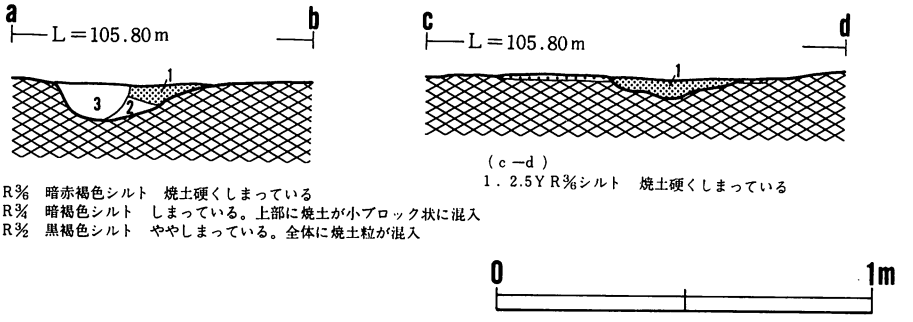
出土遺物（図版52・53、写真図版50）

土師器

坏形土器　4点出土している。1は体部が外傾し口縁部がやや内湾している。器面にロクロ痕が多くあり大小の凹凸がある。底部は欠損している。内面は縦または横方向のヘラミガキ後、


W19
S124
W17
S124
(ＦＩ-102溝跡)
B
P
q
P0
P1
N
調査区域外
C
D
調査区域外
p
(ＦＩ-102溝跡)
A
P2
S129
W19
S129
W17
(A－B)
1．盛土
2．7.5YR3/2 黒褐色シルト 褐色シルトをブロックで炭化物を少量含む
3．7.5YR3/1 黒褐色シルト 炭化粒、焼土粒、褐色シルトのブロックを含む
4．7.5YR3/3 黒褐色シルト 炭化粒、焼土粒を少量含む
5．7.5YR3/2 暗褐色シルト
L＝107.50m
褐色シルト
C
L＝106.80m
D
(C－D)
1．7.5YR3/3シ黒褐色シルト
2．7.5YR3/1シ黒褐色シルト
3．10 YR3/2シ黒褐色シルト
0
2m

図版６　ＦＩ－１住居跡(1)



（a－b）
1．5 YR3/6 暗赤褐色シルト 焼土硬くしまっている
2．7.5YR3/4 暗褐色シルト しまっている。上部に焼土が小ブロック状に混入
3．7.5YR3/2 黒褐色シルト ややしまっている。全体に焼土粒が混入

（c－d）
1．2.5YR3/6シルト 焼土硬くしまっている

図版7 FⅠ－1住居跡(2)

黒色処理が施されている。反転実測による口径は21cmと推定される。2～4は底部片で、ロクロからの切り離しが回転糸切りである。底部外面に再調整はみられない。3点とも、内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。出土地点は1がピット底面直上、2・3が埋土下部、4が床面直上である。

甕形土器 5点出土している。5～7は体部下半が欠損している。ともにロクロ使用で、口縁部が短く外傾し、口唇部が直立または内傾している。5は外面が一部ヘラケズリによって再調整されている。7は口径13.7cmと推定され小型である。8・9は底部片で、外面がヘラケズリ、内面がナデで調整されている。出土地点は5・8・9が埋土、6がピット埋土、7が床面直上である。

須恵器

坏形土器 5点出土している。すべてロクロ使用のものである。12・13は底部が、14は口縁部が欠損している。ロクロからの切り離しは11・14が回転糸切り、10が不明である。10は非常に摩耗しているため調整痕があまり残っていないが、ヘラケズリ再調整と推定されるものが、底部外面にみられる。出土地点は13が床面直上、10～12・14が埋土下部である。以上は酸化焔焼成の須恵器である。

坏形土器 15は体部片である。外面はロクロ痕が顕著である。床面直上から出土している。

壺形土器 19は肩部片である。外面は上半がロクロ、下半がヘラケズリで調整されている。20は体部片である。外面上半には横方向のカキメ痕がみられる。21は底部片である。外面はヘラケズリ、内面はハケメで調整されている。16～18は壺形土器の破片であると思われるものである。17・18は外面がロクロ調整後、一部ヘラケズリで再調整されている。出土地点は16・18・21が床面直上、17・19・20が埋土である。

ＦⅠ－２住居跡

遺　構（図版８・９、写真図版６）

本遺構は調査区南端にあり、ＦⅠ－１住居跡の南13mに位置し、西側半分と南東隅は調査区域外にある。検出面は地表面から55～60cm下の褐色シルト層上面である。南壁の一部は南北に走る幅70～80cm、深さ20～25cmのＦⅠ－103溝によって切られている。

検出されている壁の輪郭線から、住居址は角がやや丸味を帯びた方形を呈していると推定される。住居址の南北径は4.15mである。検出されている部分の壁の長さは北壁が1.5ｍ、東壁が2.1ｍ、南壁が2.2ｍである。壁高は北壁で最大15cm、東壁で最大33cm、南壁で最大29cmを測る。

埋土は上半部がにぶい黄褐色シルトのブロックが混じる黒褐色の粘土質シルト、下半部がにぶい褐色・褐色の粘土質シルトのブロックが混じり、壁際では炭化物、焼土粒を多く含む黒褐色シルトで主に構成されている。

床面は大小の凹凸があるが、全体として平坦である。貼り床は施されていない。柱穴、周溝は検出されていない。

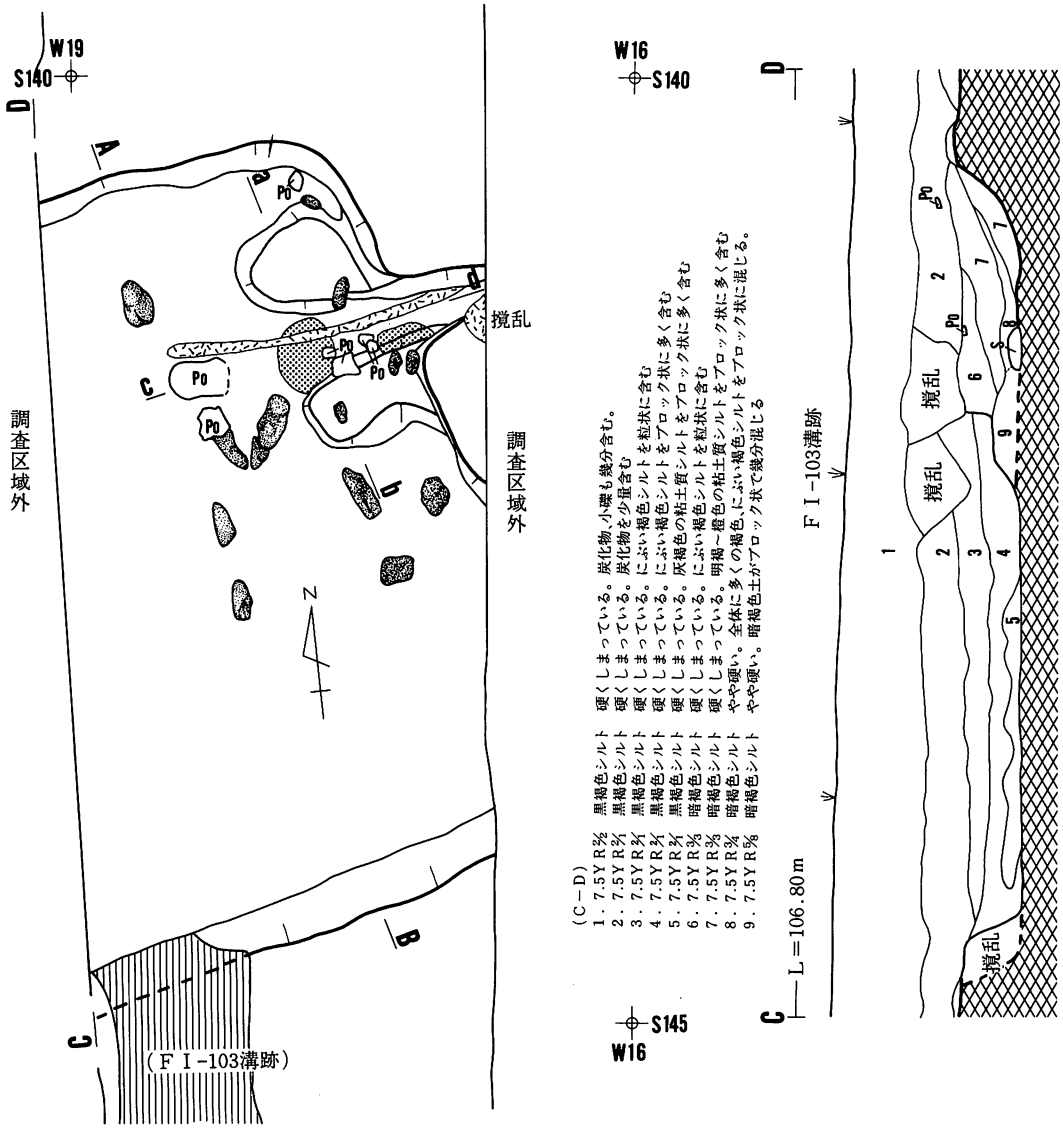
カマドは東壁中央部北寄りに設けられている。カマド本体は崩壊し、袖下半部が僅かに原位置を保っている。袖は長軸径20～31cmの細長い川原礫を数個、内傾させて埋め込み、褐色粘土質シルトのブロックが全体に混じる暗褐色粘土質シルトでまいてつくられている。燃焼部は径約40cmの浅皿状を呈している。焼土の厚さは最大で６cmである。煙出口と煙道の一部は調査区外にあり、検出された部分の煙道の長さは42cmである。煙道の一部に土師器の甕形土器（底部なし）が利用され、煙道は燃焼部から緩やかに立ち上がっている。

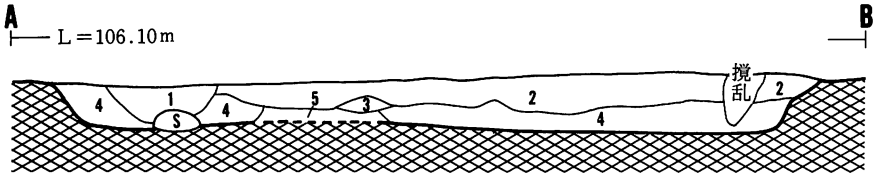
出土遺物　（図版54～57、写真図版51・52）

土師器

坏形土器　10点出土している。22～27は底部、28・29・31は口縁部が欠損している。30は口縁部片である。すべてロクロ使用のもので、内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。体部は緩く内湾しながら立ち上り口縁部に続く。24の口縁部だけはやや外反している。28・29・31はロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整はみられない。出土地点は、22・28～30が床面直上、23・26・31がカマド右袖、24・27がカマド内、25が埋土である。

甕形土器　11点出土している。36・37・39・40は底部が欠損している。38・41は口縁部片、42・43、45～46は底部片である。42・43、45・46の底部以外はすべてロクロ使用のものである。36・37・39・40は口縁部が外傾し、口縁端部が直立している。38は口縁部が外反している。内外面ともロクロ痕が顕著である。41は長胴の器形を示し、口唇部が上下につまみ出されている。

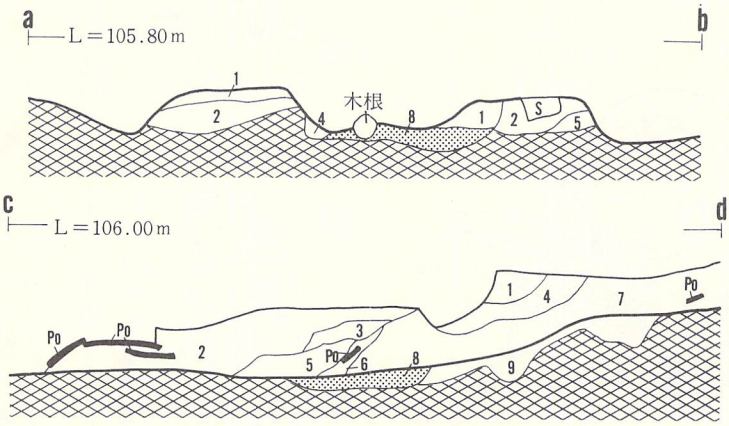




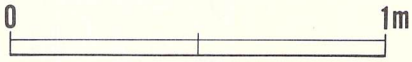
(A－B)
1．10ＹＲ3/2　黒褐色粘土質シルト　非常に硬くしまっている
2．7.5ＹＲ3/2　黒褐色粘土質シルト　土器片を幾分含む
3．7.5ＹＲ2/1　黒色　粘土質シルト
4．7.5ＹＲ3/1　黒褐色粘土質シルト　北壁際では焼土、炭化物を混む
5．7.5ＹＲ3/2　黒褐色粘土質シルト

0　2m

図版８　ＦＩ－２住居跡(1)



（a－b）
1．2.5YR3/3　暗赤褐色粘土質シルト　ややしまっている、焼土塊を多く含む
2．2.5YR2/3　極暗赤褐色粘土質シルト　しまっていない炭化物、焼土粒を含む
3．2.5YR4/4　赤褐色
4．7.5YR8/1　灰白色粘土質シルト　しまっている
5．5 YR5/4　にぶい赤褐色粘土質シルト　しまっている。焼土粒、炭化物を幾分含む



（c－d）
1．7.5YR3/2　黒褐色シルト　しまっている
2．7.5YR3/3　暗褐色シルト　しまっている、炭化物を少量含む
3．7.5YR4/3　褐色粘土質シルト　ややしまっている、幾分焼成を受けている
4．5 YR3/4　暗赤褐色シルト　焼土粒を多く含む
5．5 YR3/2　暗赤褐色シルト　焼土を多く含む
6．5 YR4/3　にぶい赤褐色シルト　焼土土器を含む
7．7.5YR3/2　黒褐色シルト　焼土粒、炭化物を幾分含む

図版9　FⅠ－2住居跡(2)

外面は体部上半がロクロまたはロクロ調整後ヘラケズリ、下半が主に縦方向のヘラケズリで調整されている。内面調整は上半がロクロまたはヘラナデ、下半がヘラナデである。42・43は外面がヘラケズリ、内面がヘラナデで調整されている。43の体部下端には刻線が多くみられる。47は小形の甕形土器の底部で、外面には回転糸切り痕がみられる。出土地点は36・37・40がカマド、38・45・46が床面、39・43が煙道、41・42・47が埋土である。

壺形土器　1点出土している。口縁部と底部が欠損している。体部の器形は球胴である。外面は上半がロクロ、下半がヘラケズリで調整されている。内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。カマド右袖の床面から出土している。

須恵器

坏形土器　34は体部が内湾している。ロクロ切り離しは回転糸切りである。再調整はない。酸化焔焼成の須恵器坏である。

32は体部がやや内湾し、口縁端部が外反している。ロクロからの切り離しは回転糸切である。再調整はない。床面から出土している。

甕形土器　44は丸底のもので、体部上半が欠損している。外面に叩き目痕、内面に当て具痕

がみられる。カマド際の床面から出土している。

33は壺形土器の破片と推定されるものである。内外面はロクロで調整されている。外面の一部はヘラケズリで再調整されている。

陶器

48は台付皿の底部である。内外面に淡黄色の釉がかけられている。埋土下部から出土している。

2．古　墳

ＢⅠ－１号古墳周湟

（図版10、写真図版８）

本遺構は調査区北西部にあり、稲荷神社の入口から南約13mに位置している。表土（23～48cm）、黒褐色シルト層（16～22cm）を取り除いた褐色シルト層の上面で検出されている。掘り込み面は黒褐色シルト層の下位である。周湟は上部を浅い幅の狭いＢⅠ－101溝に切られている。周湟はやや北側に湾曲しながら北西～南東方向にのびていることから、古墳周湟の南西の一部であると推定される。

検出されている周湟の長さは約3.3ｍである。周湟の幅は1.44～1.56m、深さは14～27cmである。底部幅は0.63～1.2ｍで西端に近づくほどに狭くなる。周湟の断面は外側（南側）の壁面が緩く立ち上がり、内側（北側）の壁面が急な角度で立ち上がる。

埋土の大半は上位がにぶい黄橙色火山灰のブロック、下位に褐色シルトの小ブロックが混じる黒褐色シルトで占められ、最下部に黒色または黒褐色シルトが僅かに堆積している。出土遺物はない。

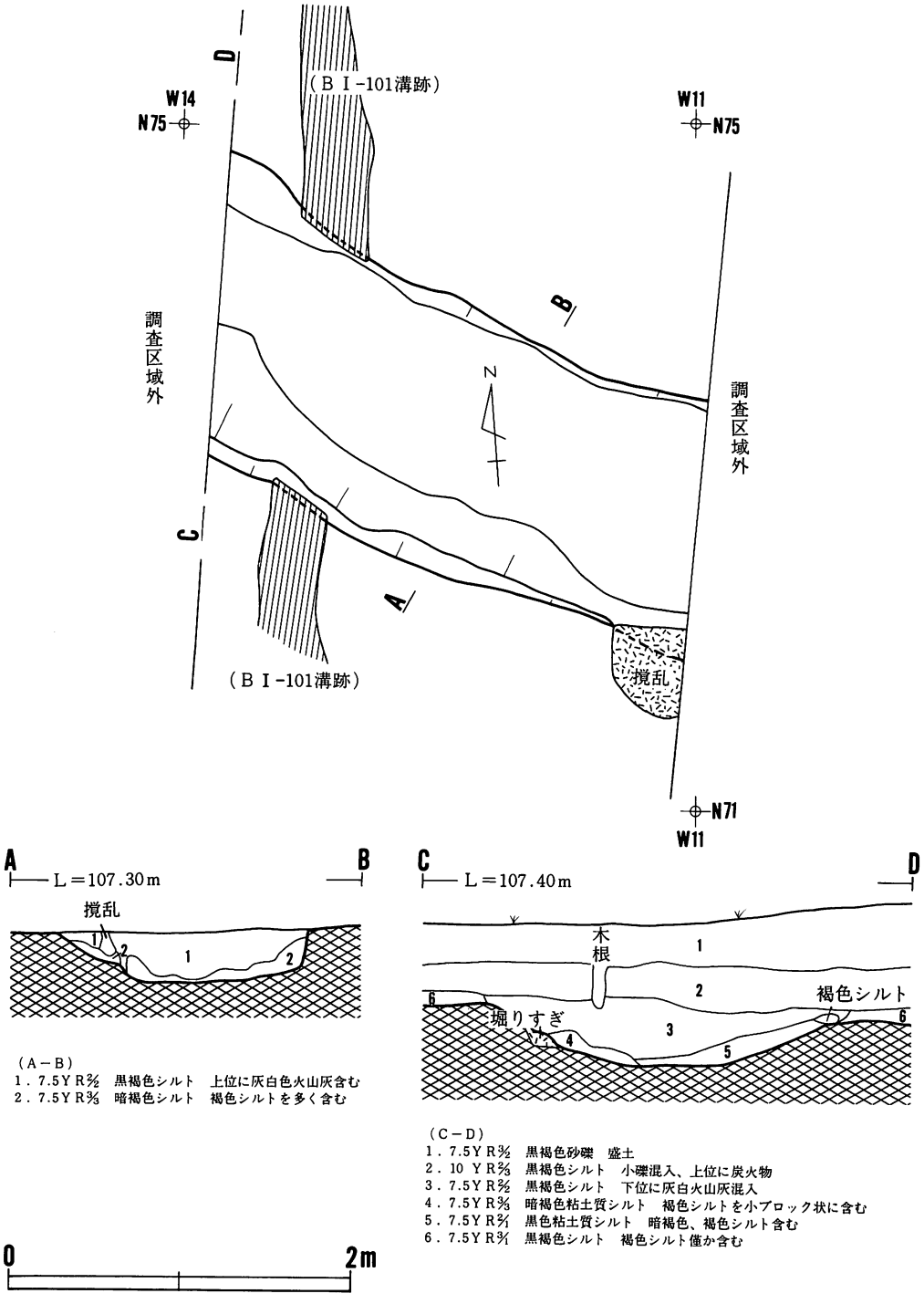
ＤⅠ－１号古墳周湟

（図版11、写真図版９）

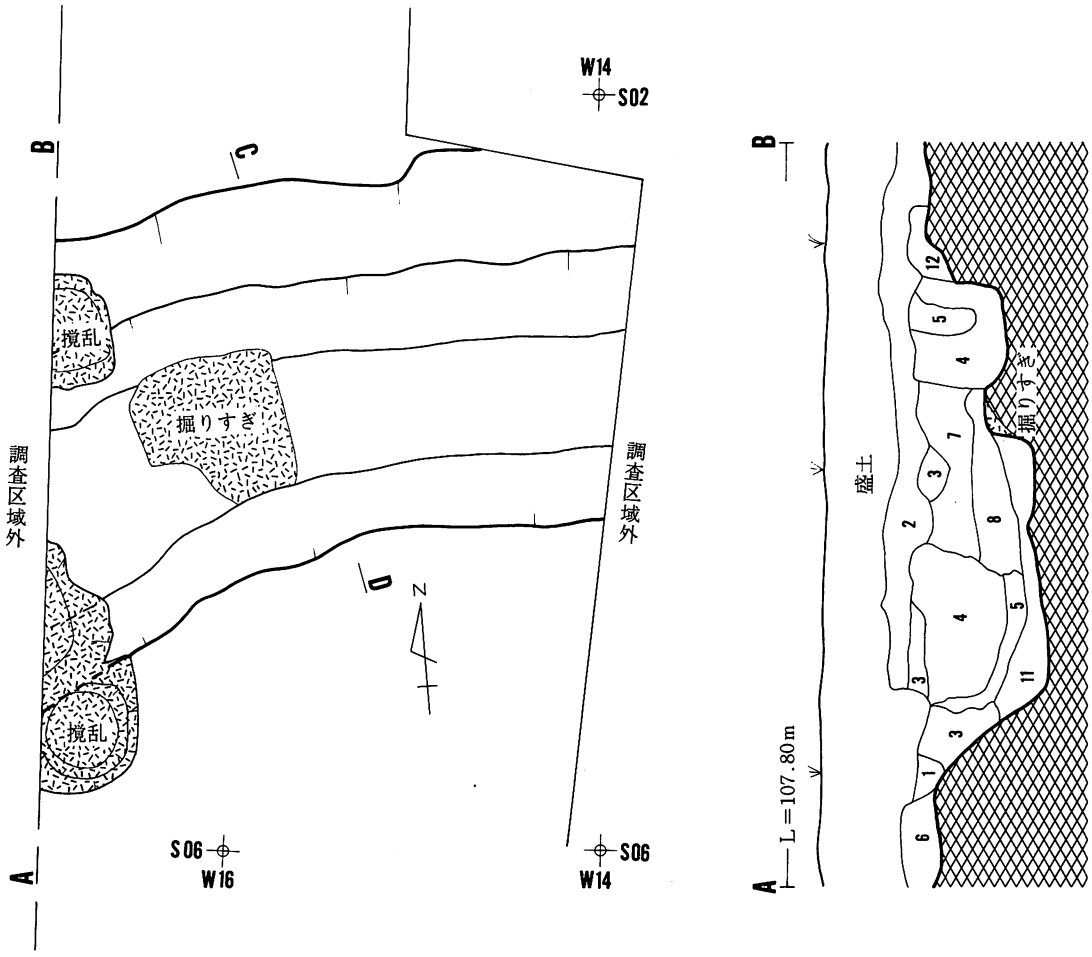
本遺構は調査区中央部西側に位置し、盛土（30～40cm）、黒色シルト（20cm）を取り除いた褐色シルト上面で検出された。周湟は北東方向から東方向に湾曲し、両側が調査区域外にのびている。古墳周湟の北西部分にあたると推定される。

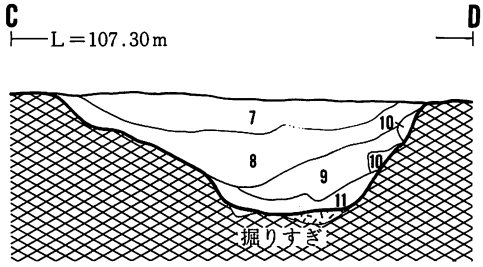
検出された周湟の長さは3.1ｍである。周湟幅は1.8～2.0mで、中央部がやや狭い。深さは0.44～0.61mで、両端が深い。底部幅は0.64～0.86mで、両端が広い。断面は北壁面が緩く南壁面が急な角度で立ち上がっている。

埋土は上位が黒色～黒褐色シルト、中位が全体に褐色シルトが混入している暗褐色シルト、下位が褐色シルト、砂が多く混入している暗褐色シルトで構成されている。出土遺物はない。



図版10　ＢＩ－１号古墳周湟



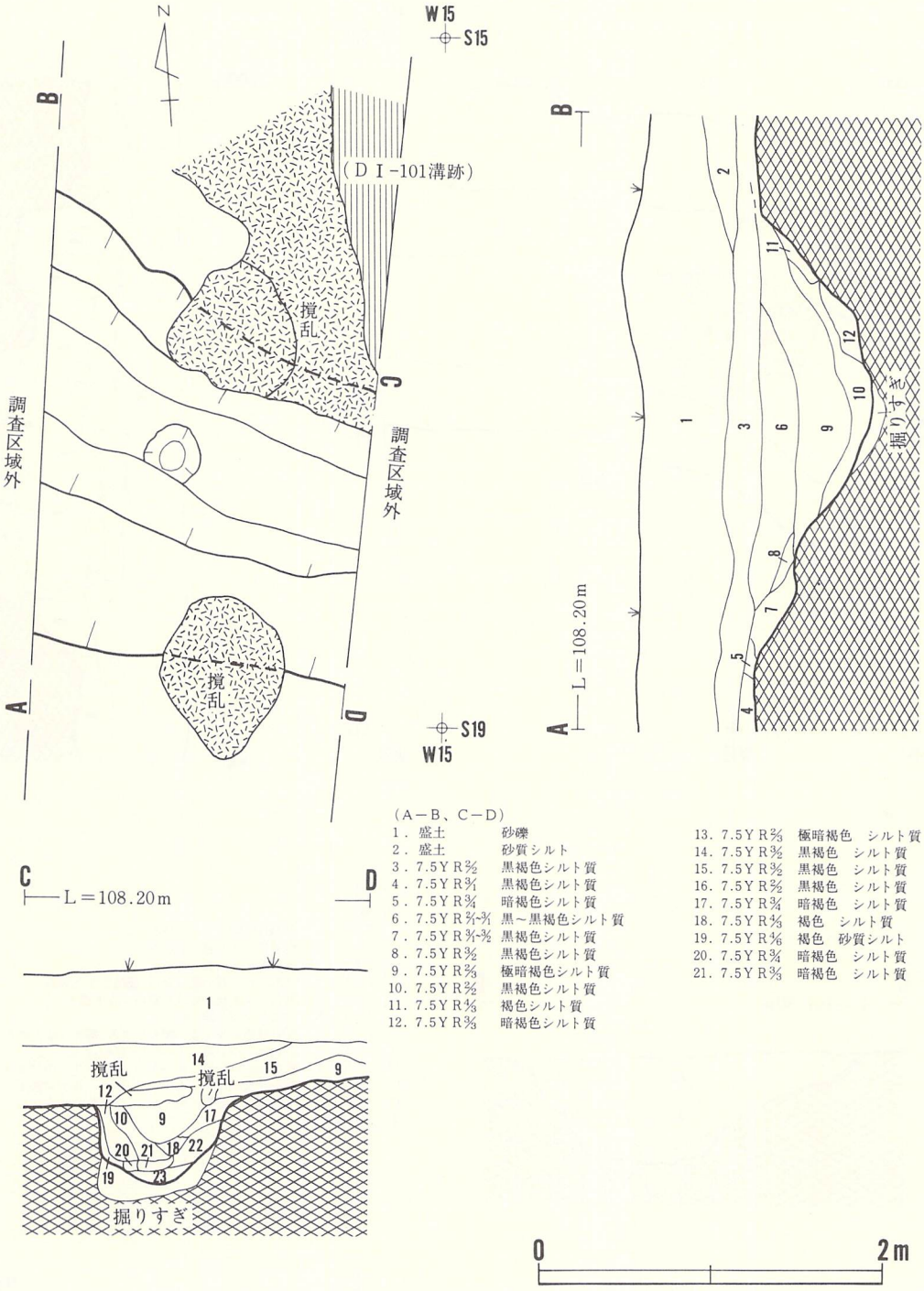


（A－B、C－D）

1．盛土
2．7.5YR3/2　黒褐色砂質シルト　硬くしまる
3．7.5YR5/2　黒褐色シルト質　柔らかい
4．7.5YR3/1　黒褐色シルト質　硬くしまる
5．7.5YR2/1　黒色シルト質　柔らかい、褐色シルト含む
6．7.5YR2/1　黒色シルト質　全体に褐色シルト混入
7．7.5YR3/1　黒褐色シルト質　硬い
8．7.5YR3/3　極暗褐色シルト質　硬くしまる、褐色シルト含む
9．7.5YR3/2　黒褐色シルト質　柔らかい、砂粒混入
10．7.5YR3/3　暗褐色シルト質　柔らかい、褐色シルトのブロック含む
11．7.5YR5/3　褐色砂質シルト　柔らかい、砂とシルトの混土
12．7.5YR3/2　黒褐色シルト質　柔らかい、暗褐色シルト含む
①～⑤は撹乱部

0　2m

図版11　ＤＩ－１号古墳周湟



（A－B、C－D）

1．盛土　砂礫
2．盛土　砂質シルト
3．7.5ＹＲ2/2　黒褐色シルト質
4．7.5ＹＲ3/1　黒褐色シルト質
5．7.5ＹＲ3/4　暗褐色シルト質
6．7.5ＹＲ2/1-3/1　黒～黒褐色シルト質
7．7.5ＹＲ3/1-3/2　黒褐色シルト質
8．7.5ＹＲ3/2　黒褐色シルト質
9．7.5ＹＲ2/4　極暗褐色シルト質
10．7.5ＹＲ3/2　黒褐色シルト質
11．7.5ＹＲ3/4　褐色シルト質
12．7.5ＹＲ3/3　暗褐色シルト質
13．7.5ＹＲ2/3　極暗褐色　シルト質
14．7.5ＹＲ3/2　黒褐色　シルト質
15．7.5ＹＲ3/2　黒褐色　シルト質
16．7.5ＹＲ3/2　黒褐色　シルト質
17．7.5ＹＲ3/4　暗褐色　シルト質
18．7.5ＹＲ4/3　褐色　シルト質
19．7.5ＹＲ4/6　褐色　砂質シルト
20．7.5ＹＲ3/4　暗褐色　シルト質
21．7.5ＹＲ3/3　暗褐色　シルト質

図版12　ＤＩ－２号古墳周湟

ＤⅠ－２号古墳周湟

（図版12、写真図版10）

本遺構は調査区中央部西側にあり、ＤⅠ－１号古墳周湟の南12m に位置している。盛土（40cm）を取り除き、黒褐色シルト（20cm）を掘り下げた褐色シルトの上面で検出された。北側の一部は現代の攪乱を受け、北壁上面が破壊されている。検出された周湟は古墳周湟の南西部の一部分にあたると推定される。

検出されている周湟の長さは 2.1 ｍである。両端は調査区域外にのびている。周湟の幅は1.4ｍ、深さは 0.4 ｍである。底部幅は0.44～0.50ｍである。断面の形状は緩い「U」字形を呈している。

埋土は上位が黒色～黒褐色シルト、中位が褐色シルトをブロック状に混入する極暗褐色～暗褐色シルト、下位が褐色シルトと黒色シルトがブロック状に混じる黒褐色シルトで占められている。そのほか、南壁面直上には暗褐色シルト～褐色シルトが再堆積している。出土遺物はない。

ＤⅠ－３号古墳周湟

（図版13、写真図版11）

本遺構は調査区中央部西側にあり、ＤⅠ－２号古墳周湟の南５ｍに位置している。暗褐色シルトの盛土（32～40cm）と極暗褐色シルト層（16～20cm）を取り除いた褐色シルト層の上面で検出されている。周湟は東西方向に走る現在使用されている排水管の部分を除いて、精査を行った。南壁の一部が現代の攪乱によって破壊されている。周湟は幾分弧状を呈し、その両端が調査区域外へのびている。周湟の北東部にあたると推定される。

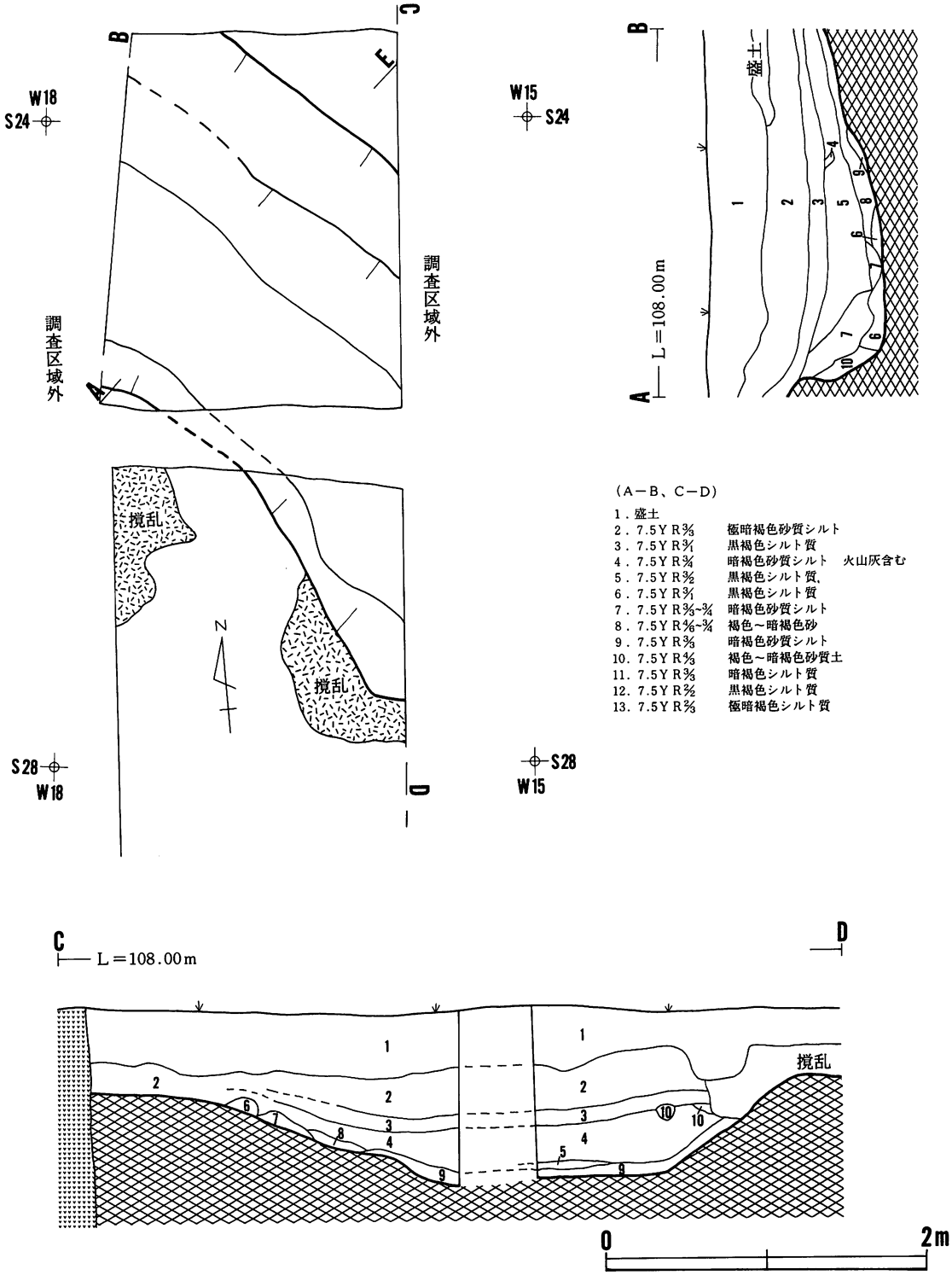
検出されている周湟の長さは2.1ｍ、深さは0.51～0.59ｍである。底部幅は0.92～1.32ｍで、東端が広い。断面の形状は緩い「U」字形を呈している。南壁面が北壁面よりもやや急な勾配をしている。

埋土は上位が黒褐色シルト、中位が黄褐色～にぶい黄褐色の火山灰が小ブロック状に混じる暗褐色シルト、下位が黒褐色シルトと褐色砂とをブロックで混じる暗褐色砂質シルトで占められている。埋土は自然堆積の様相を呈している。出土遺物はない。

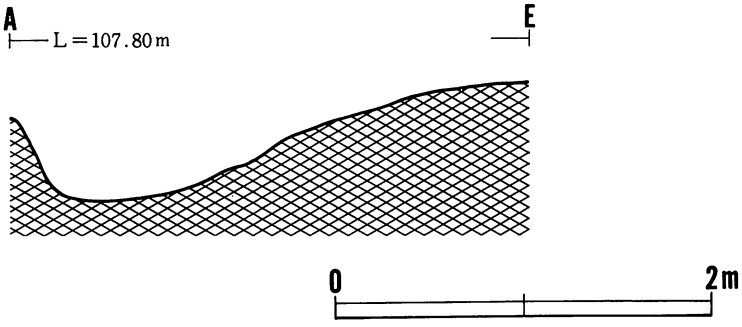
ＥⅠ－１号古墳周湟

（図版15、写真図版12）

本遺構は調査区中央部（南半）西側に位置している。盛土（18cm）、暗褐色シルト層（22cm）を除去した褐色シルト層の上面で検出された。周湟は弧状を呈し東端が調査区域外へのびてい



図版13　ＤＩ－３号古墳周湟（１）



図版14　ＤⅠ－３号古墳周湟（２）

る。南壁の東半分は現代の攪乱を受け破壊されている。検出された周湟は古墳周湟の南東部にあたると推定されている。

検出された周湟の長さは2.9ｍである。幅は１ｍ前後と推定される。深さは７～51cmで、西端にいくほどに浅くなる。西端はやや丸味を帯びて閉じている。断面の形状はやや緩い「U」字形を呈していたと思われる。

埋土は暗赤褐色砂と黒色シルトの混合土で、大半は小礫がわずかに混入する暗褐色砂質土で占められている。出土遺物はない。

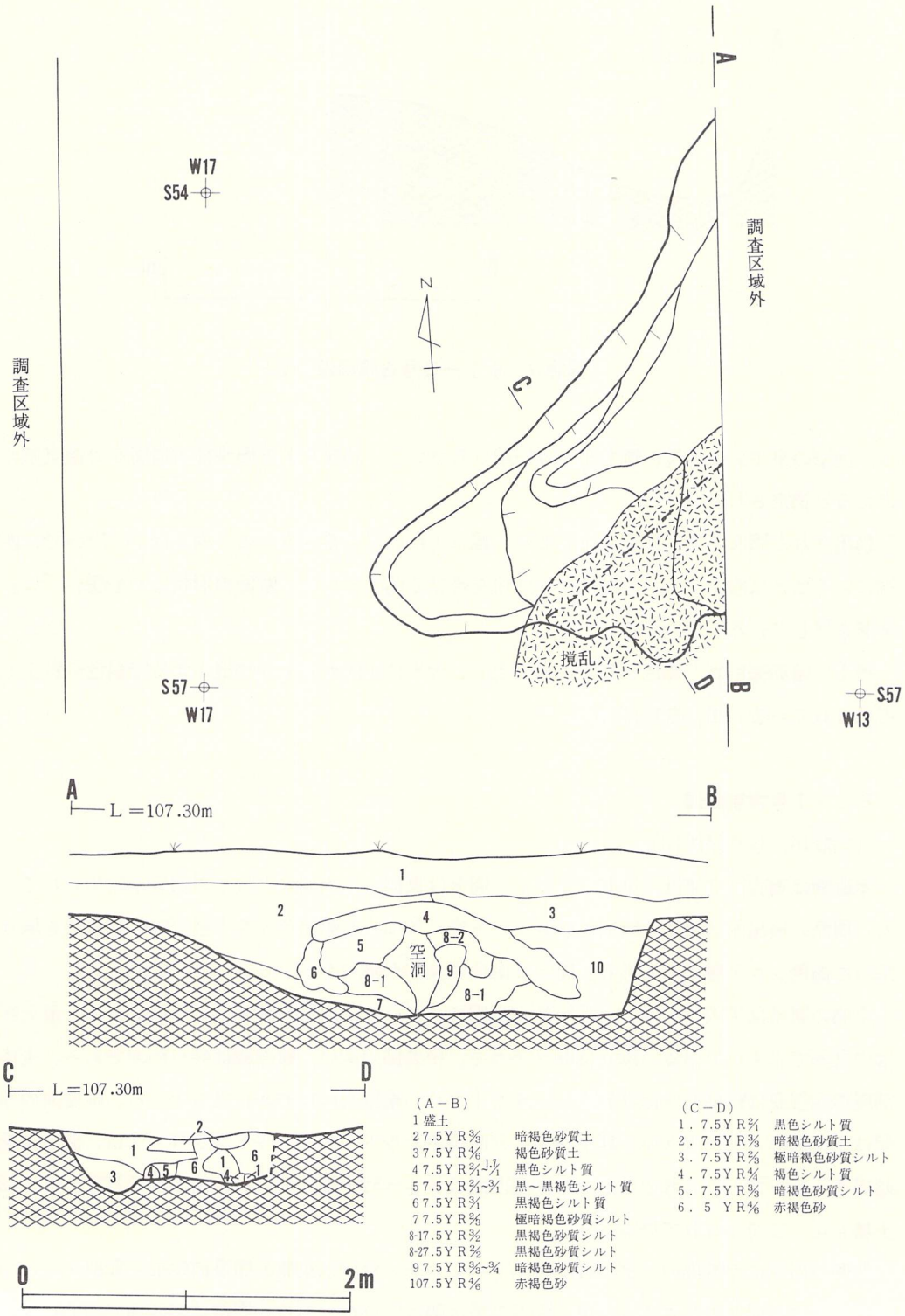
ＢⅡ－１号古墳周湟

（図版16、写真図版13）

本遺構は調査区北東部に位置している。周湟は東側から南側にかけての部分が検出されている。周湟の検出面は表土の暗褐色砂質シルト層（20cm）と暗褐色シルト層（24～32cm）を取り除いた褐色シルト層上面である。周湟は南側中央部が跡切れている。

東側の周湟は半円形を呈し、北端部が先細りしている。周湟の長さは約６ｍである。最大幅は中央部で1.4ｍである。深さは28～36cmで、中央部が深い。底部幅は48～76cmである。主体部側の西壁面は底部からほぼ直立して立ち上がり、東壁面は緩やかに立ち上がる。両壁面の勾配は中央部ほど差が大きい。埋土は大半が暗褐色シルトや褐色シルトがブロック状に混じる極暗褐色シルトで占められている。中央部西側はＢⅡ－52土坑に切られ、南端部はＢⅡ－61・62土壙を切ってつくられている。

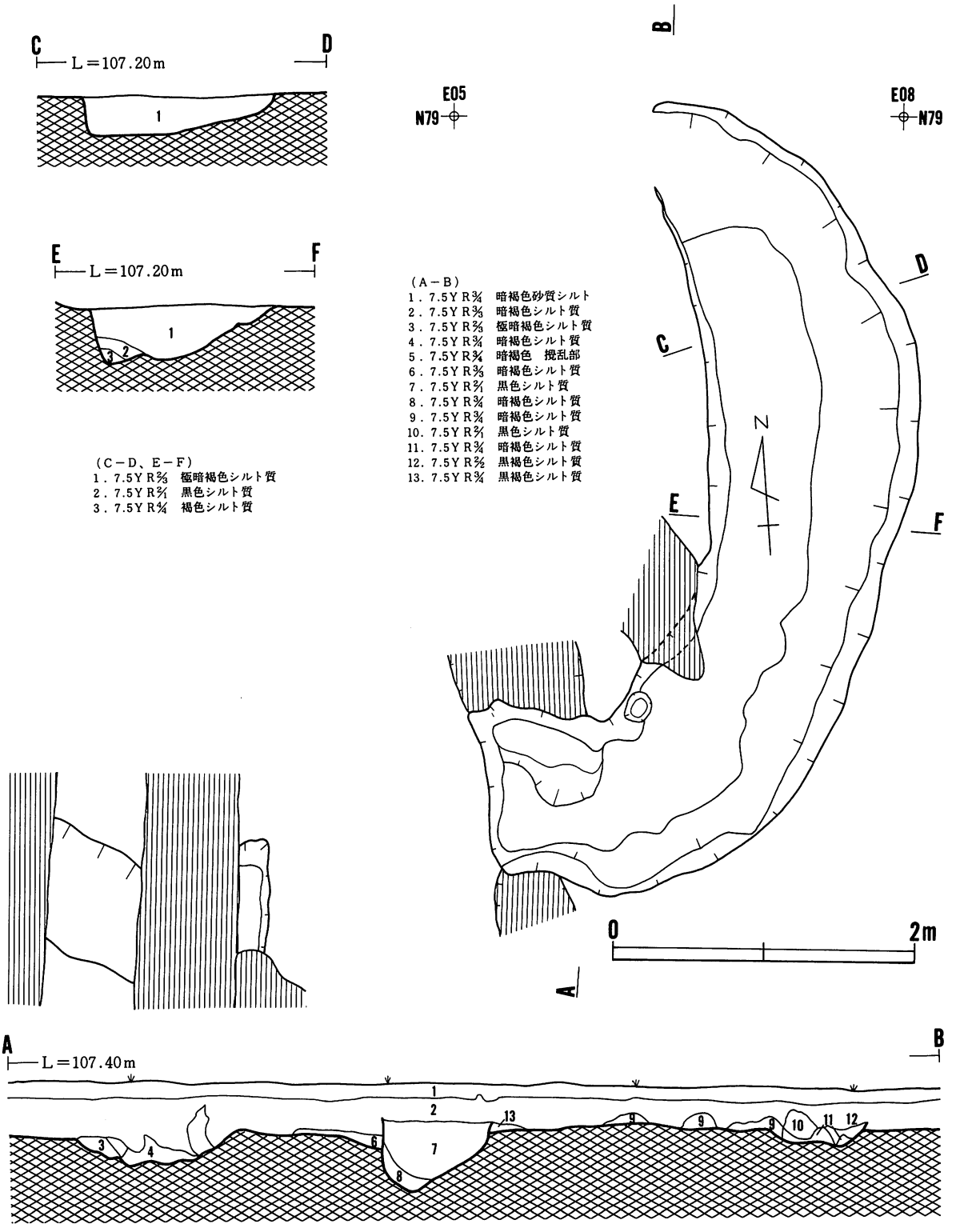
西側の周湟は南端部の一部だけが検出されている。形状は東側の周湟南端部と類似する。検出されている周湟の長さは1.5ｍ、周湟の最大幅は0.72mである。周湟は幅60cmで南北に国道４号の側溝によって切られている。



（A－B）
1 盛土
2 7.5YR3/3 暗褐色砂質土
3 7.5YR4/6 褐色砂質土
4 7.5YR2/1~1/1 黒色シルト質
5 7.5YR2/1~3/1 黒～黒褐色シルト質
6 7.5YR3/1 黒褐色シルト質
7 7.5YR2/3 極暗褐色砂質シルト
8-1 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト
8-2 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト
9 7.5YR3/3~3/4 暗褐色砂質シルト
10 7.5YR4/6 赤褐色砂

（C－D）
1．7.5YR2/1 黒色シルト質
2．7.5YR3/3 暗褐色砂質土
3．7.5YR2/3 極暗褐色砂質シルト
4．7.5YR3/4 褐色シルト質
5．7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト
6．5 YR4/6 赤褐色砂

図版15　ＥＩ－１号古墳周湟



図版16　BⅡ－1号古墳周溝

東側周湟の南端部の埋土から、土師器甕形土器の小破片が数点出土している。外面はハケメ、内面はナデ調整されている。

BⅡ－2号古墳周湟

（図版17、写真図版14）

本遺構は調査区北東部にあり、BⅡ－1号古墳の南東3mに位置している。検出面は表土の黒色シルト（20～35cm）、黒褐色シルト層（12～24cm）の下位、褐色シルト層上面である。検出された周湟は古墳周湟の西側の部分にあたる。大半は調査区外の東側の畑地にある。

周湟の長さは6.2m、幅は1.52～1.7mである。深さは10～45cmで、中央部が深く、北端部が浅い。底部の幅は1.09～1.24mである。底面は凹凸がある。断面は東壁面が急な角度で立ち上がるのに対して、西壁面は緩やかに立ち上がる。

埋土は上位が黒色シルト、中位が下半部に褐色シルトの小粒が多く混じる暗褐色シルト、下位が全体に褐色シルトを粒状に多く混じる黒褐色土で占められ、上位と中位の間に、褐色の細粒浮石がブロック、または帯状に堆積している。

BⅡ－3号古墳周湟

（図版18、写真図版15）

本遺構は調査区北端部東側に位置している。北の段丘崖から南に約20mにある。検出面は表土（約40cm）を取り除いた褐色シルト層上面である。検出されている周湟は西側の一部分で半円形を呈し、東側半分以上は調査区外の宅地へのびている。周湟は北部が径2m×1.5m、深さ50cm前後の規模で木根により攪乱を受けている。他の遺構との重複関係はない。

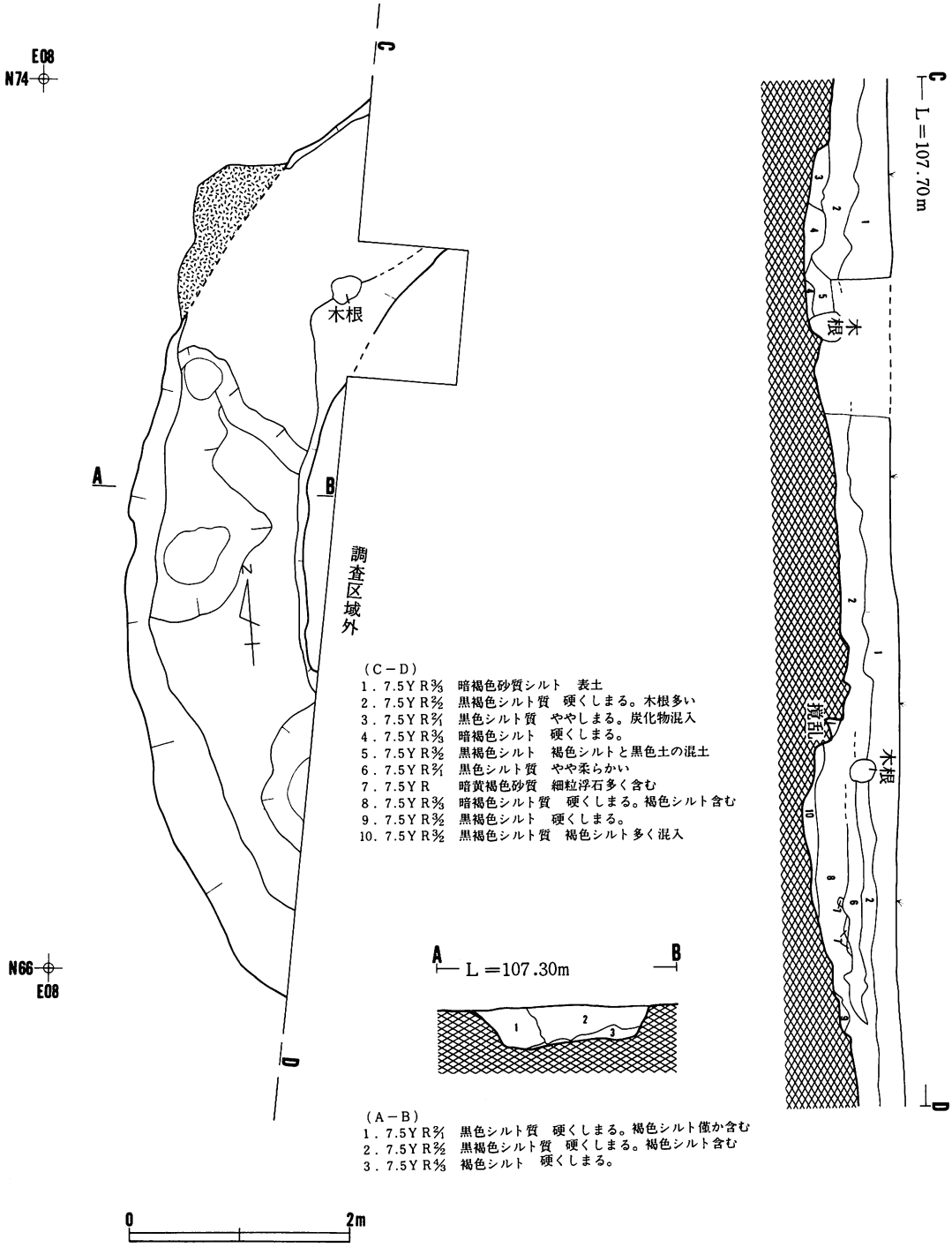
検出されている周湟の長さは約5mである。周湟の幅は1.1～1.3mで中央部がやや狭い。深さは12～26cmで中央部が幾分浅い。底部幅は0.9～1.1mである。周湟の断面は皿状を呈しているが、外側の壁が内側の壁より緩く立ち上がっている。

埋土は主に褐色シルトが小ブロックまたは小粒状に混じる黒褐色シルトで占められる。出土遺物はない。

BⅡ－4号古墳周湟

（図版19、写真図版16）

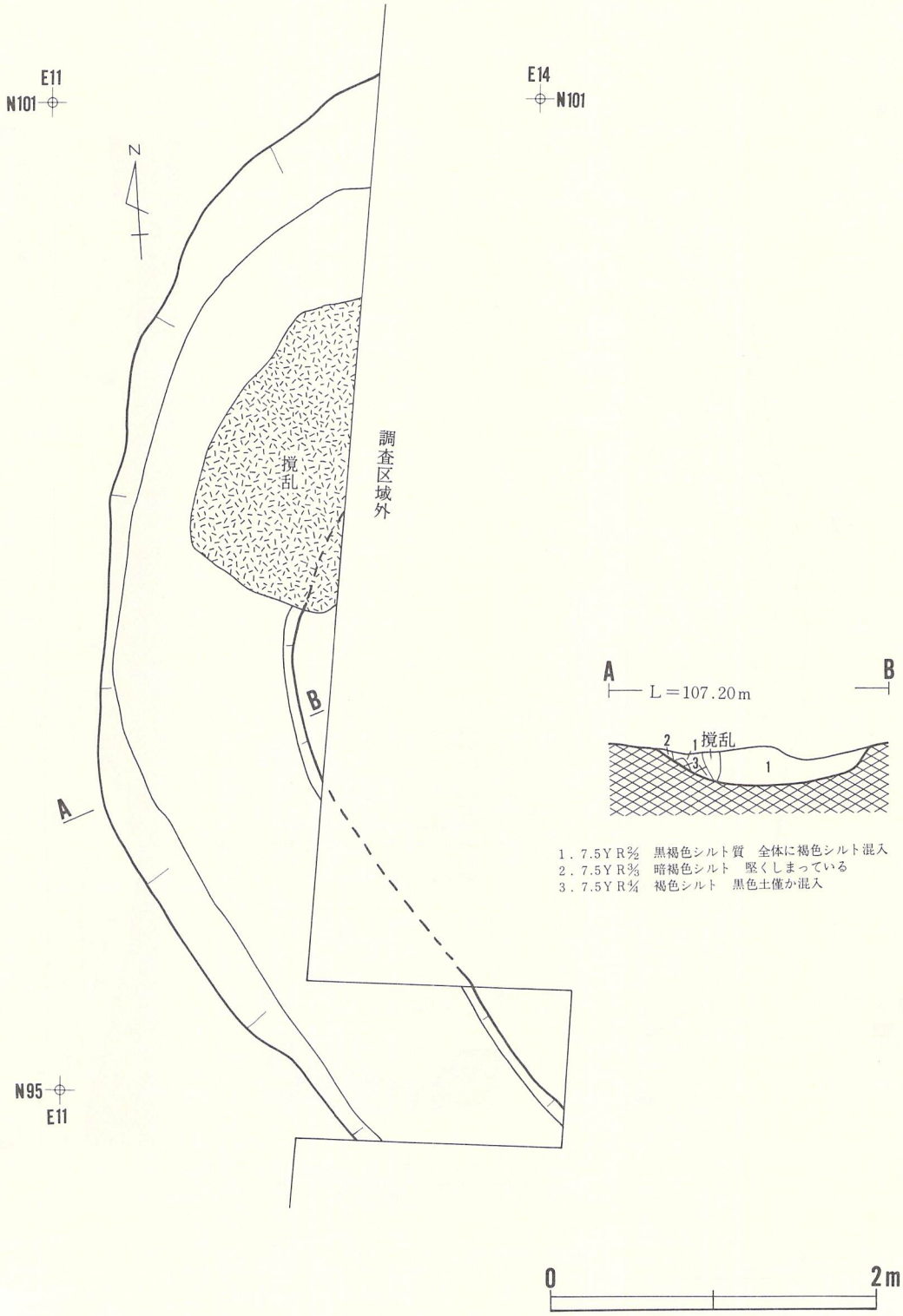
本遺構は調査区北部東側にあり、BⅡ－2号古墳周湟の南約20mに位置している。表土（30～34cm）と下位の黒褐色シルト層（16～22cm）を掘り下げた褐色シルト上面で検出された。周湟の西側の一部が検出されているもので、大半は調査区外の畑地にある。外壁の輪郭線や外壁



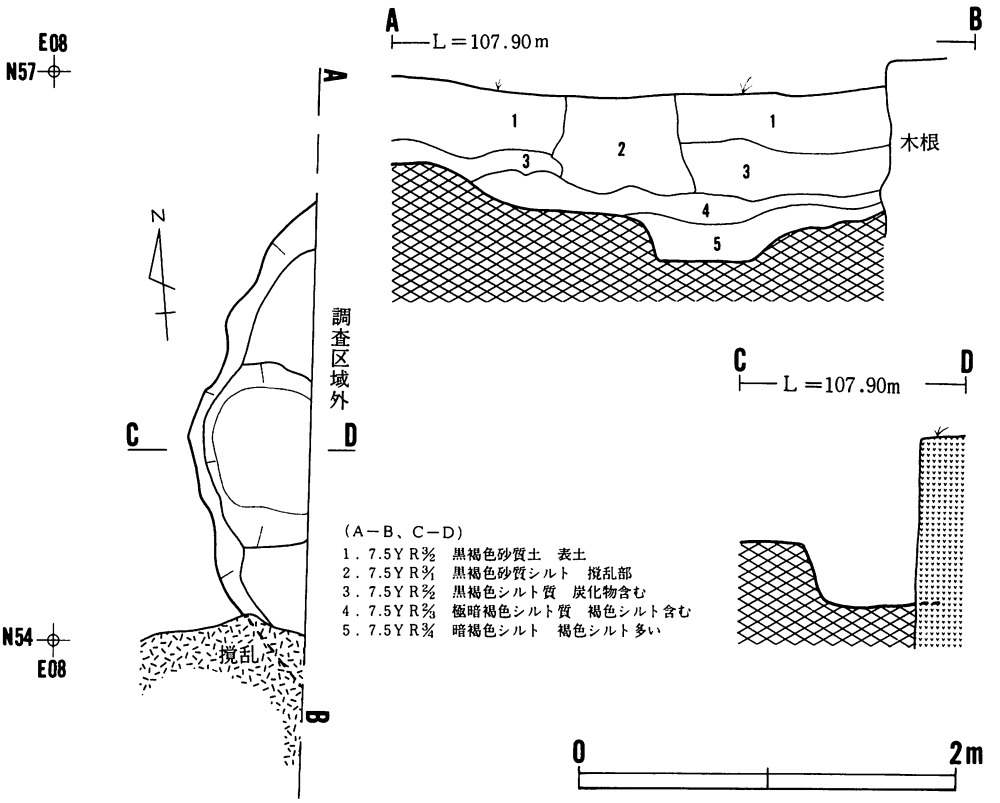
（C－D）
1．7.5YR3/3　暗褐色砂質シルト　表土
2．7.5YR3/2　黒褐色シルト質　硬くしまる。木根多い
3．7.5YR3/1　黒色シルト質　ややしまる。炭化物混入
4．7.5YR3/3　暗褐色シルト　硬くしまる。
5．7.5YR3/2　黒褐色シルト　褐色シルトと黒色土の混土
6．7.5YR3/1　黒色シルト質　やや柔らかい
7．7.5YR　暗黄褐色砂質　細粒浮石多く含む
8．7.5YR3/3　暗褐色シルト質　硬くしまる。褐色シルト含む
9．7.5YR3/2　黒褐色シルト　硬くしまる。
10．7.5YR3/2　黒褐色シルト質　褐色シルト多く混入

（A－B）
1．7.5YR2/1　黒色シルト質　硬くしまる。褐色シルト僅か含む
2．7.5YR3/2　黒褐色シルト質　硬くしまる。褐色シルト含む
3．7.5YR4/3　褐色シルト　硬くしまる。

図版17　BⅡ－2号古墳周湟



図版18　BⅡ－3号古墳周湟



図版19　BⅡ－4号古墳周湟

の立ち上がり方、埋土などから、古墳周湟の一部と断定したものである。南端部が木根により撹乱を受けている。他の遺構との重複はない。

周湟は外壁側の一部が検出されているだけなので、周湟の幅、深さなどの詳細については不明である。検出された部分の最大幅は64cmである。深さは中央部が最も深く、36cmを測る。

埋土は上半部が全体に褐色シルトが小粒状に混入する極暗褐色シルト、下半部が褐色シルトがブロック状に混じる暗褐色シルトで構成されている。出土遺物はない。

BⅡ－5号古墳周湟

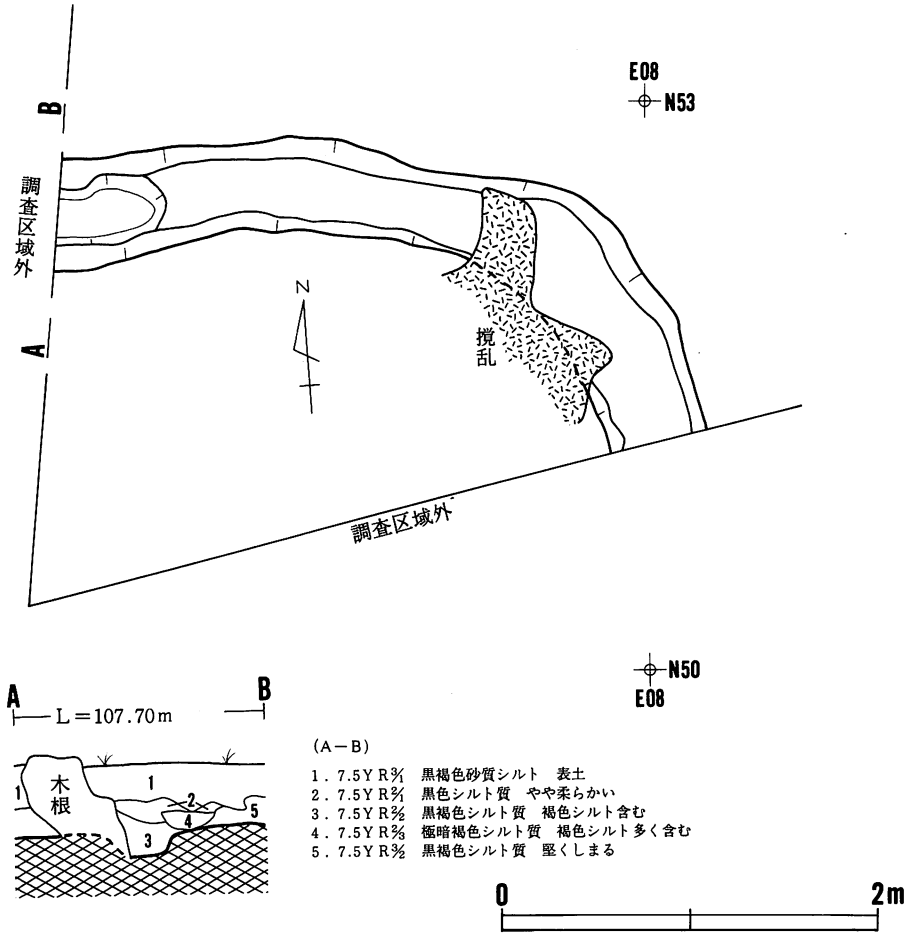
（図版20、写真図版17）

本遺跡は調査区北部にあり、BⅡ－4号古墳周湟の南西約2mに位置している。表土（22～

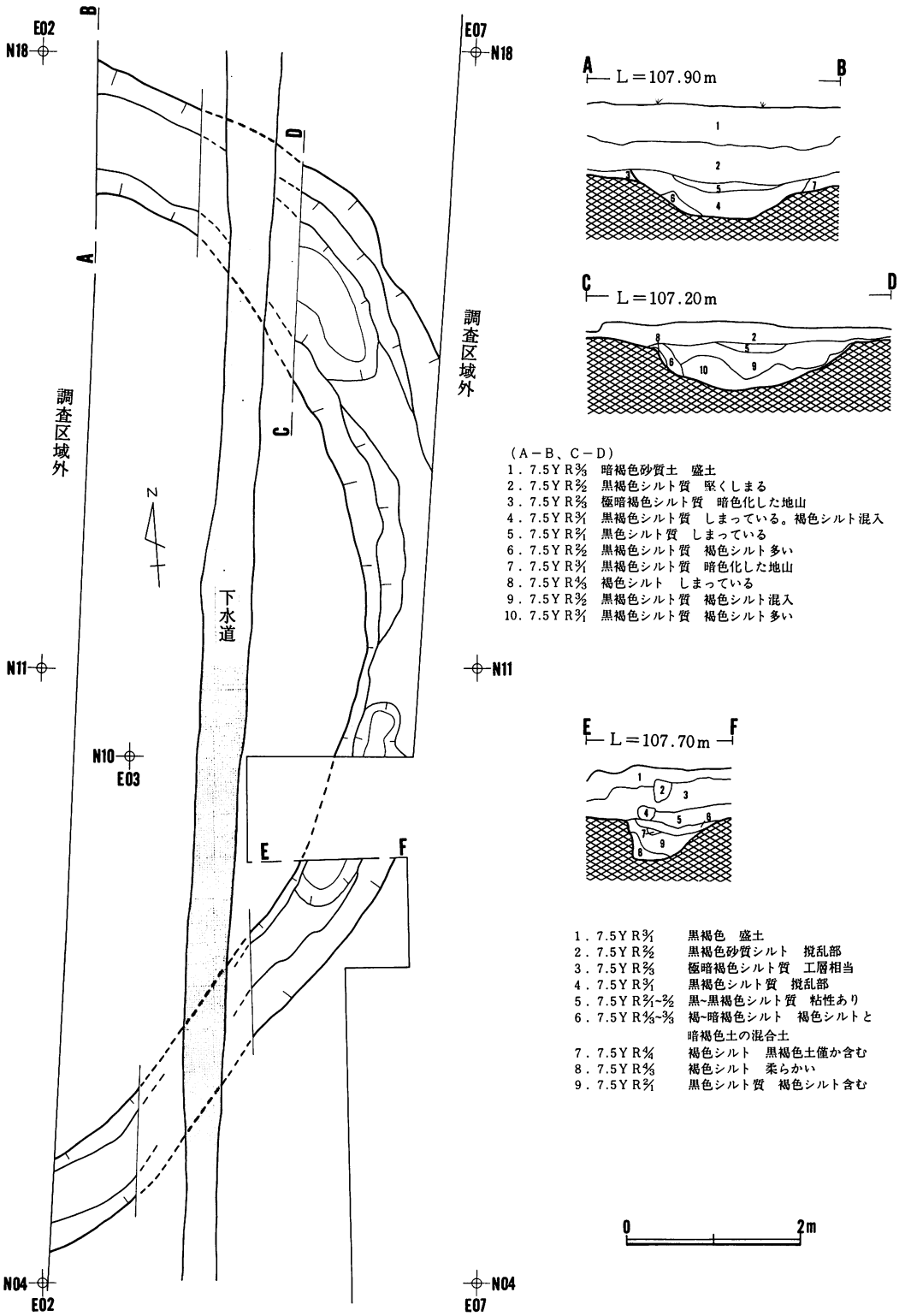
24cm）、黒褐色シルト層（22～28cm）を取り除いた褐色シルト層の上面で検出されている。掘り込み面は黒褐色シルト層の面と思われる。

周湟は東西方向から東側で湾曲して南北方向にのびている。検出されている部分は古墳周湟の北東部にあたると推定される。周湟の幅は50～55cm、深さは３～11cmである。底部幅は24～45cmである。底面は幾分凹凸がある。検出されている周湟の長さは約3.7m である。断面は「U」字形を呈している。

埋土は上半部が黒色シルト、下半部が全体に褐色シルトの小粒が混じる黒褐色シルトで構成される。出土遺物はない。



図版20　BⅡ－５号古墳周湟



（A－B、C－D）
1．7.5YR3/3　暗褐色砂質土　盛土
2．7.5YR3/2　黒褐色シルト質　堅くしまる
3．7.5YR2/3　極暗褐色シルト質　暗色化した地山
4．7.5YR3/1　黒褐色シルト質　しまっている。褐色シルト混入
5．7.5YR2/1　黒色シルト質　しまっている
6．7.5YR3/2　黒褐色シルト質　褐色シルト多い
7．7.5YR3/1　黒褐色シルト質　暗色化した地山
8．7.5YR2/3　褐色シルト　しまっている
9．7.5YR3/2　黒褐色シルト質　褐色シルト混入
10．7.5YR3/1　黒褐色シルト質　褐色シルト多い

1．7.5YR3/1　黒褐色　盛土
2．7.5YR3/2　黒褐色砂質シルト　撹乱部
3．7.5YR2/3　極暗褐色シルト質　工層相当
4．7.5YR3/1　黒褐色シルト質　撹乱部
5．7.5YR2/1~3/2　黒~黒褐色シルト質　粘性あり
6．7.5YR4/3~3/3　褐~暗褐色シルト　褐色シルトと暗褐色土の混合土
7．7.5YR4/4　褐色シルト　黒褐色土僅か含む
8．7.5YR4/3　褐色シルト　柔らかい
9．7.5YR2/1　黒色シルト質　褐色シルト含む

図版21　CⅡ－1号古墳周湟

CⅡ－1号古墳周湟

（図版21、写真図版18）

本遺構は調査区中央部東側にあり、CⅡ－5号古墳周湟の南約30m に位置している。盛土(30～36cm）、黒褐色シルト層（25～35cm）を取り除いた褐色シルト層上面で検出された。検出された部分は東側3分の1である。

幅は1.36～1.64cm、北東隅が最も広く南側にいくほどに狭くなる。深さは最も深い北東隅で50cm、最も浅い南で12cmである。底部幅は36～ 122 cmである。検出されている周湟の長さは約15m、外径は13～14mと推定される。周湟の断面は北が狭い「U」字形を呈し、南東隅が内側のみ鋭く立ち上がる形を呈している。

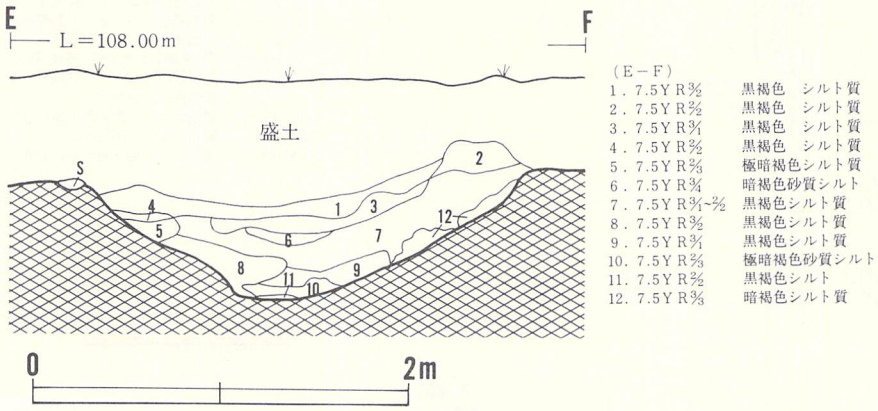
北側の埋土は大半が全体に褐色シルトを小粒状に混じる黒褐色シルトで占められ、わずか最上部に黒色シルトが堆積している。他の遺構との重複関係はない。出土遺物はない。

DⅡ－1号古墳周湟

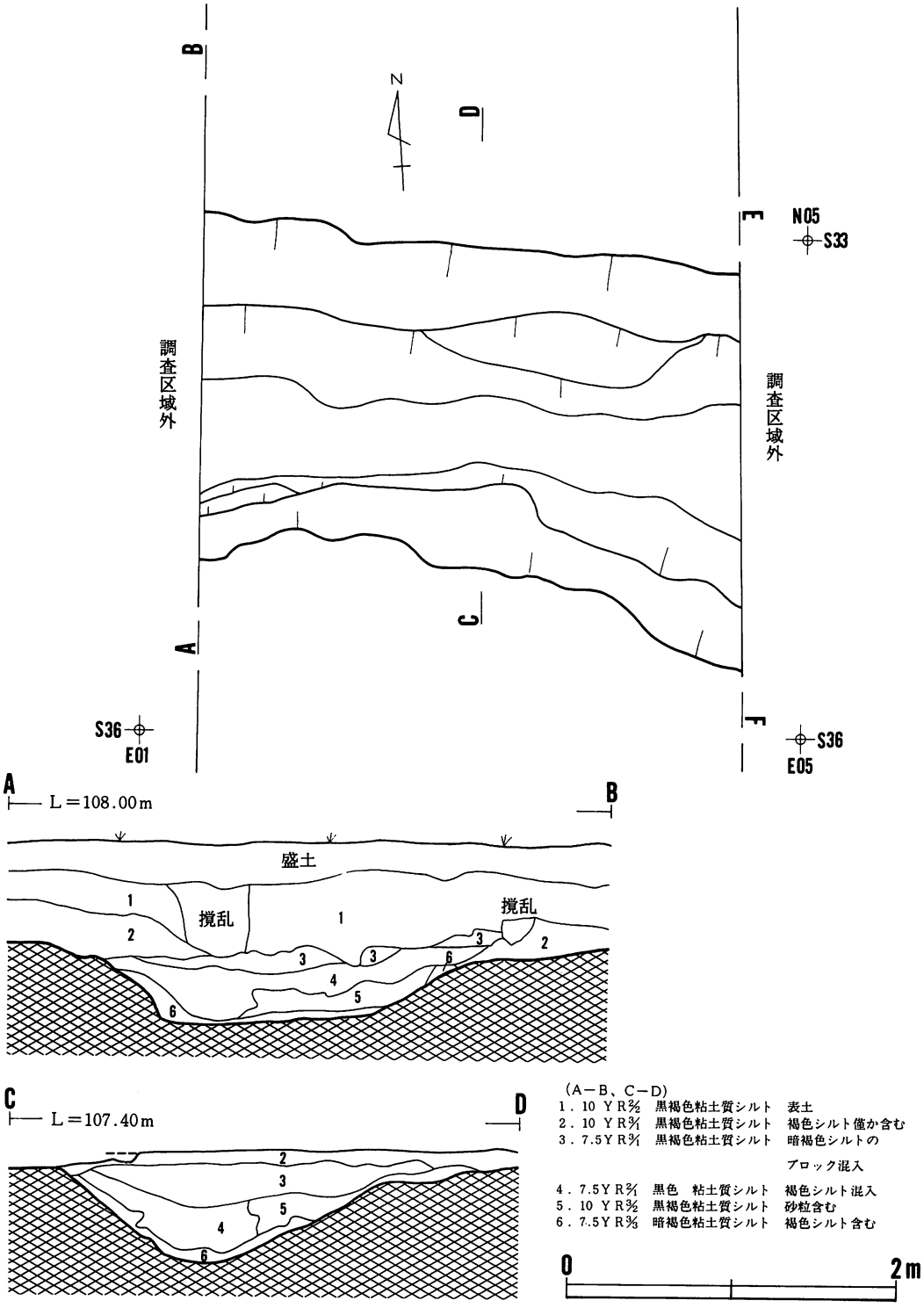
（図版22、写真図版19）

本遺構は調査区中央部東側にあり、CⅡ－1号古墳周湟の南約37mに位置している。盛土(42～67cm）、黒褐色シルト層（16～24cm）を取り除いた褐色シルト層の上面で検出されている。周湟は東西方向にのび、両端が南側に湾曲しながら調査区外へのびている。検出されている周湟は古墳周湟の北側の部分であると推定される。

幅は1.77～2.31m、深さは39～60cmである。東側によるほどに周湟は広く深くなる。底部幅



図版22　DⅡ－1号古墳周湟（1）



図版23　DⅡ－1号古墳周湟(2)

は42～80cmである。周湟の内部の壁面はやや急な立ち上がりをするのに対し、外側の壁面は緩やかな立ち上がりをしている。

埋土は上部が暗褐色シルトをブロックで混じる黒褐色シルト、中部が褐色シルトを粒状に混じる黒色シルト、下部が砂を幾分混じる黒褐色シルトで占められている。他の遺構との重複関係はない。出土遺物はない。

ＥⅡ－１号古墳周湟

（図版24、写真図版20）

本遺構は調査区中央東側にあり、ＤⅡ－１号古墳周湟南約11mに位置している。検出された部分は３ｍ×１ｍであるが、断面、形状、埋土などから、古墳周湟の一部と断定した。盛土(50～54cm）、黒褐色シルト層（28～35cm）を取り除いた褐色シルト層の上面で検出されている。東端は攪乱を受け、南西側の一部は電柱があるため精査できなかった。

検出された周湟は古墳周湟の北側の部分にあたると推定される。幅は約1.3ｍ、深さは28～50cmである。底部径は1.06ｍである。断面は内側壁面がやや急な角度で立ち上がり、外側の壁面が緩い勾配で立ち上がる形状を呈している。

埋土は上位が極暗褐色砂質シルト、中位が全体に褐色シルトをわずかに混じる黒褐色シルト、下位が暗褐色シルトで構成されている。出土遺物はない。

ＥⅡ－２号古墳周湟

（図版25、写真図版21）

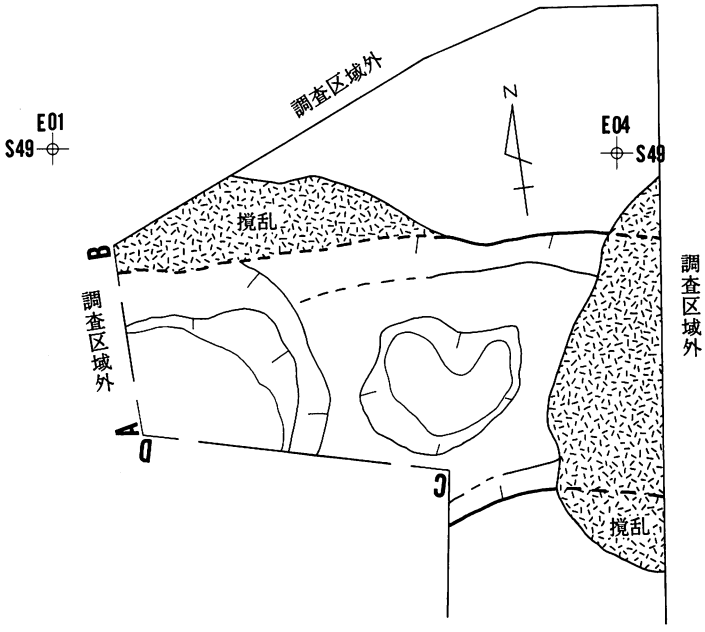
本遺構は調査区東側にあり、ＥⅡ－１号古墳周湟の南約３ｍに位置している。盛土（24～42cm）、黒褐色シルト層（30～44cm）を取り除いた褐色シルト層の上面で検出されている。南側はＥⅡ－103溝に切られている。

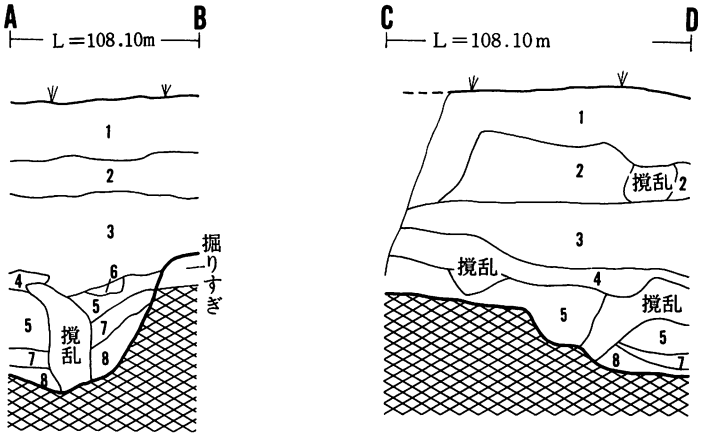
検出された周湟は西側の一部で、南北径 4.9ｍ、東西径 0.8ｍである。幅は不明である。中央部が最も深く、壁に近づくにつれて浅くなる。最大深は約44cmである。外側の壁面はやや緩い角度で立ち上がる。

埋土は大きく３層に分けられる。上位が黒褐色シルト、中位が黒褐色シルト、下位が全体に褐色シルトが小粒状に混じる極暗褐色シルトで構成されている。埋土は浅皿状に堆積しており、自然堆積の様相を呈している。出土遺物はない。

ＥⅡ－３号古墳周湟

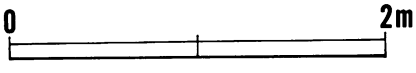
（図版26、写真図版22）



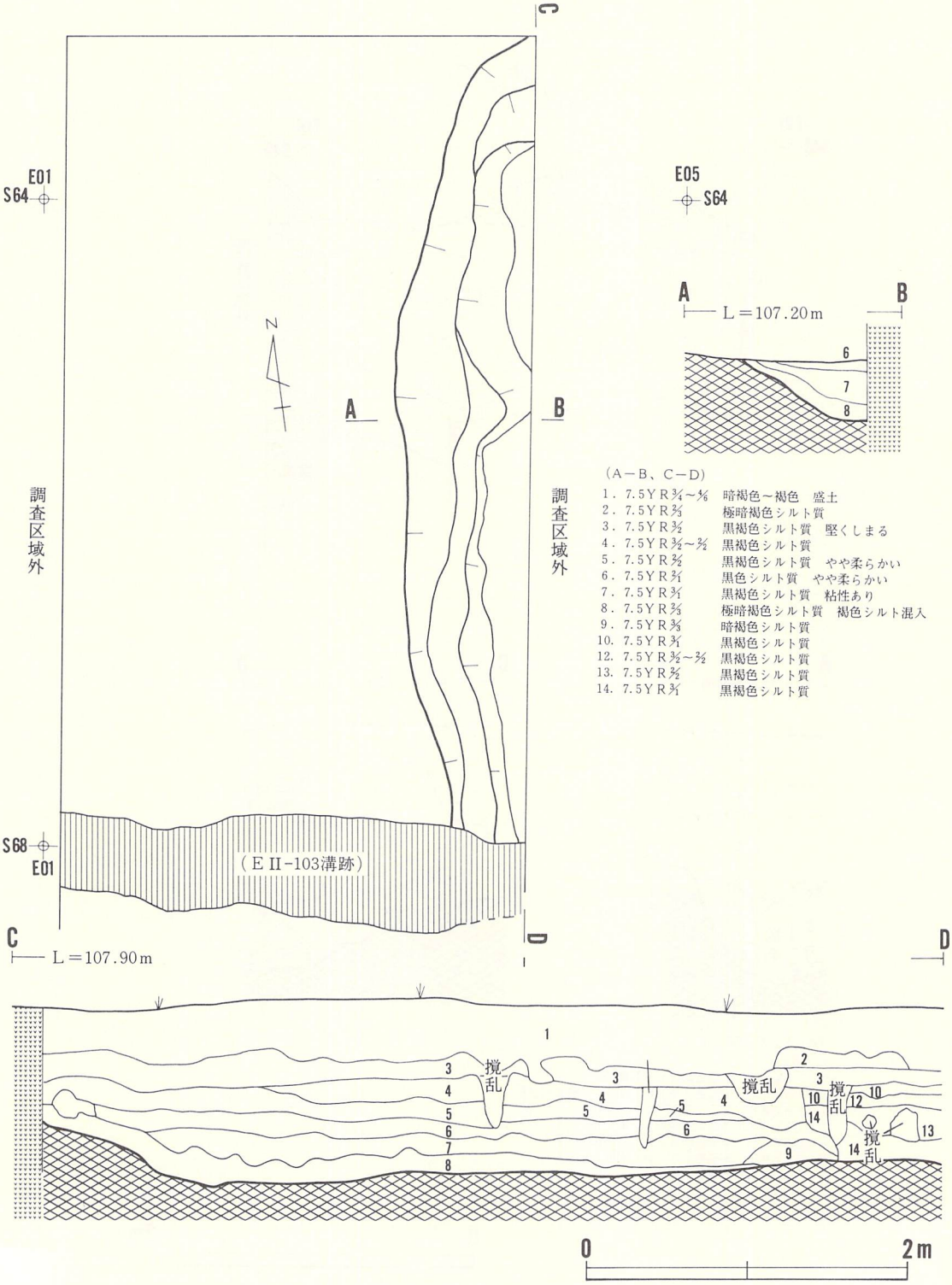


(A－B、C－D)

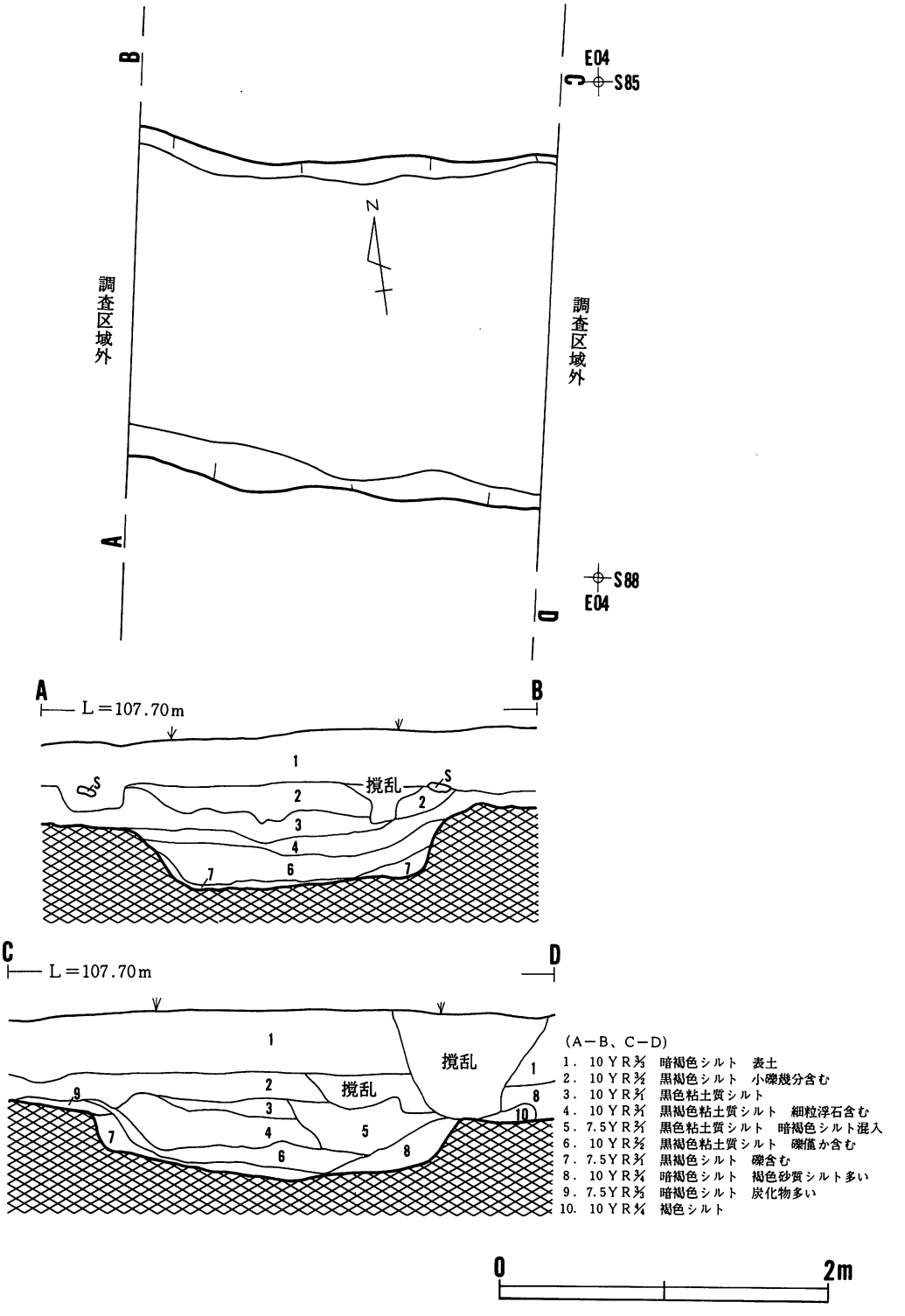
1．盛土
2．7.5YR3/2　黒褐色砂質土　Ⅰ層土
3．7.5YR3/1　黒褐色シルト質　柔らかい炭化物含む
4．7.5YR2/1　黒色シルト質　柔らかい
5．7.5YR3/3　極暗褐色砂質シルト　堅くしまっている
6．7.5YR3/3　暗褐色砂質シルト　細粒浮石混入
7．7.5YR3/2　黒褐色シルト質　褐色シルト含む
8．7.5YR3/4　暗褐色砂質土



図版24　EⅡ－1号古墳周湟



図版25　EⅡ－2号古墳周湟



図版26　ＥⅡ－３号古墳周湟

本遺構は調査区南東部にあり、ＥⅡ－２号古墳周湟の南約７ｍに位置する。表土(34～39cm)、黒褐色シルト層（12～22cm）を取り除いた褐色シルト層の上面で検出されている。周湟はやや南側に湾曲していることから、古墳周湟の南側の一部と推定される。

周湟の幅は1.92～2.14m、深さは36～41cmである。底部幅は1.58～1.98mで中央部西寄りが幾分狭い。周湟断面は緩い「U」字形を呈する。内側の壁面は外側の壁面に比べてやや急な角度で立ち上がる。

埋土の大半は小礫が幾分混入する黒褐色シルトで占められ、わずか最上位に黒色シルトが堆積している。埋土中位にはにぶい黄橙色の火山灰が小ブロックで幾分混じる。他の遺構との重複関係はない。出土遺物はない。

３．土坑・土壙

ＥⅠ－51土坑

（図版27、写真図版23）

本遺構は調査区中央西側にある。上部に基礎コンクリートの土台がつくられているため、一部攪乱を受けている。検出面は盛土（59～66cm）、黒褐色シルト層（45～48cm）を取り除いた褐色シルト層の上面である。検出された部分は南壁の一部にすぎず、その形状・規模については不明である。規模は南北径3.3m、東西径 1.5ｍである。南壁はやや急な角度で立ち上がる。底面は大小の凹凸が激しい。埋土の大半に明褐色または暗褐色シルトが全体に小ブロックで混じり、上位、中位、下位に黒褐色シルトと明褐色砂質シルトの混合土が帯状に入る黒褐色シルトで占められている。出土遺物はない。

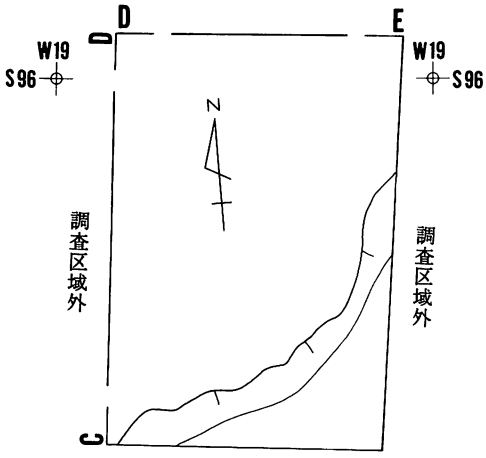
ＢⅡ－51土壙

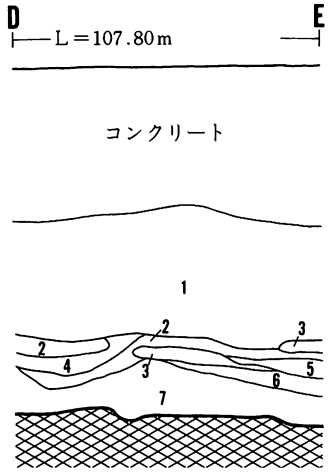
（図版28、写真図版24）

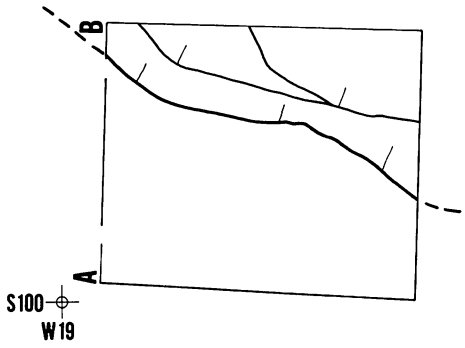
本遺構は調査区北部東側にあり、ＢⅡ－１号古墳周湟の北約12mに位置している。検出面は褐色シルト層の上面である。木根により壁や底面の一部が攪乱を受けている。形状はやや隅丸の方形を呈し、規模は長径（北西～南東）1.98m、短径0.68m、深さ10cmである。主軸方位は磁北より西に25.5度寄る。南東壁の輪郭線はやや丸味を帯びている。底面は幾分凹凸がある。断面は舟底形を呈している。埋土は上位が黒褐色シルト、下位が炭化物を多く混じり粒状の褐色シルトを含む黒色シルトで構成されている。出土遺物はない。

ＢⅡ－52土坑

（図版29、写真図版25）

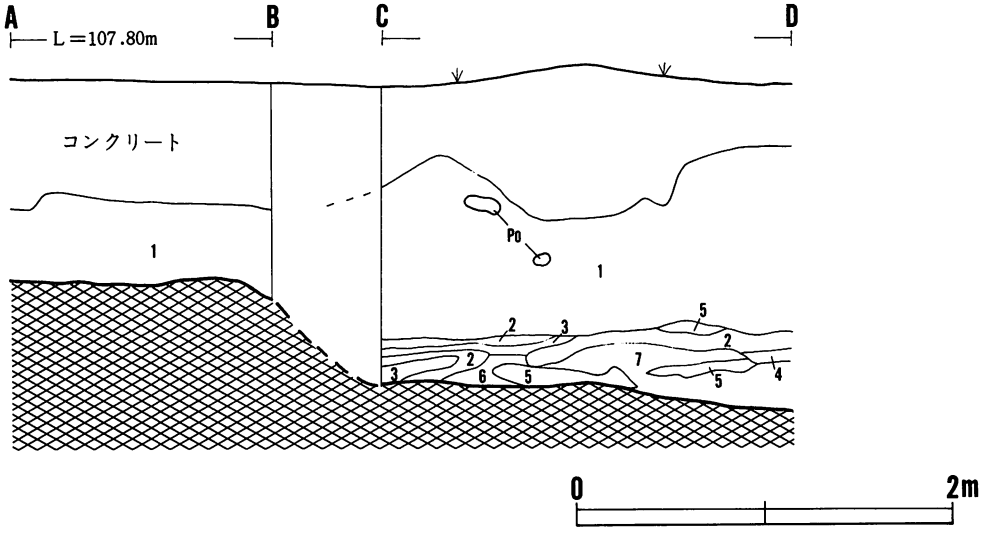




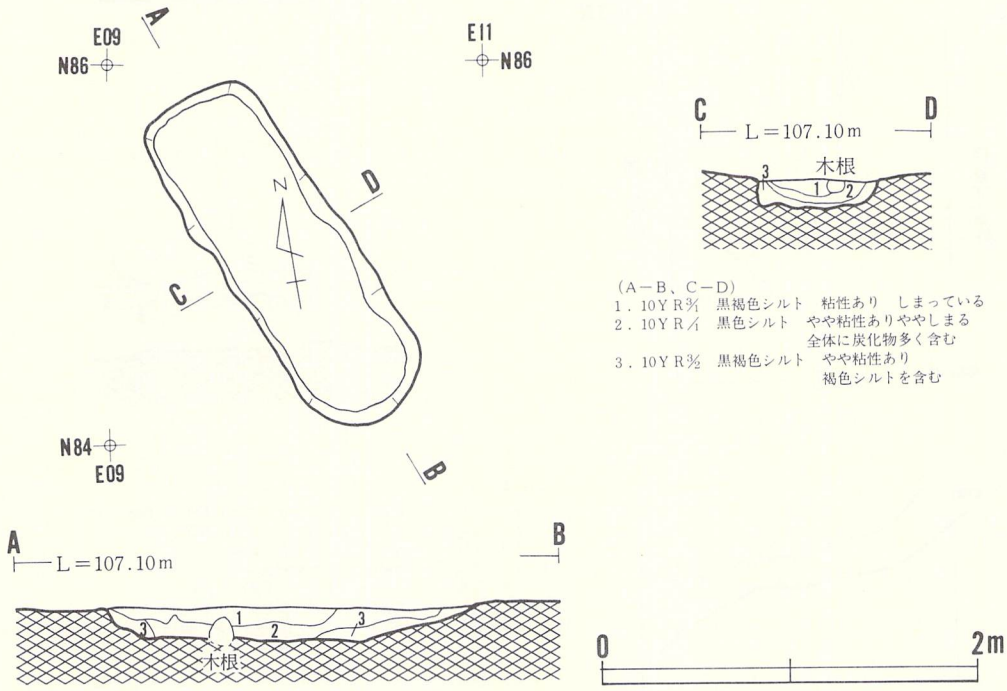


(A－B、C－D、D－E)

1．7.5YR3/2　黒褐色シルト　しまっていて下位に明褐色シルト
2．7.5YR3/2～5/6　黒褐～明褐色シルト　シルトの混合土
3．7.5YR3/2　黒褐色シルト　炭化物含む
4．7.5YR3/1　黒褐色シルト　暗褐色シルト多く含む
5．7.5YR3/2　明褐色砂質シルト　黒褐色を含む
6．7.5YR3/1　黒褐色シルト　暗褐色シルト僅か含む
7．7.5YR2/3　極暗褐色シルト　暗褐色シルト明褐色シルトを幾分含む、堅くしまる



図版27　ＥⅠ－51土坑



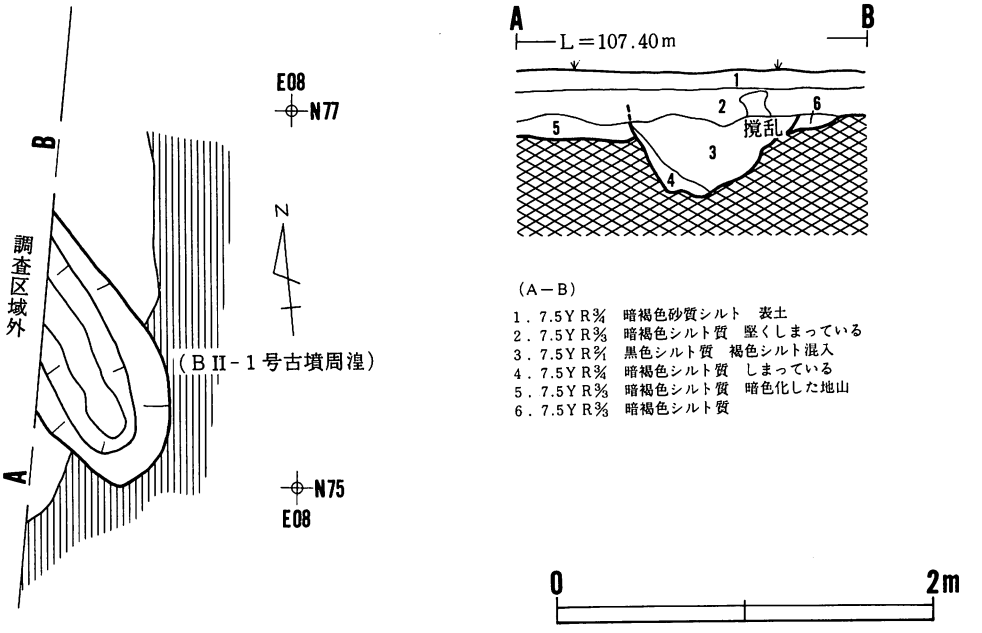
図版28　BⅡ－51土壙

本遺構は調査区北部東側にあり、BⅡ－1号古墳周湟の一部（内壁）を切ってつくられている。西側は調査区域外にのびている。検出面は褐色シルト層の上面である。検出されている輪郭線から土坑の平面形は細長い楕円形を呈しているものと推定される。検出された部分の長軸方向の長さは98cm、短軸は74cmである。深さは33～37cmである。底面は凹凸がある。断面は「U」字形を呈している。埋土の大半は小粒の褐色シルトが全体に混じる黒色シルトで占められ、わずか南壁直上に黒色シルトと褐色シルトの混合土が堆積している。

BⅡ－53土坑

（図版30、写真図版26）

本遺構は調査区北部東側にあり、BⅡ－1号古墳周湟の南約7mに位置している。検出面は褐色シルト層の上面である。土坑はBⅡ－104溝跡を切ってつくられている。精査際、土坑の埋土と溝の埋土との識別が困難で西壁を検出することができなかった。ベルトの土層断面から



図版29 BⅡ-52土坑

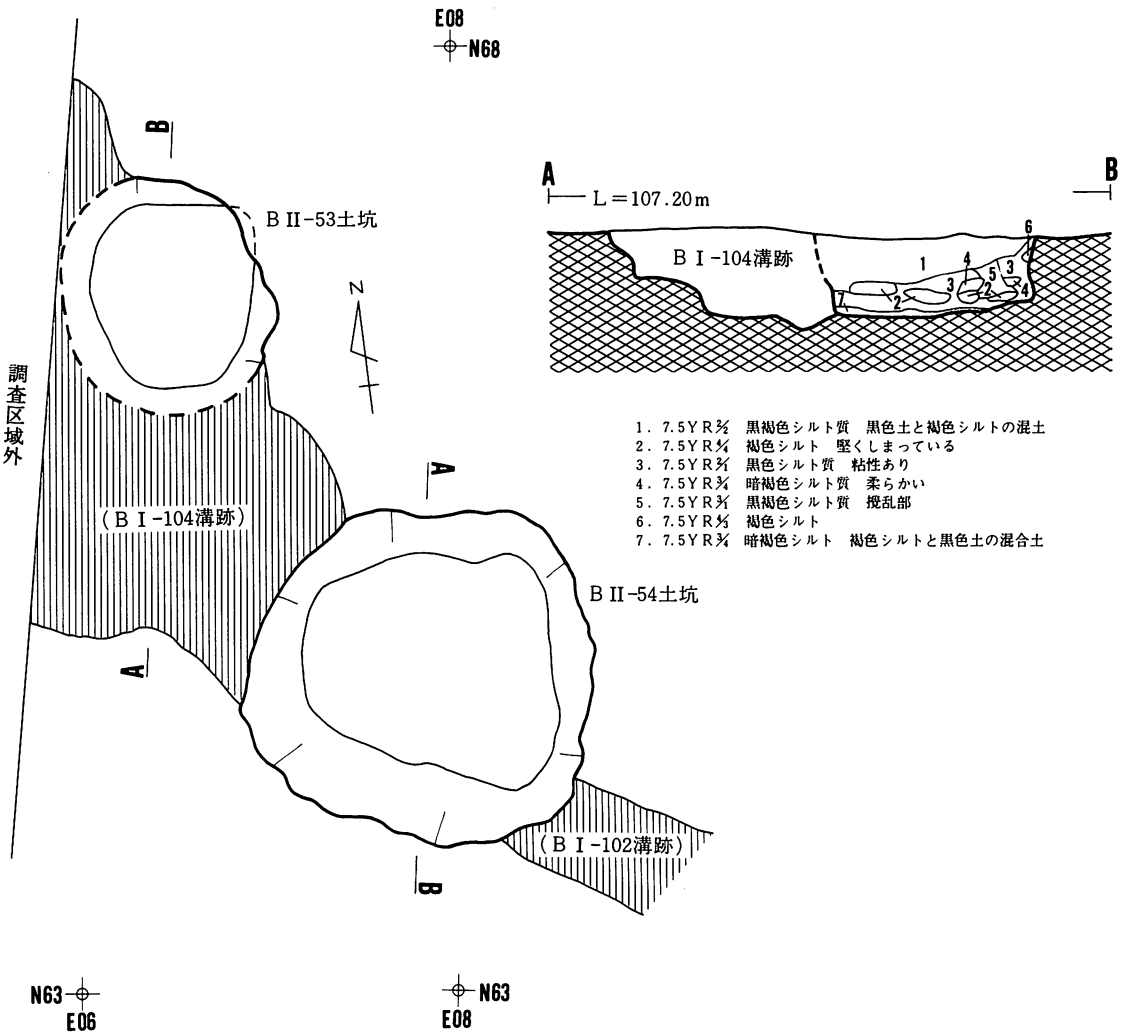
溝と土坑との新旧関係を把握した。

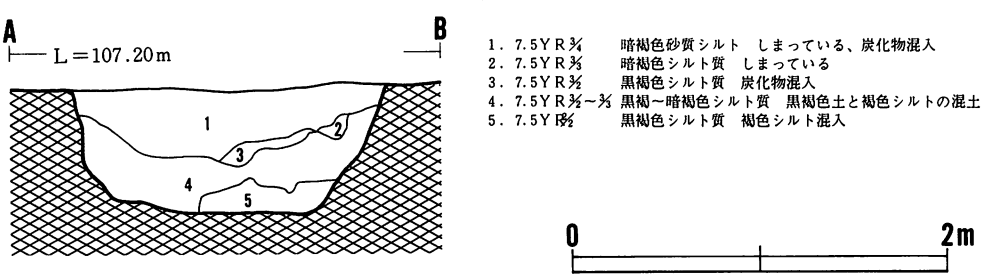
残存する壁の輪郭線とベルトの土層断面から、土坑は円形状を呈し、外径が1.1m、内径が1mと推定される。深さは47〜50cmである。東壁下部の一部はオーバーハングしている。埋土は上位が褐色シルトを全体に小ブロックで混じる黒褐色シルト、下位が褐色シルトの大ブロック（長径12〜25cm）を多く混じる黒色シルト、最下位が褐色シルトと黒色シルトの混合土で構成されている。出土遺物はない。

BⅡ-54土坑

（図版30、写真図版26）

本遺構は調査区北部東側にあり、BⅡ−53土坑の南東40cmに位置している。検出面は褐色シルト層の上面である。土坑はBⅡ−104溝跡を切ってつくられている。平面形は隅丸の不整台形を呈している。規模は長径（北西〜南東）1.86m、短径1.76m、深さ62〜76cmである。底部は長径1.52m、短径1.22mである。底部は幾分凹凸があり南壁側がやや深い。壁面は底部からやや緩く立ち上がる。埋土は上位が褐色シルト及び褐色砂をブロック状に混入し炭化物を少量





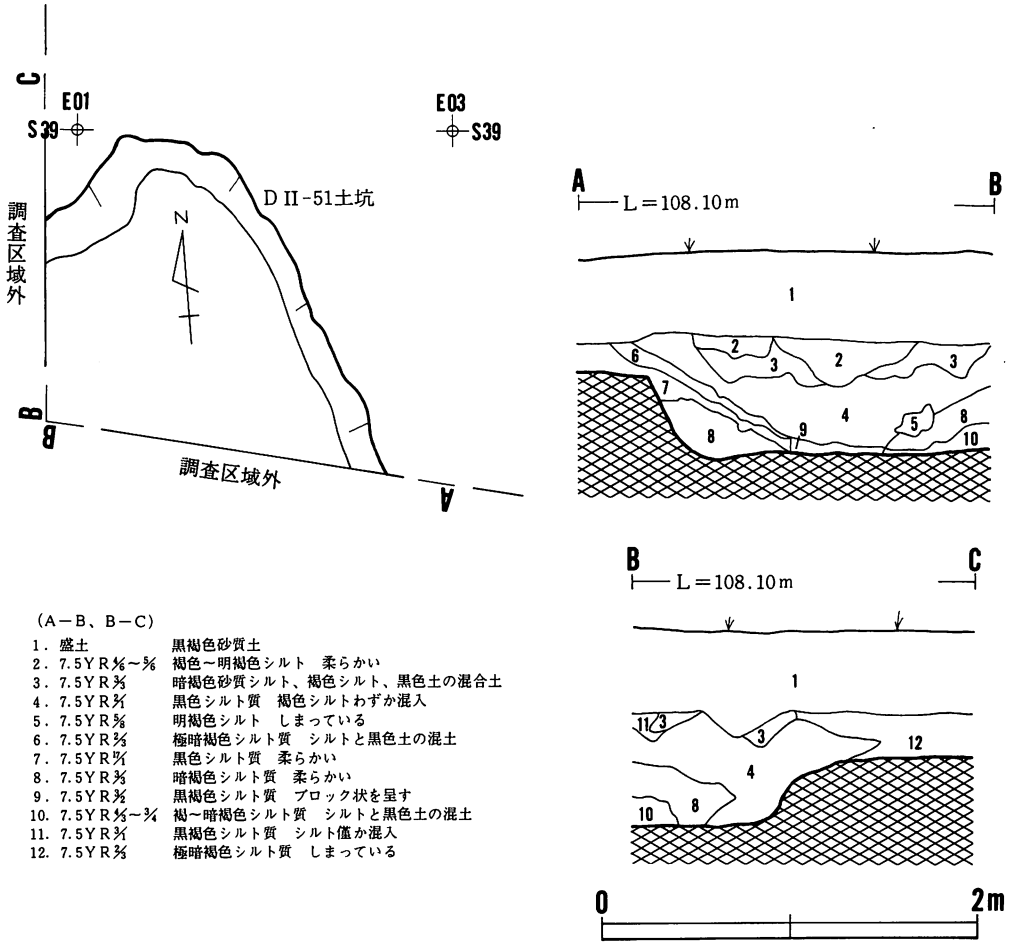
図版30 B II -53・54土坑

混じる暗褐色砂質シルト、中位が黒褐色シルトと褐色シルトの混合土、下位が褐色シルトのブロックが混じる黒褐色～極暗褐色シルトで構成されている。出土遺物はない。

DⅡ－51土坑

（図版31、写真図版28）

本遺構は調査区中央部東側にあり、DⅡ－1号古墳の北側の周湟から南に約3ｍに位置する。



（A－B、B－C）

1．盛土　黒褐色砂質土
2．7.5YR⅚～⅚　褐色～明褐色シルト　柔らかい
3．7.5YR⅔　暗褐色砂質シルト、褐色シルト、黒色土の混合土
4．7.5YR⅔　黒色シルト質　褐色シルトわずか混入
5．7.5YR⅝　明褐色シルト　しまっている
6．7.5YR⅔　極暗褐色シルト質　シルトと黒色土の混土
7．7.5YR⅔　黒色シルト質　柔らかい
8．7.5YR⅔　暗褐色シルト質　柔らかい
9．7.5YR⅔　黒褐色シルト質　ブロック状を呈す
10．7.5YR⅝～¾　褐～暗褐色シルト質　シルトと黒色土の混土
11．7.5YR⅔　黒褐色シルト質　シルト僅か混入
12．7.5YR⅔　極暗褐色シルト質　しまっている

図版31　DⅡ－51土坑

北壁の一部と東壁の一部が検出されているのみである。そのほかは調査区外にあるため、土坑の規模、形状については不明である。検出された部分の規模は長径（北西～南東）1.82m、短径1.46m、深さ40～44cmである。底面は凹凸があり、中央部が幾分高い。埋土は主に上位が最上層部に褐色～明赤褐色シルトをのせる褐色シルトと暗赤褐色砂と黒色シルトの混合土、中位が帯状に堆積する褐色シルトと黒色シルトの混合土、下位が褐色シルトをブロックで多く混じる黒褐色シルトで構成されている。出土遺物はない。

ＥⅡ－51土壙

（図版32、写真図版29）

本遺構は調査区中央部東側にあり、ＥⅡ－２号古墳周湟の北約８ｍに位置している。検出面は盛土（32～40cm）、黒褐色シルト層（16～28cm）を取り除いた褐色シルト層の上面である。南東隅が調査区域外にあるが、形状は隅丸の長方形を呈し、規模が長径（北西～南東）1.68m、短径0.82m、深さ18～20cmである。主軸方位は磁北より30度西に寄る。底面は幾分凹凸がある。埋土は大半が褐色シルトのブロックをわずかに混じる黒色シルトで占められる。

南東隅寄りの底面から直刀（全長36cm）が出土している。直刀は刀先を北西方向に向けて副葬されている。銹化が著しく保存状態は良好でない。刀身は長さ33cm、幅２.２～３cmである。背部の厚さは５～６mmである。柄部には木質部が付着している。（Ｐ86～89参照）

ＥⅡ－52土坑

（図版32、写真図版30）

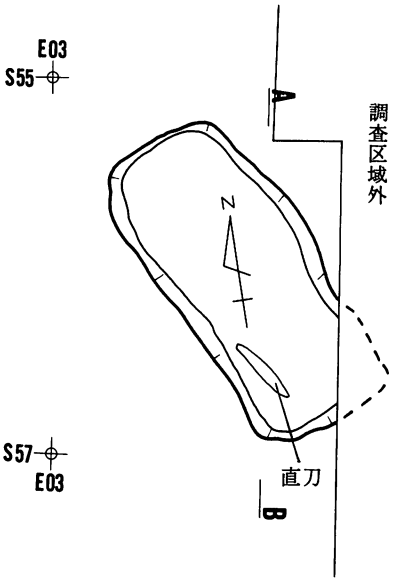
本遺構は調査区中央東側にあり、ＥⅡ－51土壙の南約２ｍに位置している。東側はＥⅡ－54土坑に切られている。検出面は褐色シルト層の上面である。残存する輪郭線から土坑は隅丸の方形を呈していたと思われる。褐色の砂層を掘り込んでつくられているため、底面はやわらかく若干掘りすぎている。規模は南北径１.４ｍ、東西径（残存部分）1.46m、深さ56cmである。埋土を観察するベルトを東端に設けたため、本土坑の埋土は最下位のみが残存している。上位はＥⅡ－54土坑に切られている。埋土最下位は黒褐色シルトがブロックで混じる暗褐色シルトと褐色シルトが占めている。出土遺物はない。

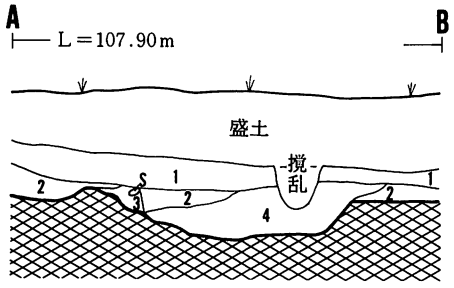
ＥⅡ－53土壙

（図版33、写真図版31）

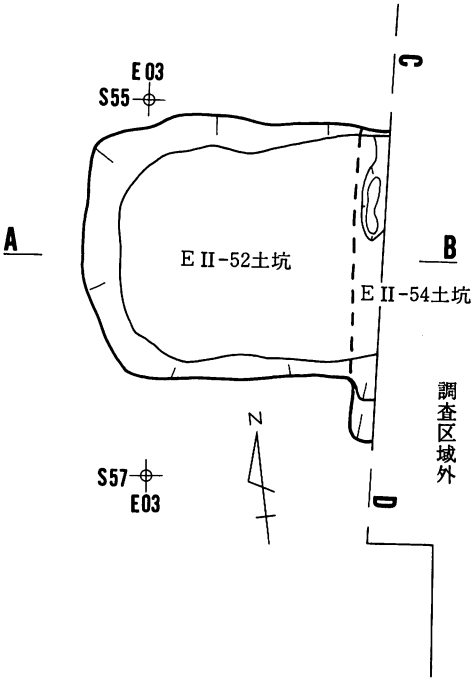
本遺構は調査区南部東側にあり、ＥⅡ－３号古墳周湟の南約２ｍに位置している。東側半分は調査区域外にある。検出面は盛土（18～30cm）、黒褐色シルト層（32～38cm）を取り除いた

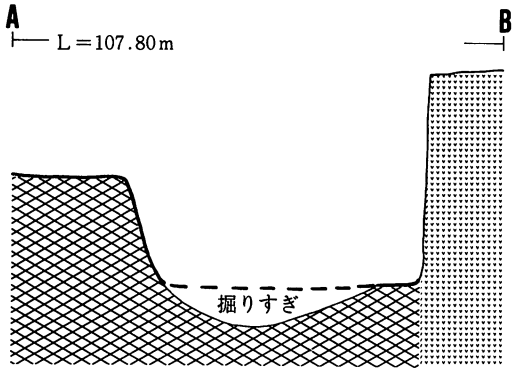
ＥⅡ-51土壙

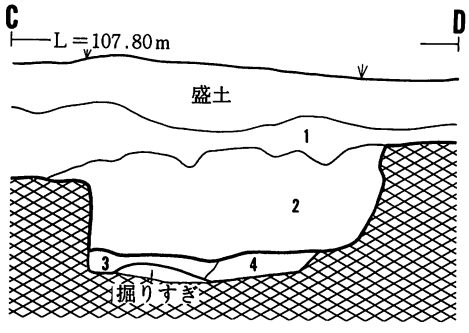




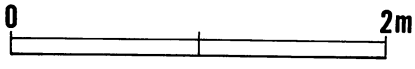
1．7.5YR3/2　黒褐色シルト　褐色シルトを含む、炭化物少量含む
2．10YR3/2　黒褐色粘土質シルト　褐色シルト僅か含む
3．10YR3/2　黒褐色粘土質シルト　褐色シルト多く含む
4．7.5YR3/1　黒色粘土質シルト　ややしまり褐色シルトを僅か含む



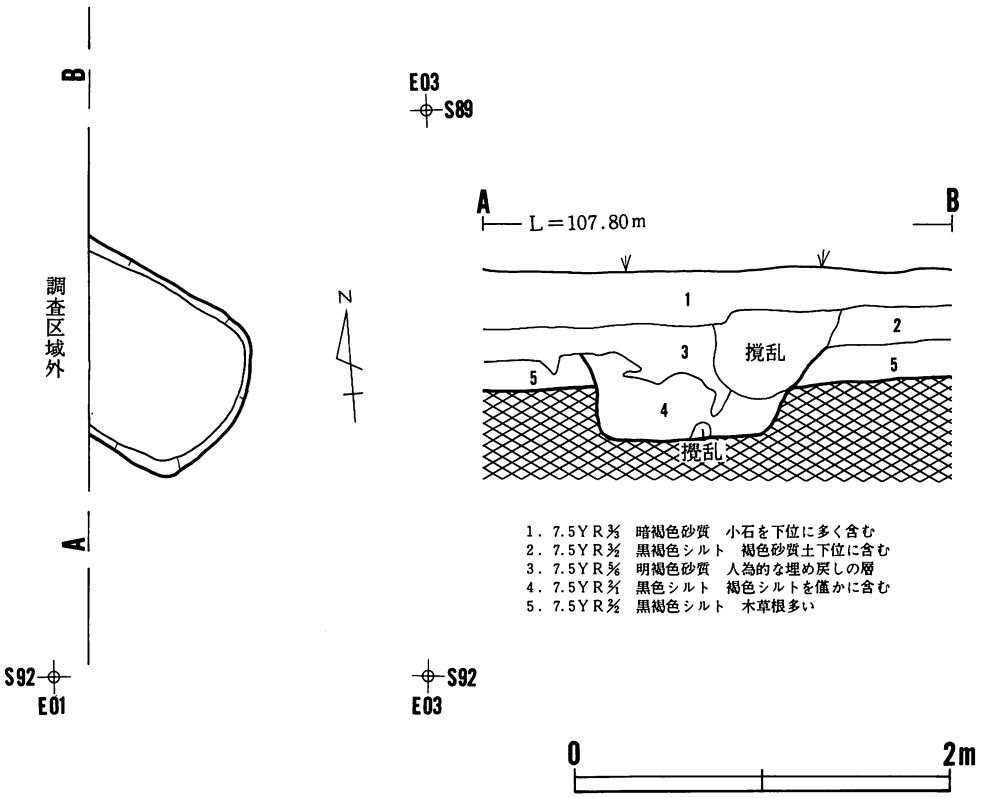




1．7.5YR3/3　黒褐色シルト　柔らかい礫わずか混入
2．7.5YR3/2　黒褐色シルト　ややしまり全体に褐色砂質土、明褐色シルト多く含む
3．7.5YR3/3　暗褐色砂質　ややしまり黒褐色シルト含む
4．7.5YR4/3　褐色シルト　しまり黒色土僅か含む



図版32　ＥⅡ－51土壙、ＥⅡ－52・54土坑



図版33　E Ⅱ－53土壙

褐色シルト層の上面である。掘り込み面は黒褐色シルト層中位である。検出されている部分から、隅丸の長方形を呈していると推定される。検出された部分の規模は長径（北西～南東）約1m、短径0.92m、深さ23～26cmである。主軸方位は磁北より西に53度寄る。底部は木根により一部撹乱を受けている。底面は幾分凹凸がみられる。埋土は主に褐色シルトを小ブロックに少量混じる黒色シルトで占められている。出土遺物はない。

E Ⅱ－54土坑

（図版32、写真図版30）

本遺構は調査区中央部東側にあり、E Ⅱ－52土坑の東側を切ってつくられている。大半が東側の調査区域外にある。検出されている壁から、土坑は方形を呈していると推定される。検出

された部分の規模は南北径1.64m、東西径0.16m、深さ38cmである。底面はやや凹凸がある。埋土は主に褐色シルトを小ブロックに少量混じる黒色シルトで占められている。埋土から馬の蹄鉄や用途不明の鉄製品が出土している。

BⅡ－55土壙

（図版34、写真図版48、49）

本遺構は調査区北部東側にあたり、BⅡ－101溝跡の北に隣接している。検出面は褐色シルト層の上面である。BⅡ－56土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。土壙は形状が隅丸の不整長方形を呈し、規模が長径（南北）96cm、短径46cm、深さ38～48cmである。底部は隅丸長方形を呈し、長径71cm、短径26cmである。主軸方位は磁北より東に12度寄る。埋土は黒褐色シルトで占められている。

埋土から土師器甕形土器の体部小破片（長さ1～3cm）が8片出土している。大半が磨耗しているため内外面の調整は不明である。うち1点は外面にミガキ調整が施されている。胎土には砂（石英、長石など）が多く混じる。

BⅡ－56土壙

（図版34、写真図版48、49）

本遺構は調査区北部東側にあり、BⅡ－101溝跡の北に隣接している。BⅡ－55土壙と重複するが、新旧関係は不明である。検出面は褐色シルト層の上面である。土壙は平面形が隅丸の長方形を呈し、規模が長径（北西～南東）78cm、短径46cm（推定）、深さ31～33cmである。主軸方位は磁北より西に49度寄る。埋土は黒褐色シルトで占められている。出土遺物はない。

BⅡ－57土坑

（図版34、写真図版48、49）

本遺構は調査区北部東側にあり、BⅡ－55・56土壙の西30～50cmに位置している。西側の半分は国道の側溝のため破壊され消滅している。BⅡ－58・59土坑と重複しているが新旧関係は不明である。残存する壁の輪郭線から、土坑は東西にやや長い不整の楕円を呈していたと推定される。検出された部分での規模は長径51cm、短径47cm、深さ25～33cmである。底面は凹凸がある。埋土は黒褐色シルトで占められている。出土遺物はない。

BⅡ－58土坑

（図版34、写真図版48、49）

本遺構は調査区北部東側にあり、ＢⅡ－55・56土壙と隣接している。南側をＢⅡ－101溝に切られている。ＢⅡ－57・59土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。検出面は褐色シルト層の上面である。形状は不整な方形である。検出されている部分での規模は長径69cm、短径46cm、深さ29～31cmである。埋土は黒褐色シルトで占められている。

埋土から土師器甕形土器の体部小破片（長さ１～４cm）が４点出土している。うち１点の外面には丹塗が施されている。胎土には砂が多く混じる。

ＢⅡ－59土坑

（図版34、写真図版48、49）

本遺構は調査区北部東側にあり、ＢⅡ－55・56土壙の西50cmに位置している。西側を国道の側溝に、南側をＢⅡ－101溝に切られている。検出面は褐色シルト層の上面である。ＢⅡ－57・58土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。形状は不整形である。検出されている部分での規模は長径34cm、短径31cm、深さ42cmである。壁は東側が緩く、北側が急な角度で立ち上がる。埋土は黒褐色シルトで占められている。出土遺物はない。

ＢⅡ－60土壙

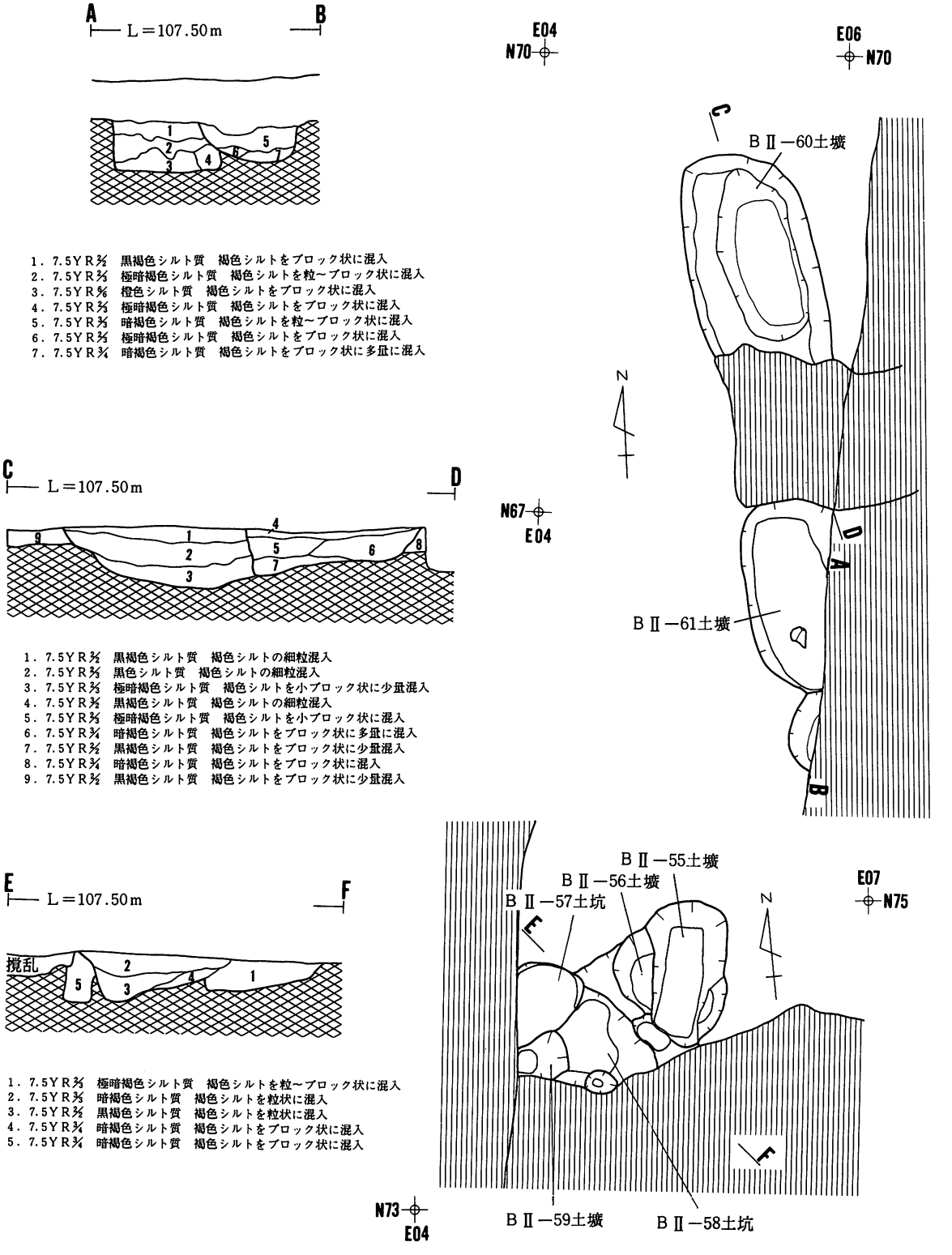
（図版34、写真図版49）

本遺構は調査区北部東側にあり、ＢⅡ－54・55土壙の南５ｍに位置している。土壙はＢⅡ－104溝を切り、南側をＢⅡ－１号古墳周湟に切られている。開口部の平面形はやや不整ながら隅丸の長方形、底部の形状は隅丸の長方形を呈している。規模は長径（北西～南東）1.14ｍ、短径0.62ｍ、深さ46～49cmである。長径82cm、短径36cmである。主軸方位は磁北より西に16度寄る。断面は舟底形を呈している。埋土は上位が褐色シルトを粒状に混じる黒褐色シルト、中位が褐色シルトの小ブロックを混じる黒色シルト、下位が褐色シルトの小ブロックを少量混じる黒褐色シルトで占められる。出土遺物はない。

ＢⅡ－61土壙

（図版34、写真図版49）

本遺構は調査区北部東側にあり、ＢⅡ－60土壙の南約１ｍに位置している。北側の一部はＢⅡ－１号古墳周湟に切られている。検出面は褐色シルト層の上面である。平面形は隅丸の長方形を呈していたものと推定される。検出された部分の規模は長径（北西～南東）1.24ｍ、短径0.54ｍ、深さ26～33cmである。主軸方位は磁北より西に８度寄る。埋土は上部が黒褐色シルト、中部が褐色シルトを粒状またはブロック状に混じる暗褐色シルト、下部が橙色シルトで構成さ



図版34　BⅡ－55・56・60・61土壙、BⅡ－57・58・59土坑

れている。出土遺物はない。

4．溝跡

ＢⅠ－101 溝跡

（図版35、写真図版32）

本遺構は調査区北部西側にあり、ＢⅠ－１号古墳周湟の上部を切ってつくられている。溝はほぼ南北に走り、北側が調査区域外にのび南側が途中で消失している。中央部西側の一部は攪乱を受けている。検出面は褐色シルト層上面である。検出された部分での規模は長さ25.6m、幅36～52cm、深さ10～24cmである。底部幅も一様でなく19～26cmである。底面は凹凸が多い。埋土は褐色シルトを粒状に混じる黒褐色シルトで占められている。出土遺物はない。

ＢⅠ－102 溝跡

（図版35、写真図版33）

本遺構は調査区北部西側にあり、ＢⅡ－101 溝跡と一部北側で併行して走る。南側は新しい穴によって攪乱を受けている。検出面は褐色シルト層上面である。検出された部分の規模は長さ 2.8ｍ、幅30～38cm、深さ６～16cmである。底面は凹凸が多く波状を呈している。埋土は褐色シルトを粒状で幾分混じる黒褐色シルトで占められている。出土遺物はない。

ＤⅠ－101 溝跡

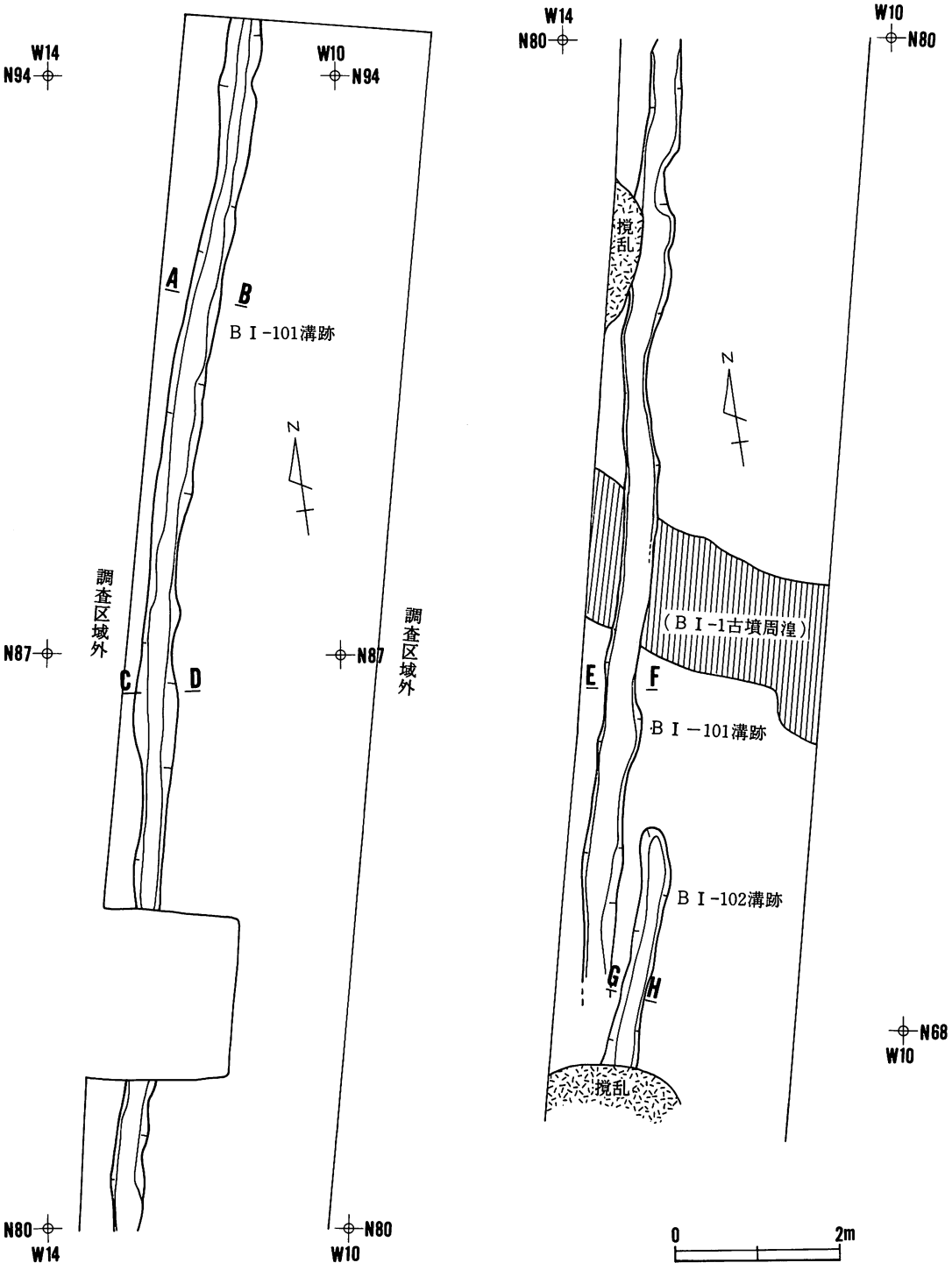
（図版37、写真図版34）

本遺構は調査区中央部西側にあり、ＤⅠ－２号古墳周湟と隣接している。西側の壁上部は一部攪乱を受けている。溝はほぼ南北に走り、両端は調査区域外にのびている。検出面は褐色シルト層の上面である。検出された部分の規模は長さ約６ｍ、幅57～80cm、深さ31～40cmである。底部幅は25～42cmである。底面は幾分凹凸がある。埋土は上半部が全体に褐色シルトを粒状に混じる黒色～黒褐色シルト、下半部が黒色シルトをブロック状に混じる褐色シルトで占められている。出土遺物はない。

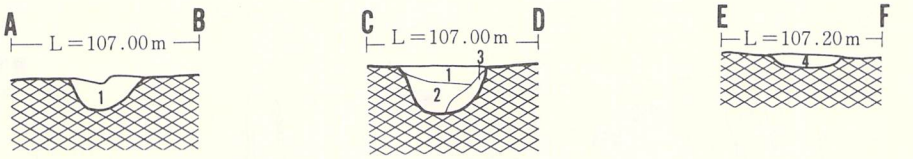
ＦⅠ－101 溝跡

（図版36、写真図版35）

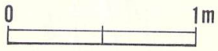
本遺構は調査区南部西側にあり、ＦⅠ－１住居跡の北７ｍに位置している。溝は東西に走り、両端が調査区域外へのびている。中央部はＦⅠ－102 溝に切られている。検出面は褐色シルト層の上面である。検出された部分での規模は長さ2.05m、幅46～50cm、深さ19～25cmである。底部

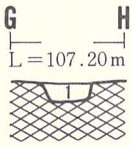


図版35　ＢＩ－101・102溝跡（1）

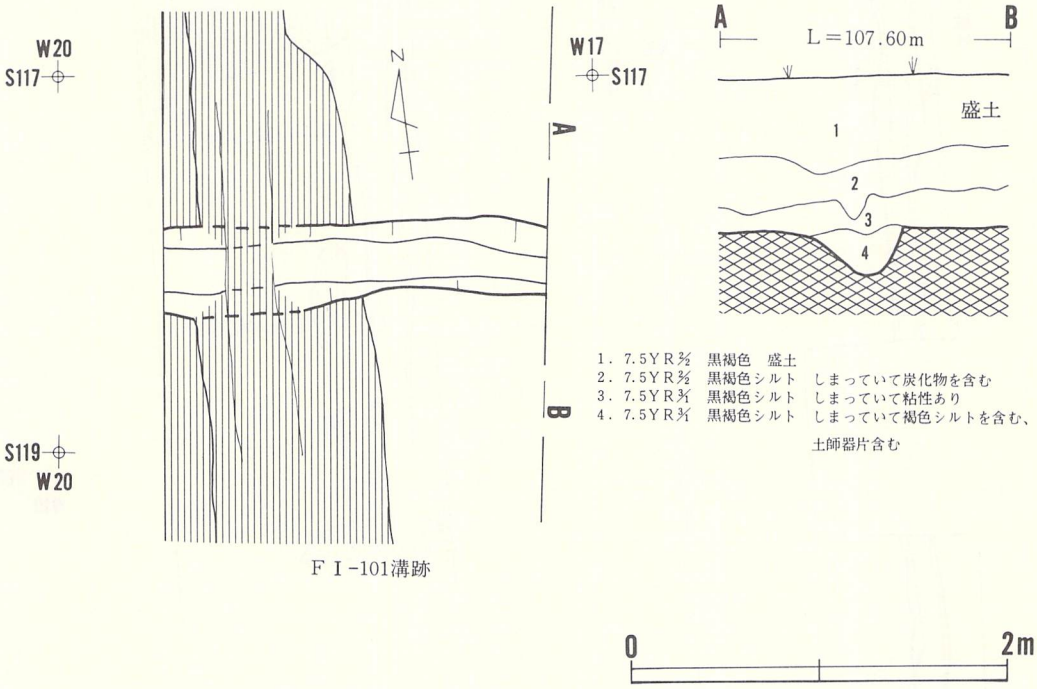


（A－B、C－D、E－F）
1．7.5YR3/2　黒褐色シルト　褐色シルトを全体に含む
2．7.5YR3/1　黒褐色シルト　褐色シルトのブロック混入
3．7.5YR3/3　暗褐色シルト　褐色シルトを多く含む
4．7.5YR3/2　黒褐色シルト　褐色シルトを含む





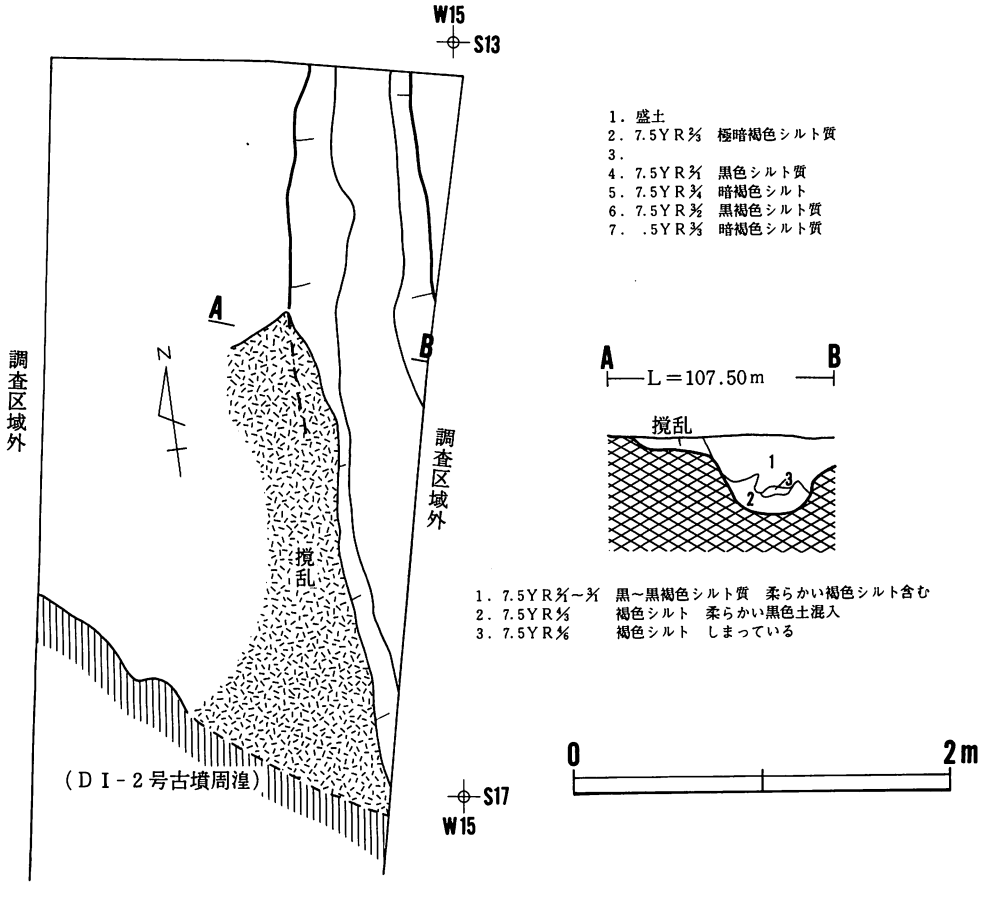
1．7.5YR3/1　黒褐色シルト　しまっていて褐色シルトを幾分含む



1．7.5YR3/2　黒褐色　盛土
2．7.5YR3/2　黒褐色シルト　しまっていて炭化物を含む
3．7.5YR3/1　黒褐色シルト　しまっていて粘性あり
4．7.5YR3/1　黒褐色シルト　しまっていて褐色シルトを含む、土師器片含む

ＦＩ-101溝跡

図版36　ＢＩ－101・102溝跡（２）、ＦＩ－101溝跡



図版37 DI－101溝跡

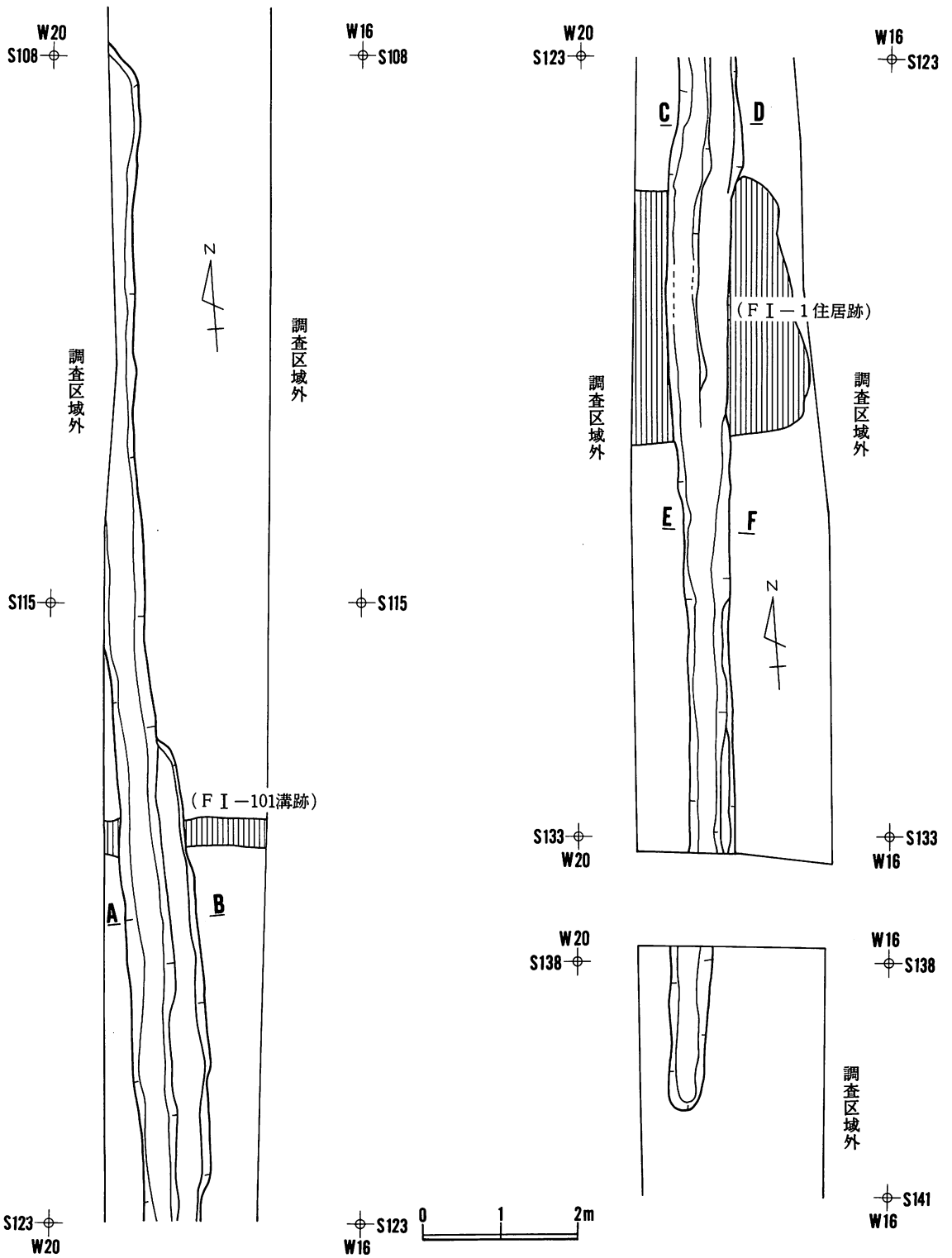
幅は12～22cmである。断面は「U」字形を呈している。埋土はにぶい褐色シルトを粒状に混り、焼土粒を幾分含む黒褐色シルト層である。

埋土から土師器甕形土器の小破片（1～2cm）が3点出土している。磨耗しているため、内外面の調整は不明である。

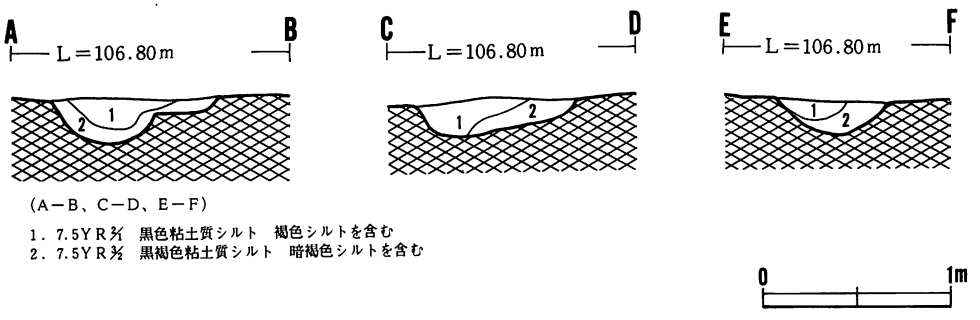
EI－102溝跡

（図版38・39、写真図版36）

調査区南部西側にあり、FI－101溝跡、FI－1住居跡を切ってつくられている。溝は南北に走り北端が調査区域外へ、南端が途中で消失している。検出面は褐色シルト層上面である。検出された部分の規模は中央部で幅84～100cm、深さ13～26cm、南側で幅56～64cm、深さ7～



図版38　ＦＩ－102 溝跡(１)



図版39　FⅠ－102溝跡(2)

16cmである。中央部の完掘状態をみると、新旧の2条となる可能性もあるが、埋土断面からは観察することができなかった。溝の全長は約28mである。断面は「U」字形を呈している。底面は幾分凹凸がある。埋土は上部が褐色シルトをブロックで混じる黒色シルト、下部が暗褐色シルトを粒状に含む黒褐色シルトで占められている。出土遺物はない。

FⅠ－103溝跡

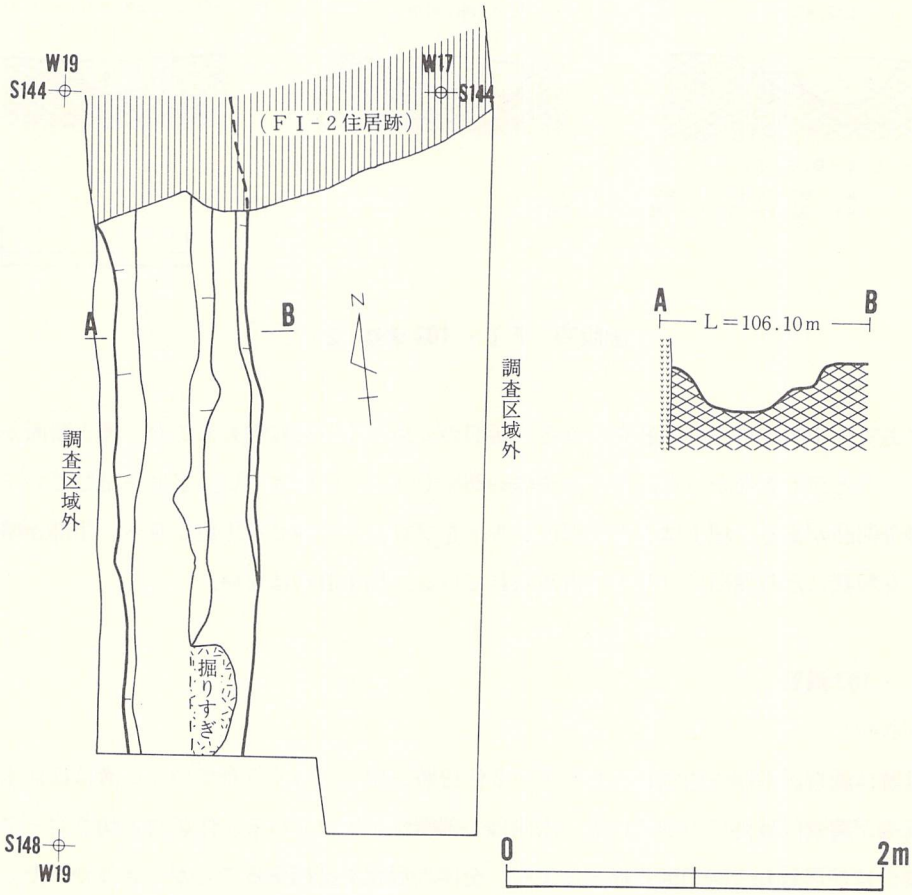
(図版40)

本遺跡は調査区南端の西側にありFⅠ－2住居跡を切ってつくられている。溝はほぼ南北に走り両端が調査区域外にのびている。南側は一部攪乱を受けている。住居跡と切り合っている溝の部分は住居跡精査時の掘り過ぎにより、全体の形状を把握することができなかった。検出面は褐色シルト層の上面である。検出された部分の規模は長さ3m、幅66～76cm、深さ18～25cmである。底部幅は21～31cmである。底面は幾分凹凸がある。断面は東側が一段浅く西側が、「U」字形を呈している。埋土は褐色シルトをブロックで混じる黒褐色シルトで占められている。出土遺物はない。

AⅡ－101溝跡

(図版41、写真図版37)

本遺構は調査区北部東側にあり、AⅡ－3号古墳周湟の北約10mに位置している。溝はやや北側に湾曲しながら東西方向に走る。西端は攪乱を受け東端は調査区域外へのびている。検出面は褐色シルト層の上面である。検出された部分の規模は長さ2.2m、幅46～61cm、深さ13～23cmである。底面は幾分凹凸があり中央部が深い。断面は「U」字形を呈している。埋土は褐色シルトブロックで多く混入している極暗褐色シルトで占められている。出土遺物はない。

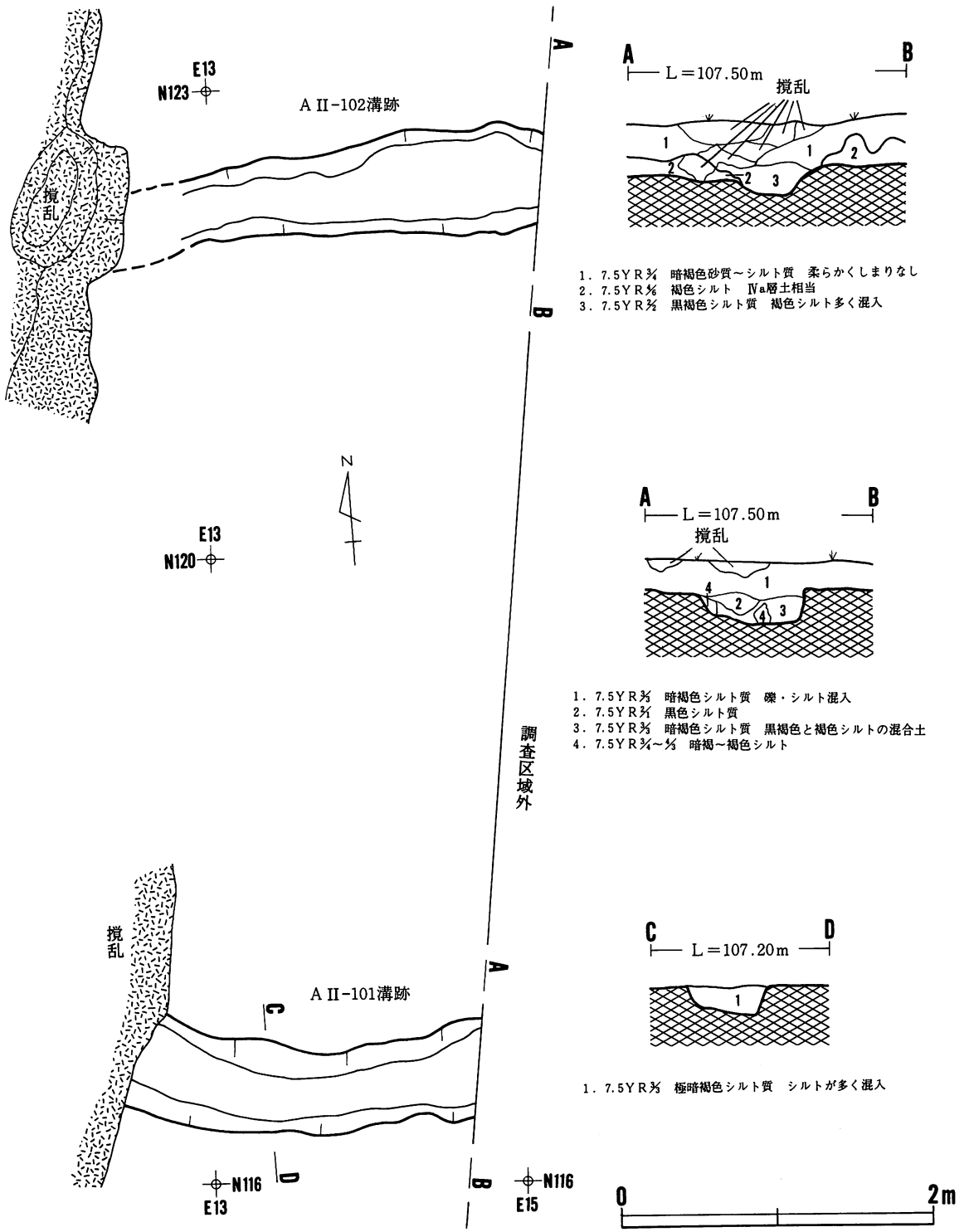


図版40　ＦＩ－103溝跡

ＡⅡ－102溝跡

（図版41、写真図版37）

本遺構は調査区北端の東側にあり、ＡⅡ－101溝跡の北約６ｍに位置している。溝はほぼ南北方向に走り、西側が途中で消失し東側が調査区域外へのびている。検出面は褐色シルト層の上面である。検出された部分の規模は長さ2.4ｍ、幅42～62cm、深さ９～16cmである。東側にいくほどに幾分幅広になる。底面は多くの凹凸がある。埋土は主に褐色シルトをブロックで多く混じる黒褐色シルトで占められている。出土遺物はない。

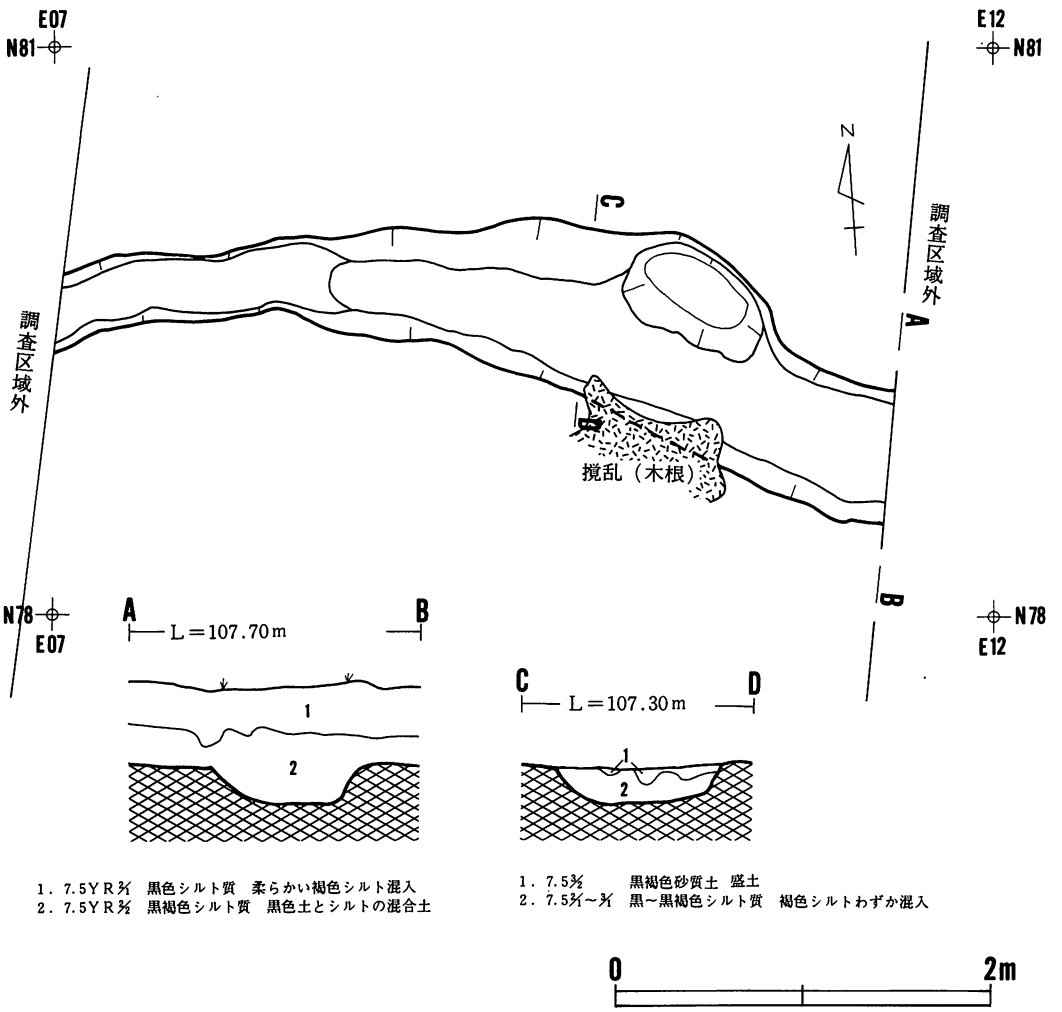


図版41 A II - 101 ・ 102 溝跡

BⅡ－101 溝跡

（図版42、写真図版39）

本遺構は調査区北部東側にありＢⅡ－１号古墳周湟の北側と隣接している。溝は南側にやや湾曲しながら南北に走り両端が調査区域外へのびている。南側は一部木根により攪乱を受けている。検出面は褐色シルト層の上面である。溝の幅は36～86cm、中央部東寄りが最も広く西端が最も狭い。検出された長さは4.6ｍである。深さは５～24cmである。底面は多少凹凸がある



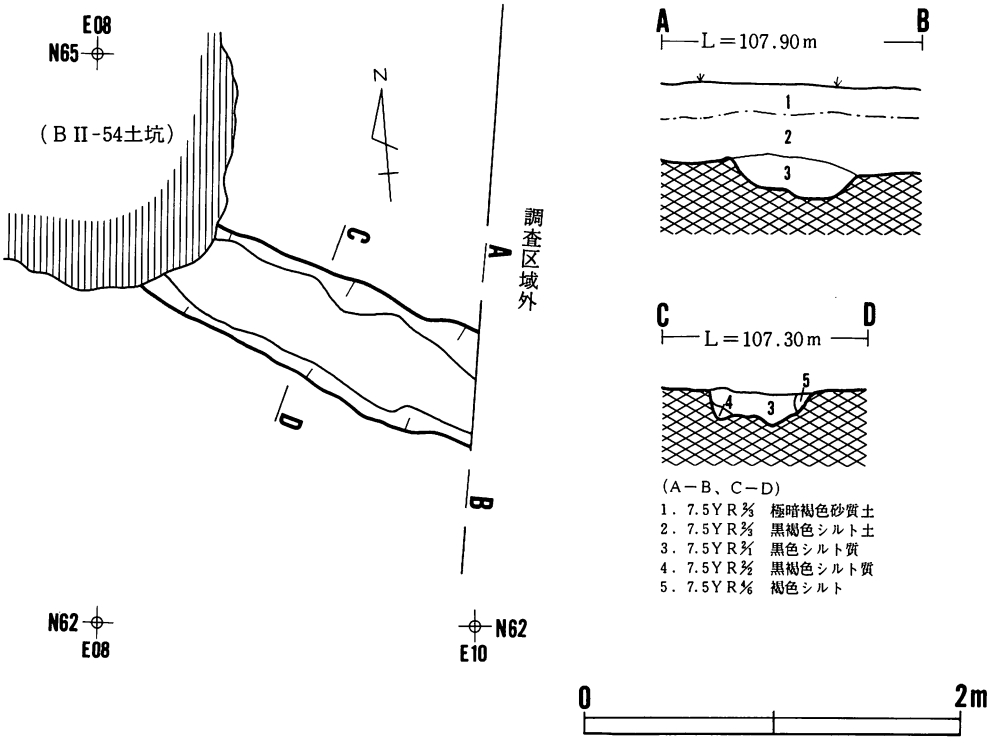
図版42　BⅡ－101 溝跡

がほぼ平坦である。断面は「U」字形を呈している。埋土は褐色シルトが粒状にわずかに混入している黒褐色～黒色シルトで占められている。出土遺物はない。

BⅡ－102溝跡

（図版43、写真図版40）

本遺構は調査区北部東側にありBⅡ－1号古墳周湟の南10mに位置している。検出面は褐色シルト層の上面である。溝はほぼ南北方向に走り西端がBⅡ－54土坑に切られ東端が調査区域外へのびている。検出された部分の規模は長さ1.7m、幅50～60cm、深さ7～16cmである。底部径は30～47cmである。底面は大小の凹凸が多くある。埋土断面は「U」字形を呈している。埋土は全体に褐色シルトの小粒が混入し、中～下位に暗褐色シルトがブロック状に混じる黒色シルトで占められている。出土遺物はない。

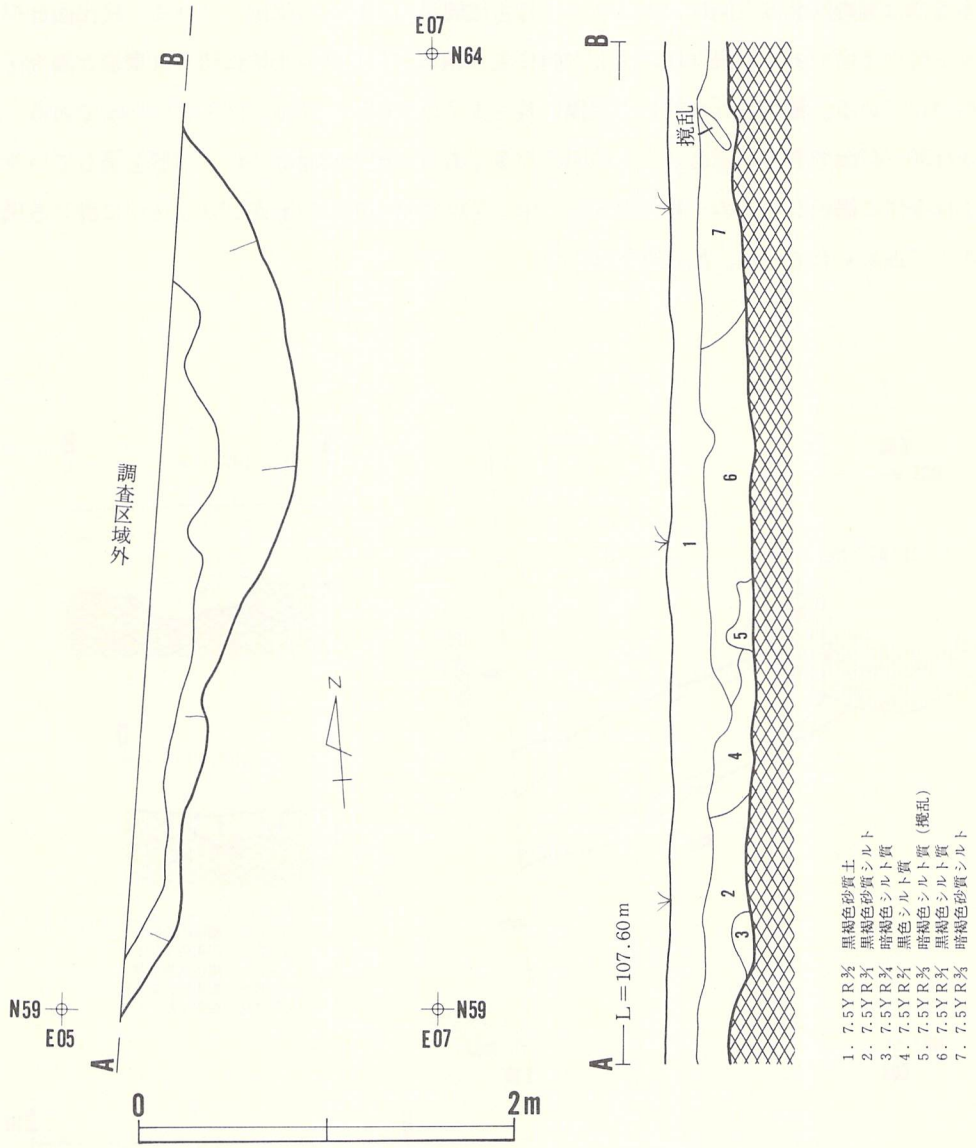


図版43　BⅡ－102溝跡

ＢⅡ－103溝跡

（図版44、写真図版41）

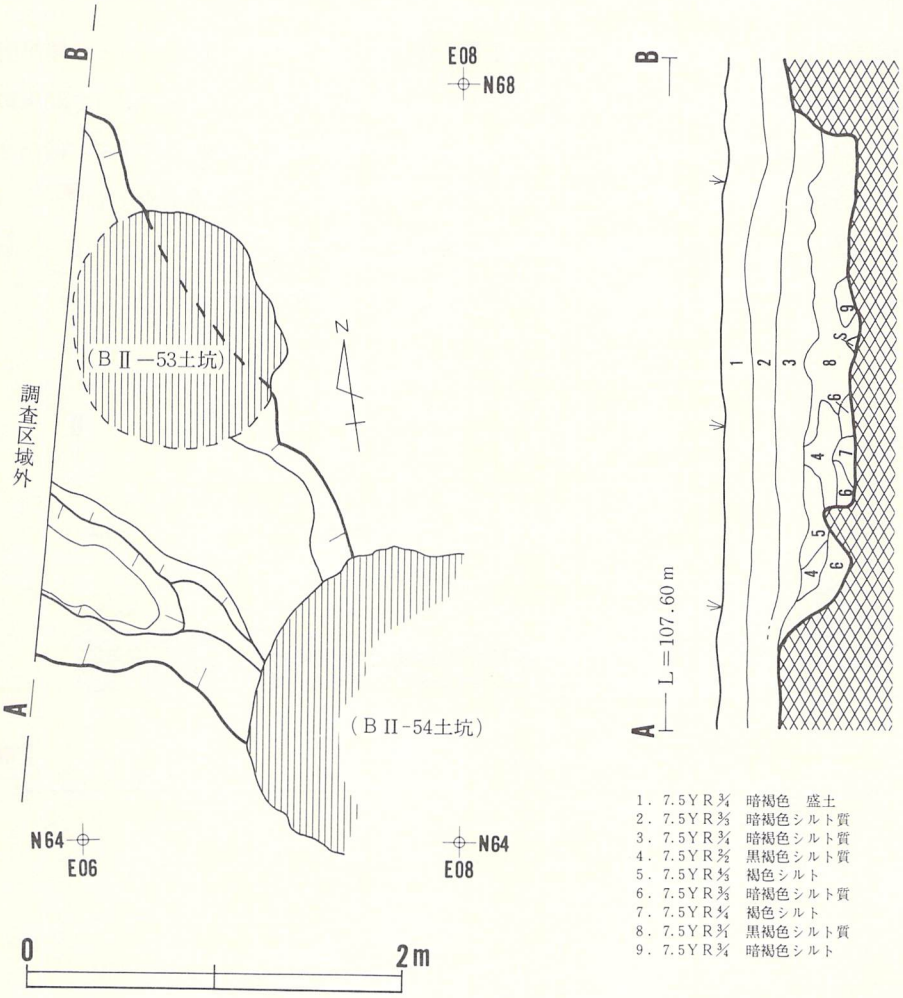
本遺構は調査区北部東側にあり、ＢⅡ－５号古墳周湟の北６ｍに位置している。検出面は褐



図版44　ＢⅡ－103溝跡

色シルト層の上面である。遺構の大半は西側の調査区域外にある。検出された部分の規模は南北径4.51m、東西径0.72m、深さ14～17cmである。底面は大小の凹凸が多くある。東壁面は底面から緩く立ち上がる。南側の埋土は全体に砂が混り炭化物をわずかに混入する黒褐色シルトであり、中央部・北部の埋土は全体に褐色シルトの小粒を混入している黒褐色で占められている。出土遺物はない。

BⅡ－104溝跡



図版45　BⅡ－104溝跡

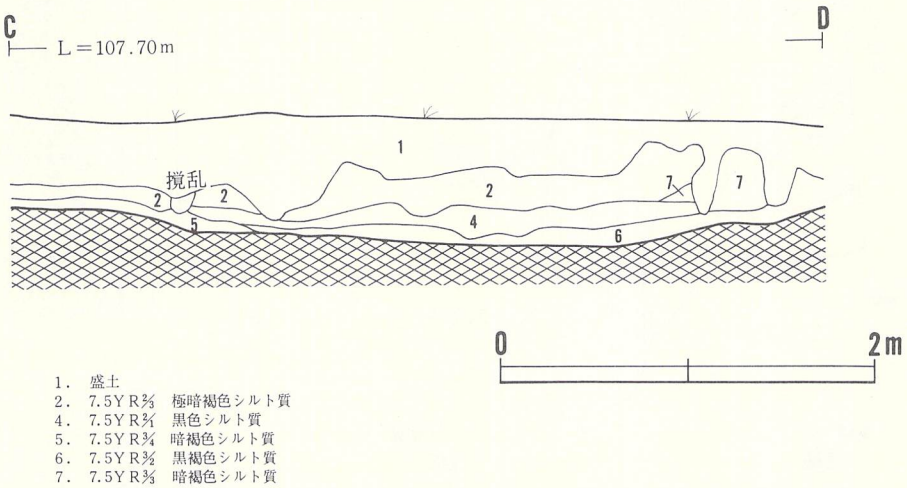
（図版45、写真図版42）

本遺構は調査区北部東側にあり、ＢⅡ－１号古墳周湟の南６ｍに位置している。北側をＢⅡ－53土坑に、東側をＢⅡ－54土坑に切られ、南壁上部を新しい穴によって攪乱を受けている。検出面は褐色シルト層の上面である。溝は北西～南東方向に走り、西側が調査区域外へのび、東側が途中で消失している。検出された部分の規模は長さ1.5ｍ、幅0.7～１ｍ（推定）、深さ31～42cmである。底面は大小の凹凸があり中央部西側が最も深い。埋土は褐色シルトと黒色シルトの混合土で占められている。出土遺物はない。

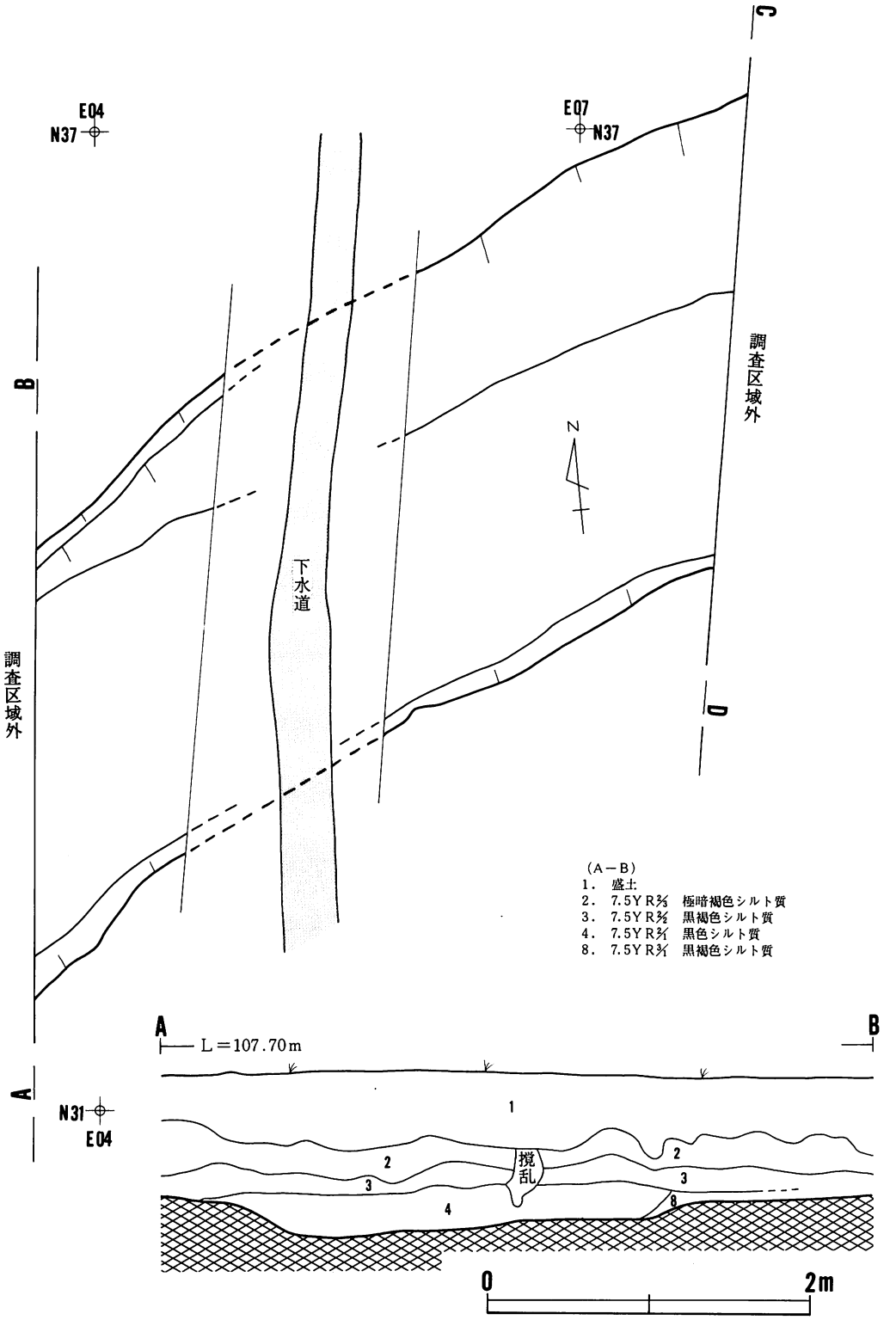
ＣⅡ－101溝跡

（図版45、写真図版43）

本遺構は調査区中央部東側にありＣⅡ－１号古墳周湟の北13mに位置している。検出面は表土から50～70cm下の暗褐色シルト層の上面である。中央部は現代の下水道によって60cm幅で南北方向に切られている。溝は南西～北東方向に走り、両端が調査区域外にのびる。検出された部分の規模は長さ4.6ｍ、幅2.1～2.4ｍ、深さ５～15cmである。底部は幾分北側が深い。西側の埋土は主に黒色シルトで占められ、東側の埋土は上位に黒色シルト、下位に１～３cm大の円礫が混入している黒褐色シルトで占められている。出土遺物はない。



図版46　ＣⅡ－101溝跡（１）



図版47　CⅡ－101 溝跡(2)

CⅡ－102溝跡

（図版48、写真図版44）

本遺構は調査区中央部東側にありCⅡ－1号古墳周湟の北側と隣接している。中央部は南北方向に走る幅60cmの現代の下水道によって切られている。検出面は地表面から50～90cm下の褐色シルト層の上面である。溝はやや南側に湾曲しながら北西～南東方向に走る。両端は調査区域外へのびる。検出された部分の規模は長さ6.2m、幅1.1～1.5m（推定）、深さ9～24cmである。南壁より北壁が急な立ち上がり方をしている。底面は幾分凹凸がある。埋土は下位に褐色シルトを多く渇入する暗褐色シルトで占められている。出土遺物はない。

DⅡ－101溝跡

（図版49、写真図版45）

本遺構は調査区中央部東側にあり、DⅡ－1号古墳周湟の北10mに位置している。検出面は褐色シルト層の上面である。南壁の一部が検出されただけで、そのほかは調査区域外にある。検出された部分の規模は長径（北西～南東）2.2m、短径1.2m、深さ22～27cmである。壁面は底面から緩く立ち上がる。埋土は上部が黒褐色シルト、下部が全体に微細な砂を混入する極暗褐色シルトや黒褐色シルトで占められている。出土遺物はない。

EⅡ－101溝跡

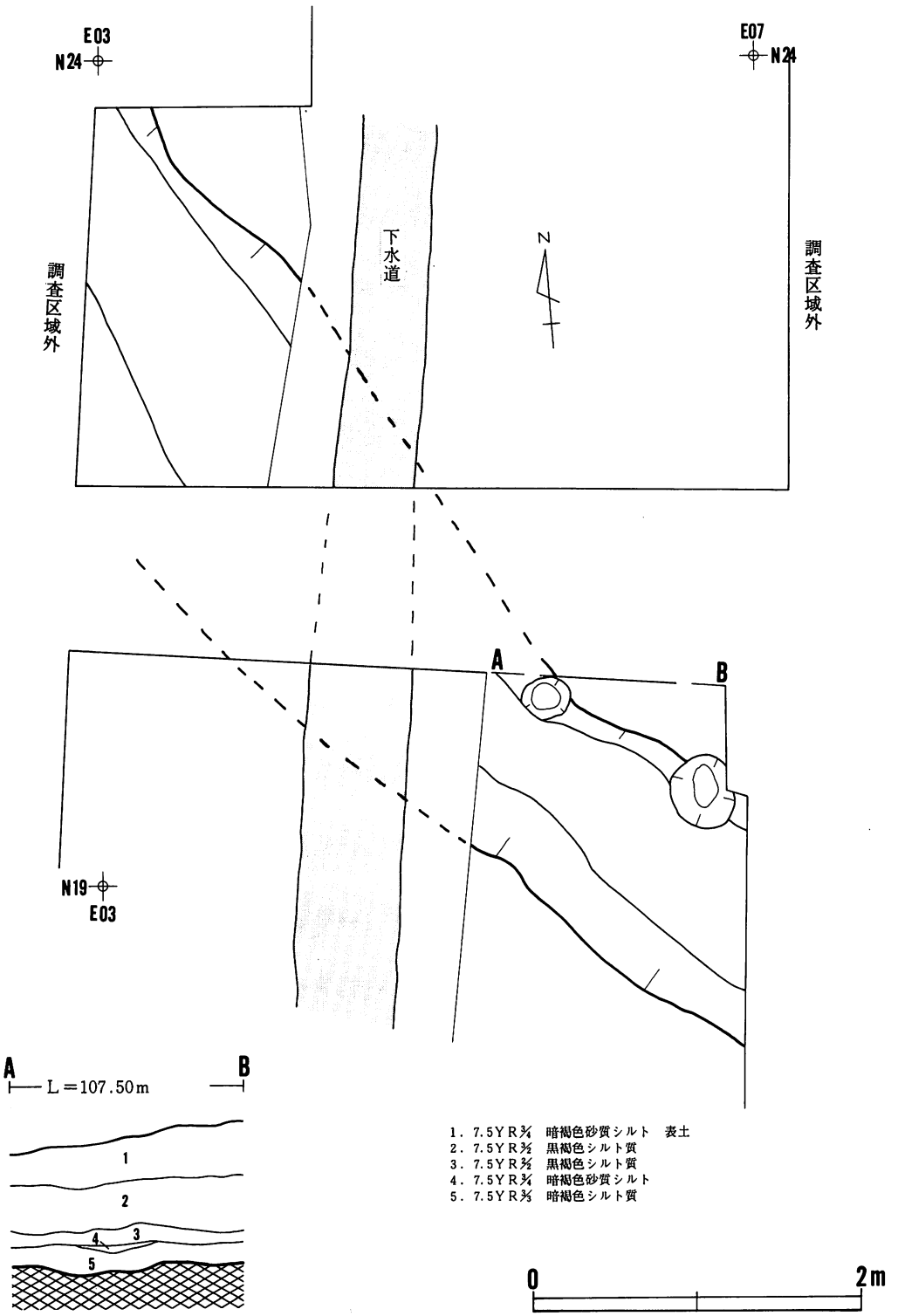
（図版50・51、写真図版46）

本遺構は調査区中央部東側にあり、EⅡ－2号古墳周湟の南4.5mに位置している。検出面は褐色シルト層の上面である。EⅡ－102溝跡を切ってつくられ、北壁の一部は攪乱を受けている。溝はほぼ東西方向を走り、両端が調査区域外へのびている。EⅡ－102溝跡と重複する部分は精査時の掘りすぎにより北壁を消失した。検出された部分の規模は長さ3m、幅2m、深さ23～32cmである。底面は大小の凹凸が多くみられる。埋土は上部が黒褐色シルト、下部が褐色シルトを粒状に混じる黒色シルトで占められている。出土遺物はない。

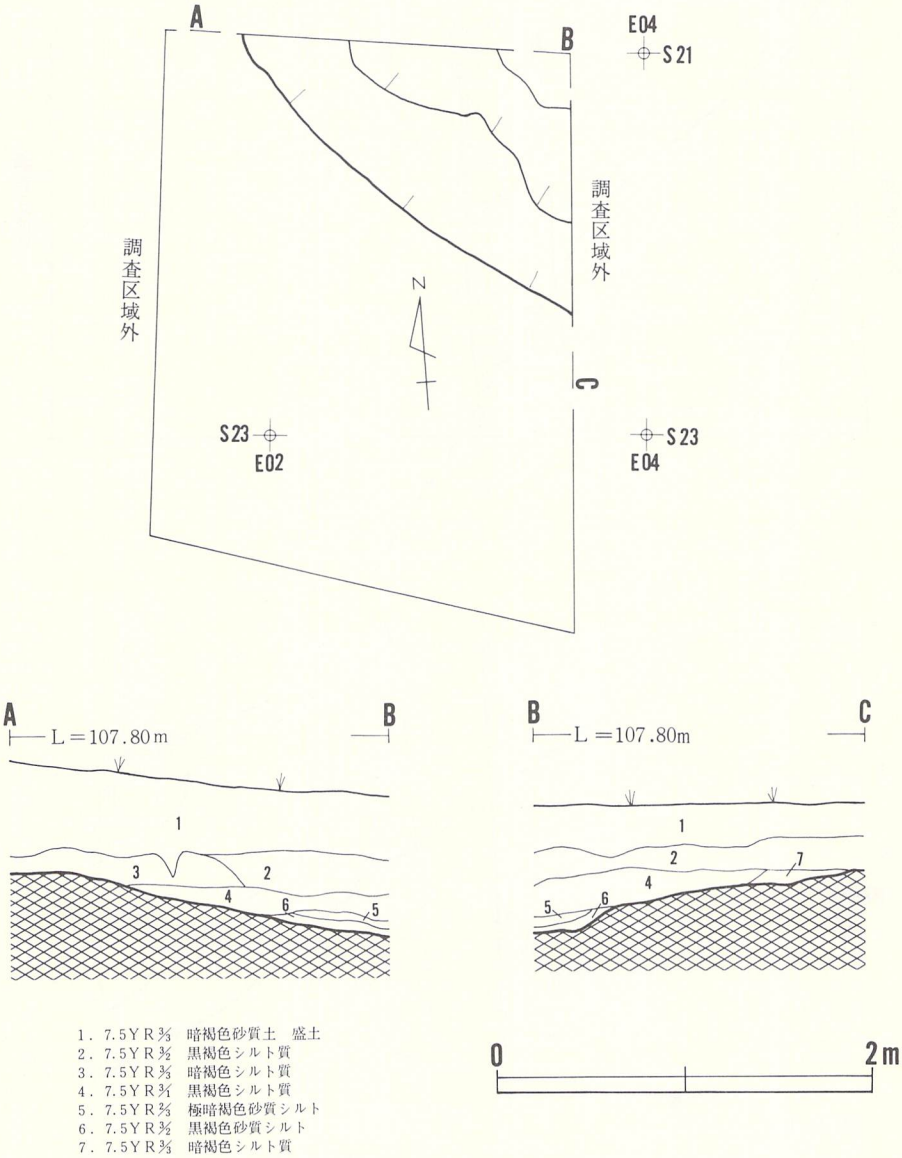
EⅡ－102溝跡

（図版50・51、写真図版46）

本遺構は検査区中央部東側にあり、EⅡ－2号古墳周湟の東側と隣接している。検出面は褐色シルト層の上面である。北側がEⅡ－103溝、南側がEⅡ－101溝に切られ、東側の一部が新しい攪乱によって壊されている。溝は南西～北東方向に走り、両端が調査区域へのびる。検出

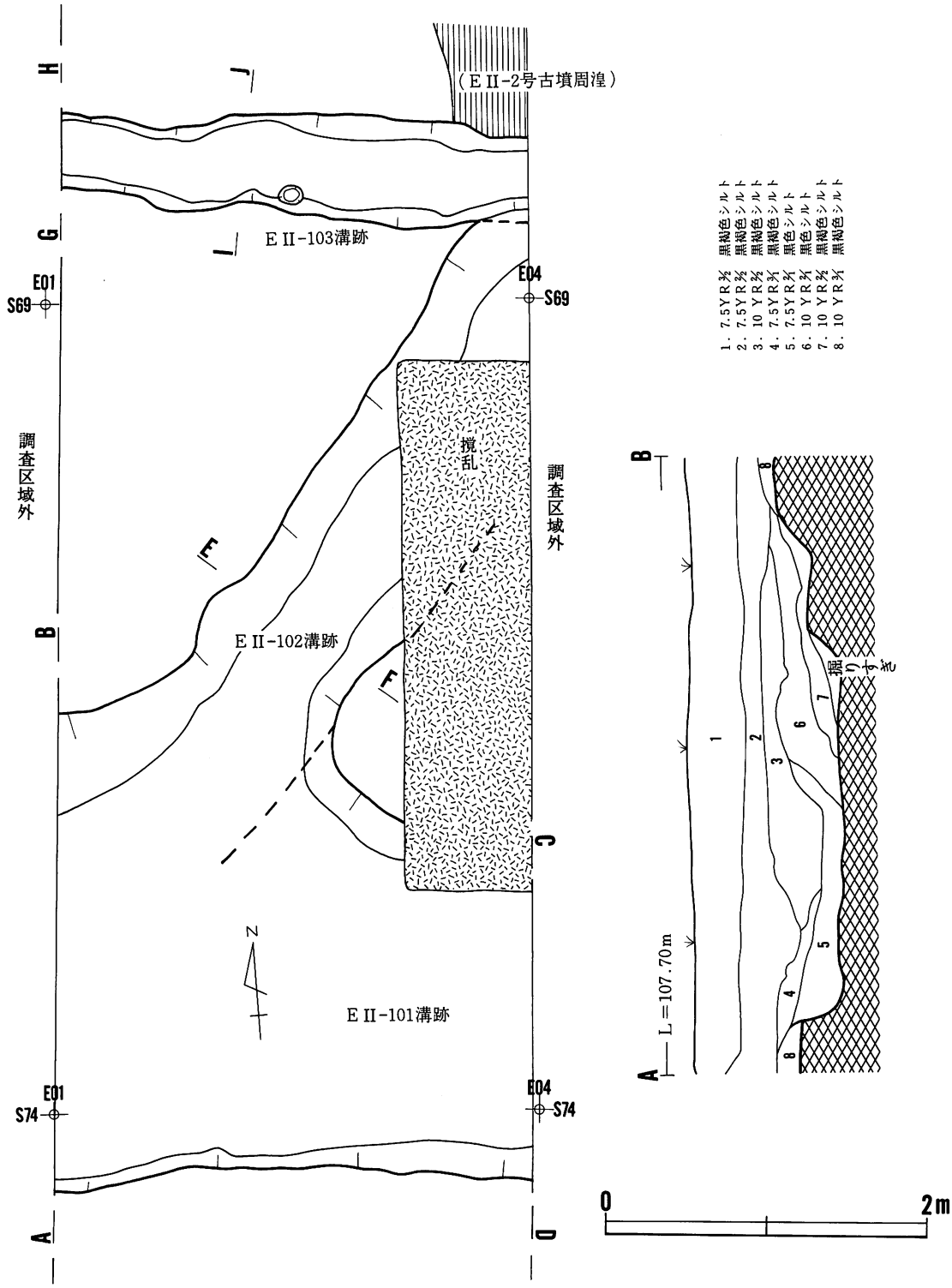


図版48　CⅡ－102 溝跡

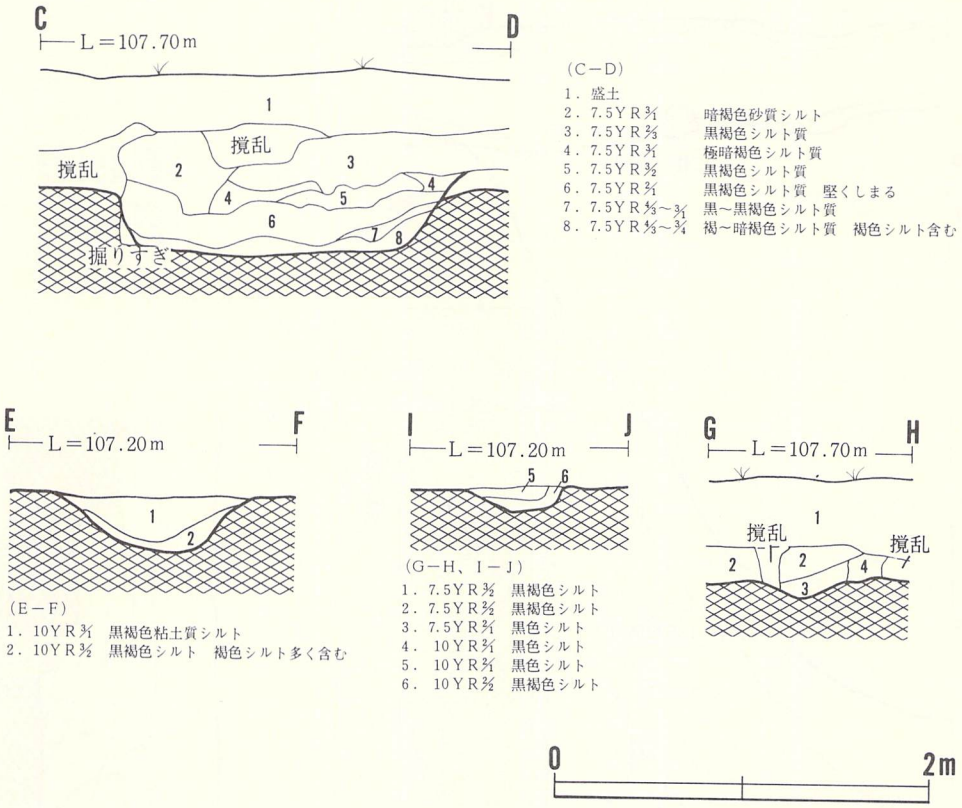


図版49　DⅡ－101溝跡

された部分の規模は長さ3.3m、幅91～101cm、深さ26～29cmである。底部幅は46～52cmである。底面は大小の凹凸がある。埋土は下位に褐色シルト粒状に多く混じる黒褐色シルトで占められている。出土遺物はない。



図版50　ＥⅡ－101・102・103溝跡(1)

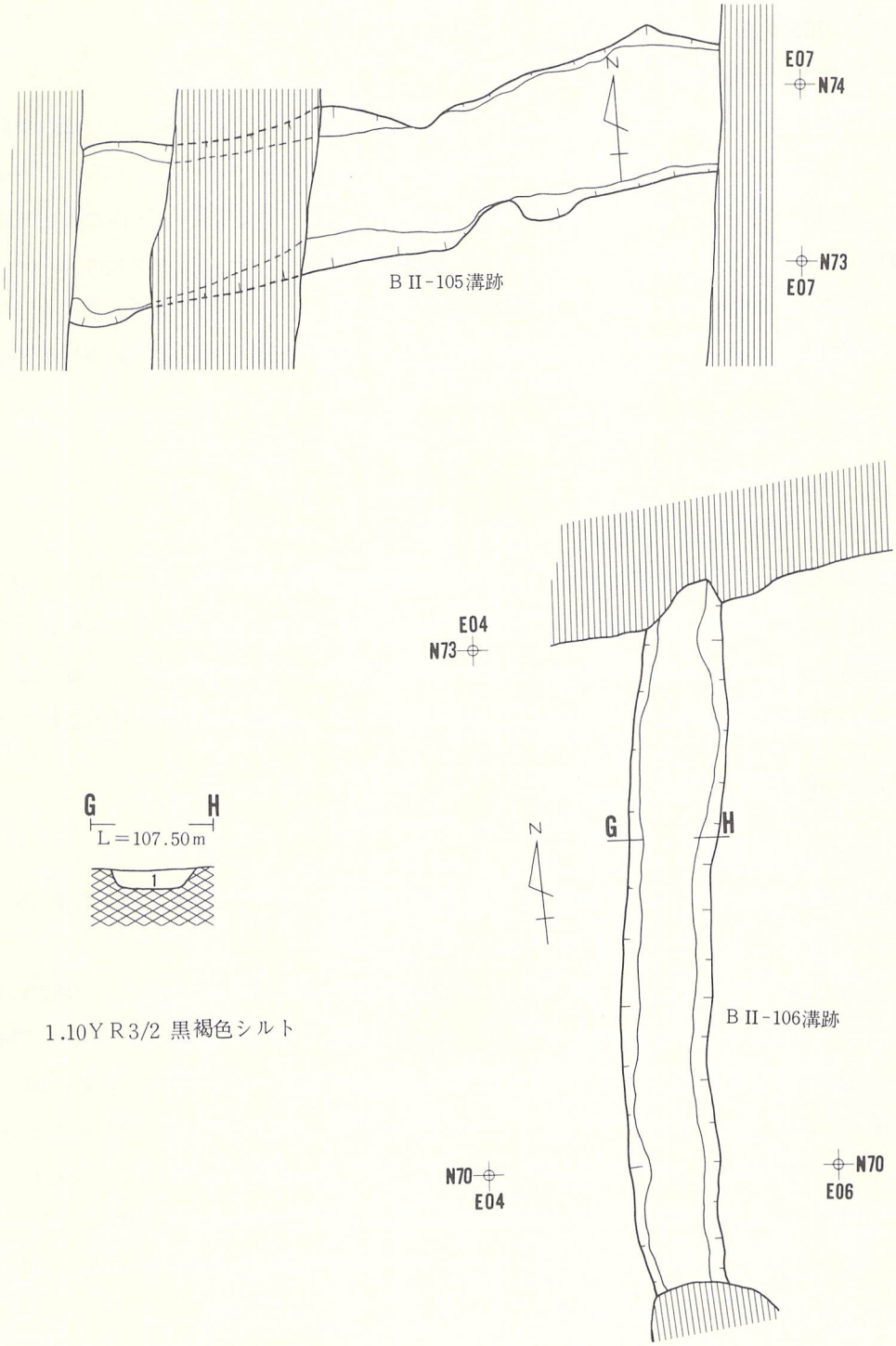


図版51　EⅡ－101・102・103溝跡（2）

FⅡ－103溝跡

（図版50・51、写真図版47）

本遺構は調査区中央部東側にあり、EⅡ－2号古墳周湟やEⅡ－102溝跡を切ってつくられている。検出面は褐色シルト層の上面である。溝は東西方向に走り、両端が調査区域外へのびている。検出された部分の規模は長さ2.9m、幅46～66cm、深さ8～11cmである。底部幅は30～44cmである。底面は凹凸があり平坦でない。埋土は主に上部が亜円礫（径3～6cm）、暗褐色シルトの小粒が混じる黒褐色シルト、下部が黒褐色シルトで占められている。出土遺物はない。



図版52　B II - 105・106溝跡

BⅡ－105溝跡

（図版52、写真図版48）

本遺構は調査区北部東側にあり、BⅡ－1号古墳周湟の北約1.5ｍに位置している。検出面は褐色シルト層の上面である。BⅡ－58・59土坑、BⅡ－106溝跡を切ってつくられている。西側は南北に走る国道の幅80cmの側溝によって壊されている。溝はほぼ南北方向に走り、西端が調査区外へのび東端が途中で消失している。検出された部分の規模は長さ3.8ｍ、幅76～106cm、深さ10～38cmである。底面はやや北側に傾斜している。埋土は黒褐色シルトで占められている。埋土から外面にハケメ痕をもつ土師器甕形土器の体部小破片（長径1～3cm）が3点出土している。

BⅡ－106溝跡

（図版52、写真図版48）

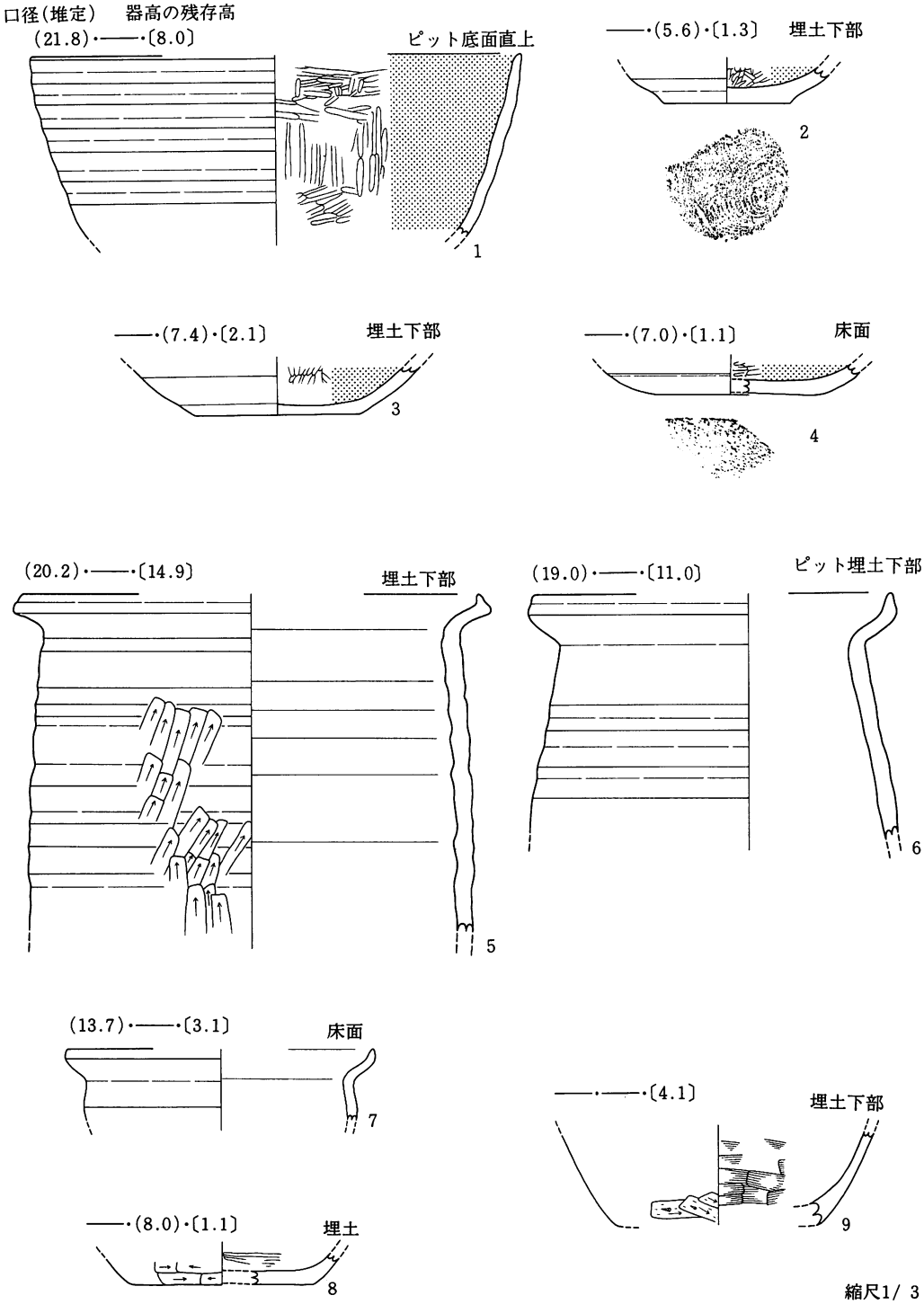
本遺構は調査区中央部東側に、BⅡ－1号古墳周湟内に位置している。北側がBⅡ－105溝に、南側BⅡ－60土壙に切られている。溝はほぼ南北方向に走る。検出されている部分での規模は長さ5.3ｍ、幅44～56cm、深さ10～15cmである。断面は「U」字形を呈する。埋土は小ブロックの褐色シルトが混じる黒褐色シルトで占められている。埋土から鉄滓が検出されている。

Ⅴ．遺構外の出土遺物

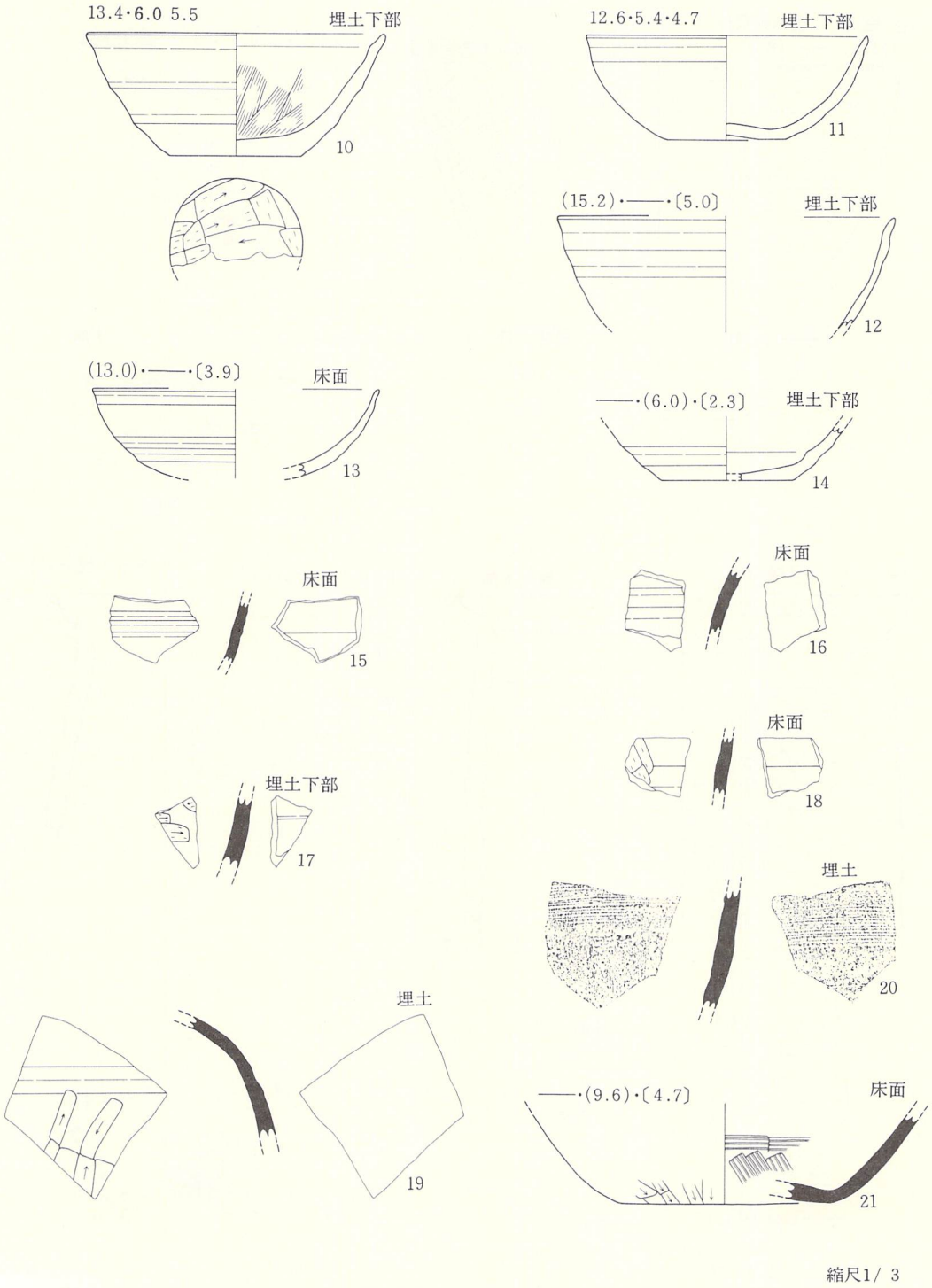
（図版58、写真図版52～54）

須恵器甕形土器（50）、酸化焔焼成の須恵器坏形土器（51）、石製品（52、55）、石鏃（53）、切子玉（54）、勾玉（56）、古銭（57～60）が出土している。

50は外面に叩き目痕をもつ体部片である。51はロクロ切り離しが回転糸切りで、再調整のみられないものである。体部が内湾し、口唇部がやや外反する。52、55の用途については不明である。52は扁平で薄く、形状が台形を呈する。55は円形の石製品である。53は長さ3cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、重さ1.35gのものである。石質はチャートである。54は水晶製の切子玉である。長さ1.9cm、最大幅1.2cm、内孔径0.2cm、重さ1.98gである。孔は片側から穿孔してつくられている。56はメノウ製の勾玉である。長さ3cm、厚さ1.1cm、最大幅1.4cm、孔の外径0.2cm、重さ1.98gである。孔は両側から穿れてつくられている。54、56は共にEⅡ－2号古墳周辺から出土している。57～60は「寛永通宝」である。

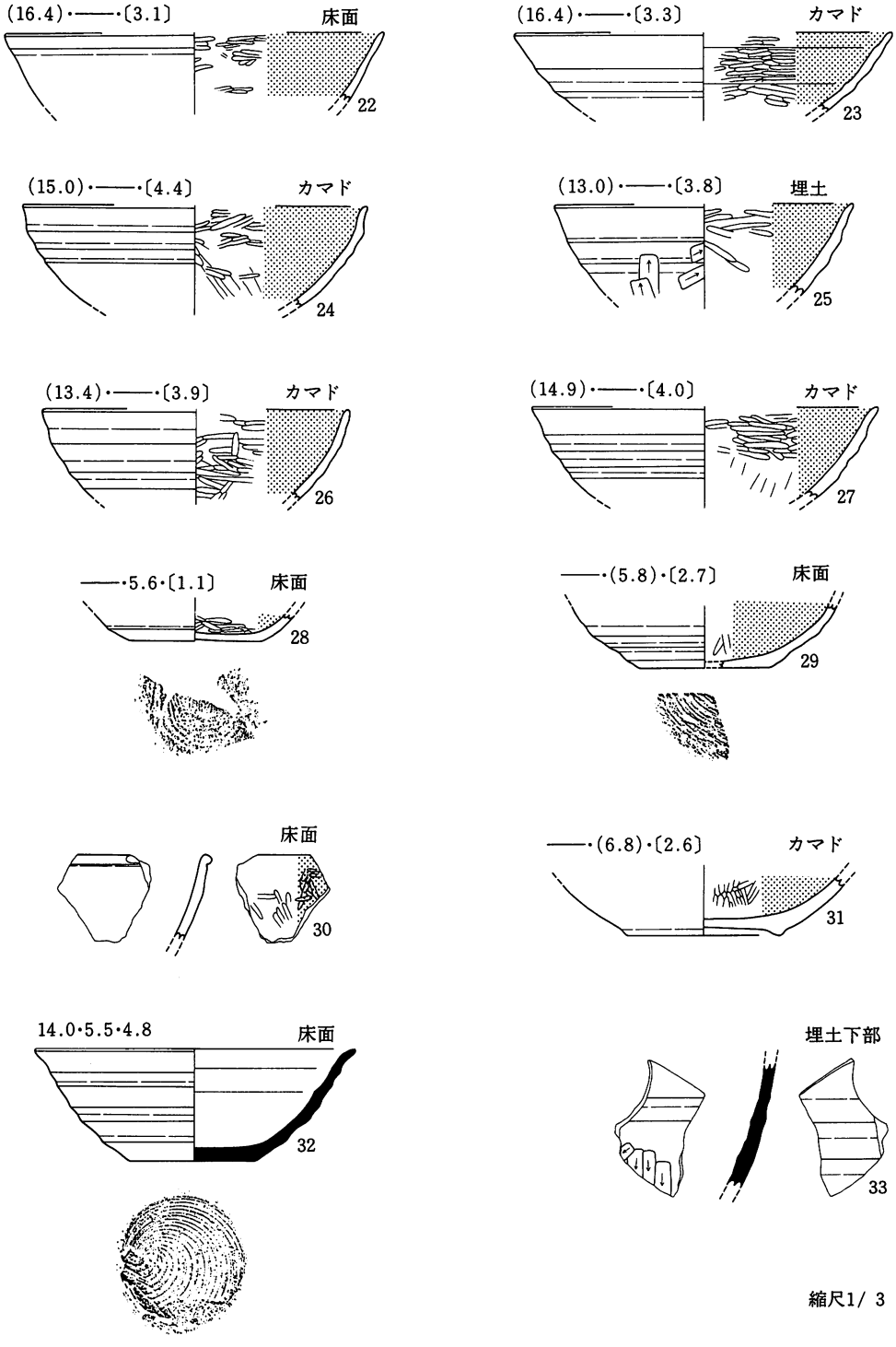


図版53　F Ⅰ－1住居跡出土遺物（1）

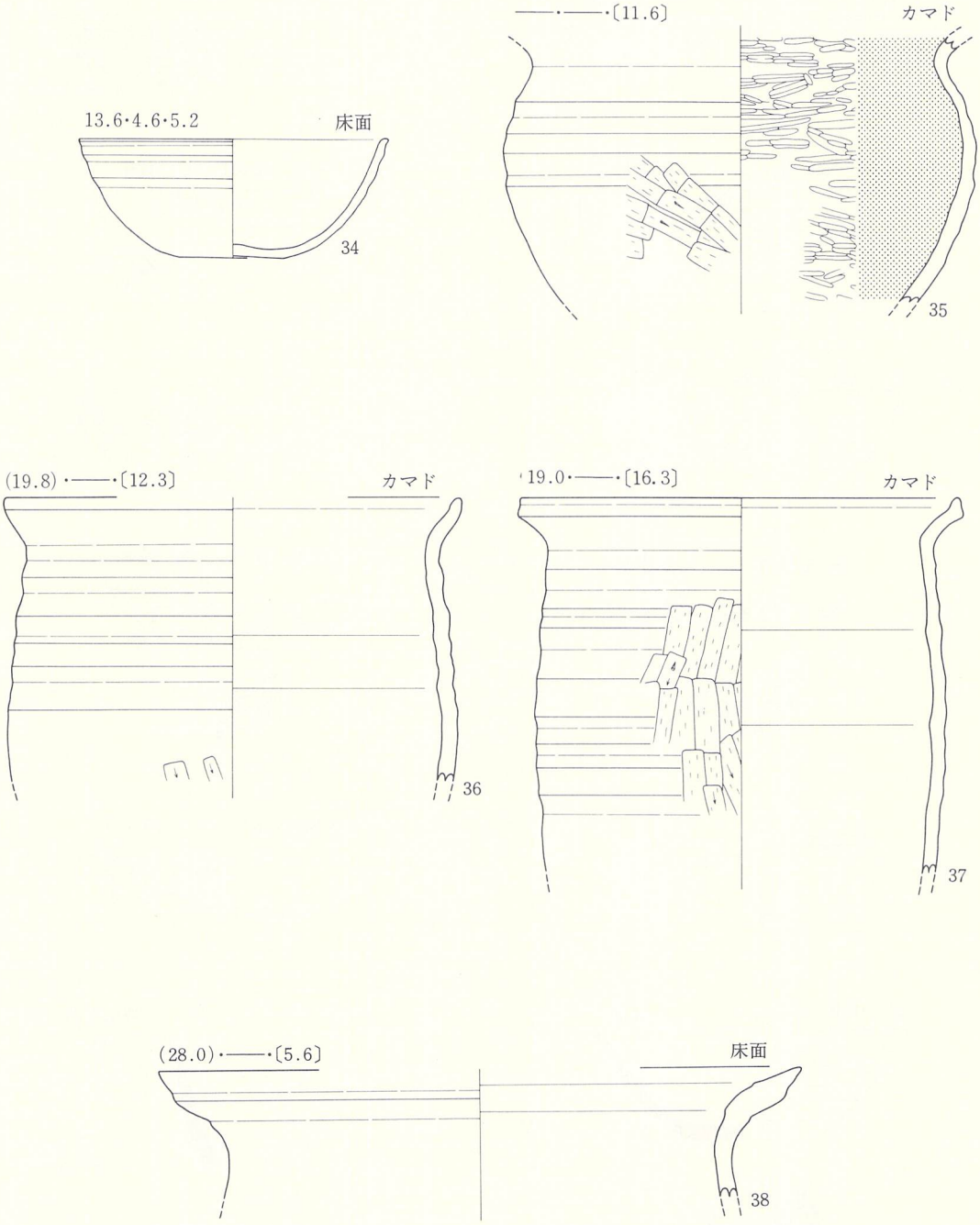


縮尺1/ 3

図版54　F Ⅰ－1住居跡出土遺物（2）

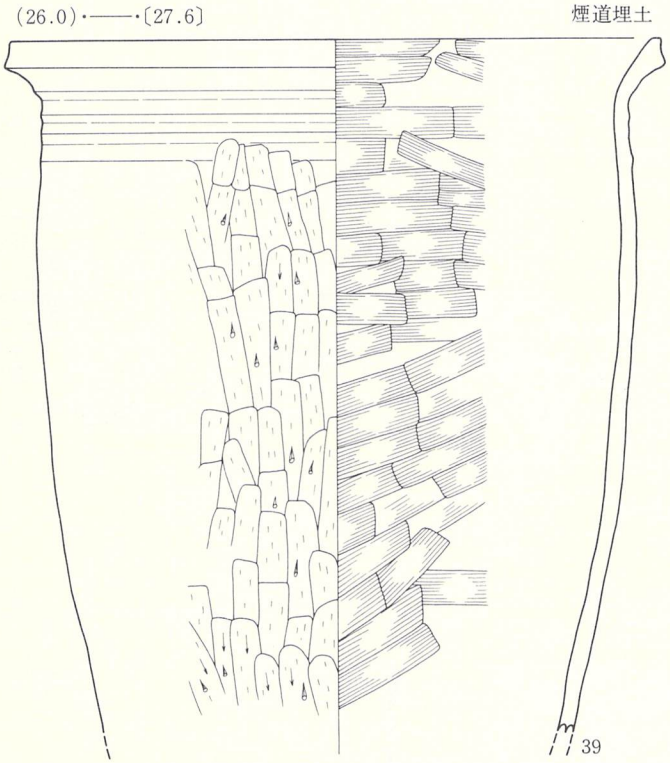


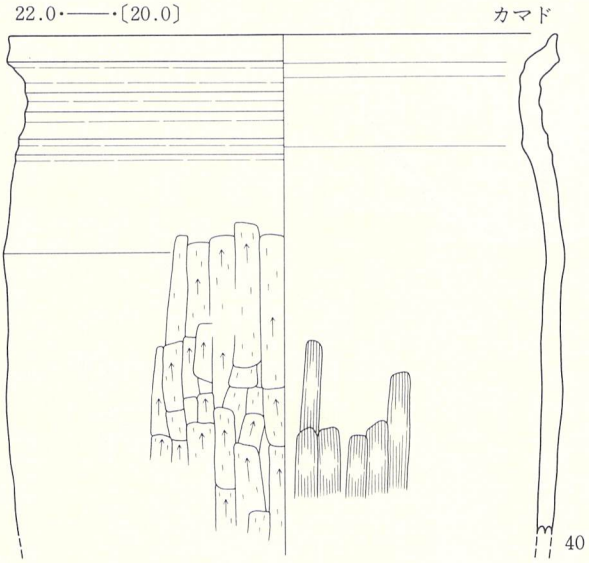
図版55　F Ⅰ－2住居跡出土遺物（1）



縮尺1/ 3

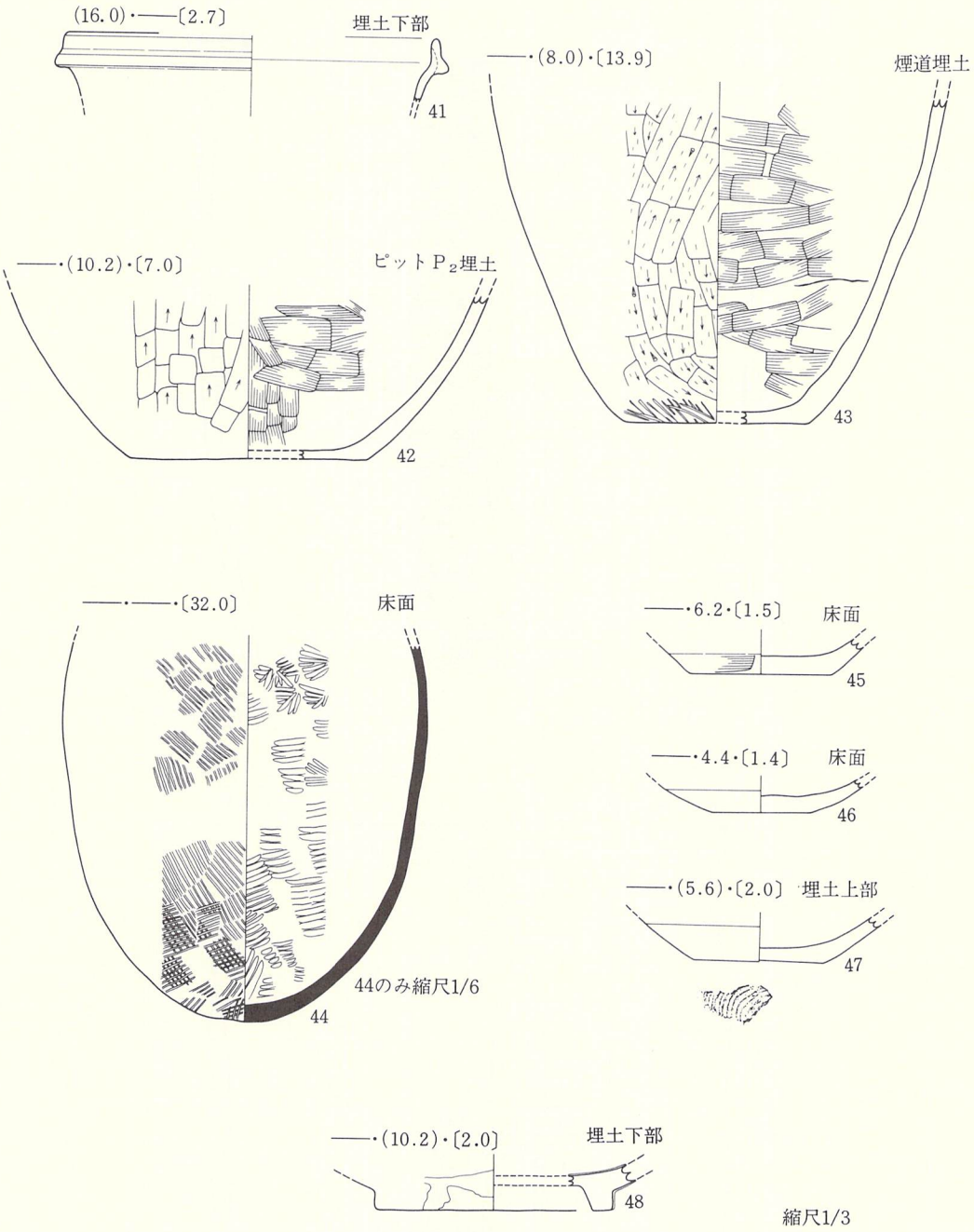
図版56　F Ⅰ－2住居跡出土遺物（2）



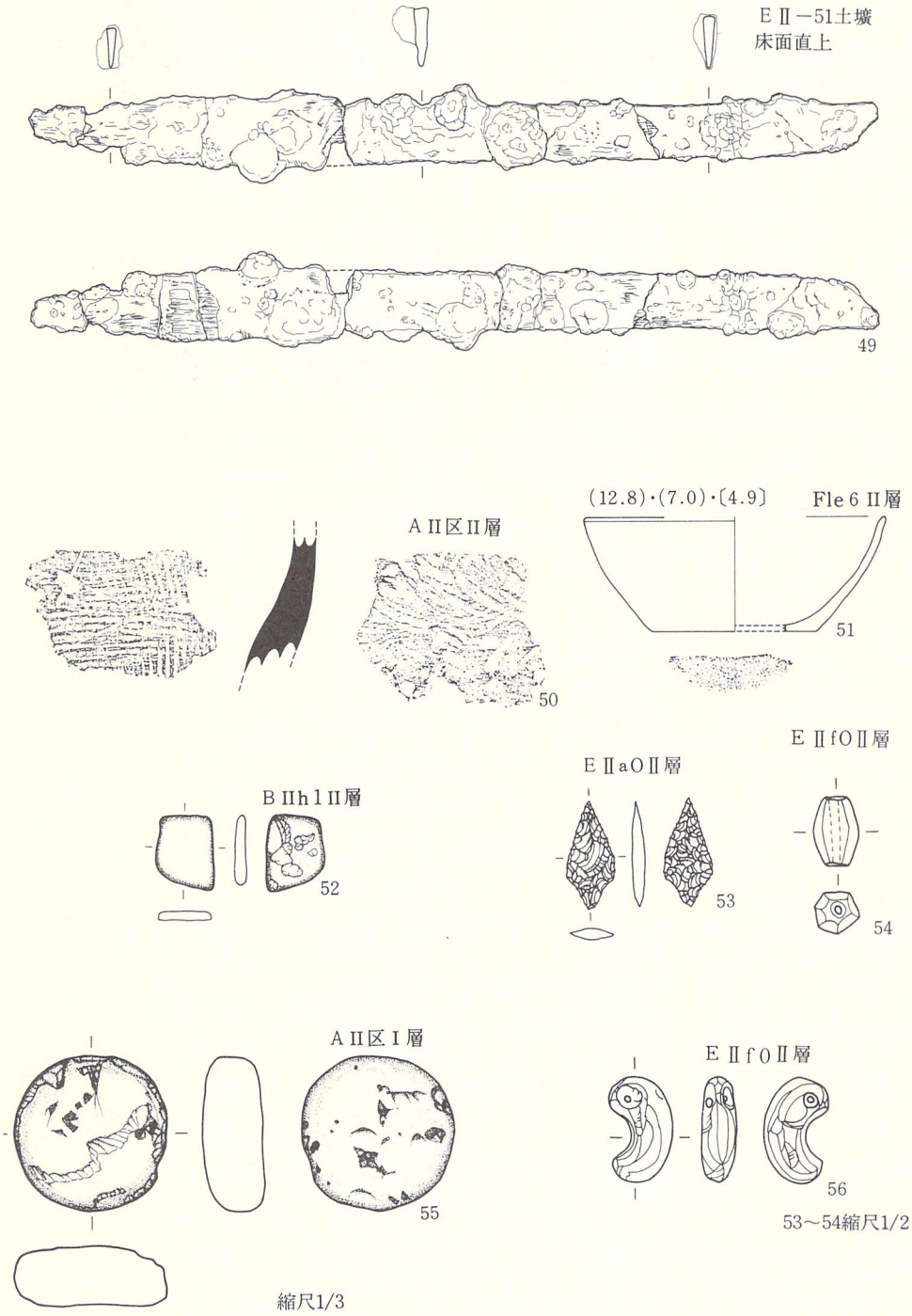


縮尺1/ 3

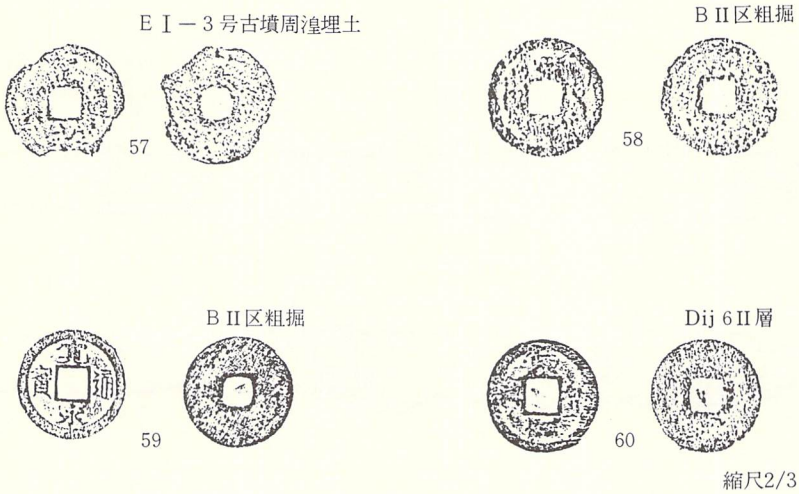
図版57　ＦⅠ－２住居跡出土遺物（３）



図版58　F Ⅰ－2住居跡出土遺物（4）



図版59　EⅡ－51土壙・遺構外出土遺物



図版60　出土遺物　古銭

Ⅵ　ま　と　め

検出されている遺構は竪穴住居跡２棟、古墳周湟15基、土坑10基、土壙７基、溝跡20条である。出土遺物は勾玉、切子玉、土師器、須恵器、直刀、鉄滓、古銭、石製品、鉄製品などである。

〈竪穴住居跡〉

調査区南端から平安時代の竪穴住居跡が２棟検出されている。２棟とも調査区域外にのびている。ＦⅠ－１・２住居跡から、土師器では無調整のロクロ使用坏・ロクロ使用の甕形土器、須恵器では坏・壺・甕形土器・酸化焔焼成の坏形土器が出土している。ＦⅠ－２住居跡出土の須恵器坏形土器は回転糸切り痕をもち無調整のものである。底径に対する口径の比も0.39と½～⅓に入る。これらの遺物は相原康二氏の土器編年（1981、相原）第Ⅸ群期、高橋信雄氏の土器編年（1982、高橋）Ⅲ－２群に属し、10世紀代に位置づけられると思われる。２棟の新旧関係はＦⅠ－２住居跡がＦⅠ－１住居跡よりも古いと推定される。これらと同時期の住居跡は紫波町古館橋遺跡、矢巾町渋川遺跡から検出されている。

〈古墳周湟〉

古墳は墳丘がすべて削平されており、周湟によって確認した。調査区の東西幅が約４ｍと狭いため古墳全体の規模を把握できたものはない。主体部はＢⅡ－１号古墳以外すべて調査区域外にある。ＢⅡ－１号古墳では主体部と推定される位置から主体部を検出することができなかった。削平されていたと思われる。危険ではあるが周湟がほぼ円状に巡るものと仮定して周湟の外径を推定すると、最大はＣⅡ－１号古墳で外径13～14ｍ、最小はＢⅡ－５・６号古墳の外径５～６ｍである。外径が推定できた12基のうち、外径10ｍ以上の古墳は４基である。幅は１～２ｍのものが大半である。深さは７～60cmで、30～50cmのものが多い。周湟の断面は内側の壁が外側の壁より急な角度で立ち上がるタイプと緩い「Ｕ」字形のタイプとがある。昭和59年に矢巾町教育委員会が狄森古墳群遺跡を調査し検出した11基には周湟の南側が跡切れるタイプとそうでないタイプがあることが確認されている。ＢⅡ－１号古墳は周湟が南側で跡切れるタイプである。

古墳周湟15条からはほとんど遺物は出土していない。僅かにＢⅡ－１号古墳周湟の埋土から外面にハケメ、内面にナデ調整された土師器甕形土器の小被片が数点出土しているだけである。矢巾町教育委員会が調査した５号古墳の主体部からは勾玉60個、管玉７個、切子玉８個、算盤玉２個、ガラス玉約1230個の玉類、14号古墳からは須恵器平瓶、刀類などが出土している。矢巾町教育委員会の発掘調査で出土した遺物から、今回検出された古墳も７世紀後半～８世紀代

にかけて築造されたと推定される。

狄森古墳群遺跡は過去２回にわたる発掘調査で13基、現存する古墳１基、今回の調査で15基と限られた狭い範囲で29基確認された。このことから、本遺跡はかなり高い密度で古墳が分布する大規模な古墳群遺跡であることが判明した。

県内の末期群集墳は古墳主体部が積石式のものとそうでない土壙のもの（土壙・礫床・石囲い）とがある。従来、前者は江釣子村八幡・猫谷地・五条丸古墳群・花巻市熊堂古墳群・盛岡市太田蝦夷森古墳群など盛岡以南の北上川中流域西部の低位段丘で古代の城柵あるいは開拓拠点の近くに立地、後者は西根町谷助平古墳、岩手町浮島古墳、二戸市堀野古墳など盛岡以北の北上川上流域および馬渕川流域の丘陵、台地、沖積地に立地し古墳群の規模も小さいとされてきた。

昭和59年に本遺跡の古墳主体部を調査した矢巾教育委員会の西野修氏の御教示によると、主体部４基はいづれも土壙（うち１基礫床）であるという。しかも、前述したごとく段丘北東部の限られた範囲の調査で28基、西に遺存する１基を合わせて29基の古墳が確認され、密度が高いことからその数は100基近くに及ぶものと予想されている。

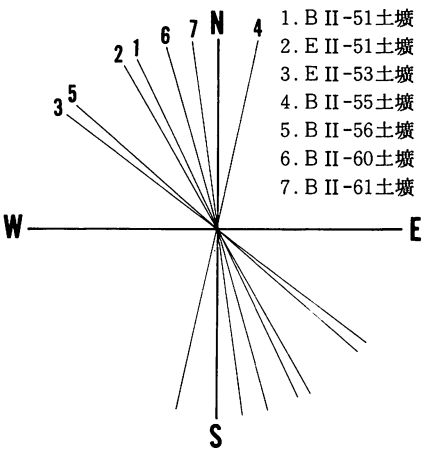
従って、本遺跡は古墳の主体部が土壙である点で盛岡以北の古墳群に類似し、立地（低位段丘）、位置（徳丹城の近く）、古墳の数で盛岡以南の古墳群に一致し、従来の古墳群遺跡とは異なった性格をもつ遺跡であることがわかり、古代東北の蝦夷や開拓を考える上で重要な手掛を与えると同時に新たな問題を提起したと思われる。

古墳の規模一覧表

	古　墳　名	検出された周湟の長さ	周湟の幅	周湟の深さ	周湟の底部径	推定される外　径	検出された周湟の位置
1	BⅠ－１号古墳	3.2 m	1.44～1.56 m	14～27cm	0.63～ 1.2 m	8 ～ 9 m	南 西 側
2	DⅠ－１号古墳	3.1	1.8～ 2.0	44～61	0.64～0.86	8 ～ 9	北 西 側
3	DⅠ－２号古墳	2.1	1.4	40	0.44～0.50	5 ～ 6	南 西 側
4	DⅠ－３号古墳	2.1	－	51～59	0.92～1.32	5 ～ 6	北 東 側
5	EⅠ－１号古墳	2.9	1	7 ～51	－	－	南 東 側
6	BⅡ－１号古墳	7.4	1.1～ 1.4	26～28	0.48～0.76	5 ～ 6	南側・東側
7	BⅡ－２号古墳	6.2	1.52～1.70	10～45	1.09～1.24	10～11	西　　側
8	BⅡ－３号古墳	5	1.10～1.30	12～26	0.9～1.11	－	西　　側
9	BⅡ－４号古墳	－	－	30	－	7 ～ 8	西　　側
10	BⅡ－５号古墳	3.7	0.50～0.55	3 ～11	0.24～0.45	5 ～ 6	北 東 側
11	CⅡ－１号古墳	1.5	1.36～1.64	12～50	0.36～1.22	13～14	東　　側
12	DⅡ－１号古墳	1.7	1.77～2.31	39～60	0.42～0.80	11～12	北　　側
13	EⅡ－１号古墳	－	1.3	28～50	1.06	－	北　　側
14	EⅡ－２号古墳	－	－	44		6 ～ 7	西　　側
15	EⅡ－３号古墳	1.3	1.92～2.14	36～41	1.58～1.98	10～11	南　　側

〈土壙〉

7基が検出されている。平面形は隅丸の長方形である。規模は長径0.78～1.98m、短径が0.46～0.82mである。深さは10～49cmである。長径が1m未満のものが2基、1～1.5m未満のものが2基、1.5～2m未満が2基、不明が1基である。主軸方位は北西ー南東が6基、北ー南が1基である。矢巾町教育委員会で調査した土壙(SK04)1基も主軸方位が北西ー南東である。



土壙の主軸方位

出土遺物はEⅡ—51土壙から直刀1点が出土したのみである。埋土をふるいにかけて調べたが玉類などの遺物は検出されなかった。前述のSK04土壙からは直刀1点、刀子1点が検出されている。BⅡ—51土壙の埋土中には多くの炭化物が混じっていた。

BⅡ—60・61土壙はBⅡ—1号古墳の周湟に切られている。また、BⅡ—55・56土壙はBⅡ—1号古墳、EⅡ—51土壙はEⅡ—1号古墳、EⅡ—53土壙はEⅡ—3号古墳と隣接している。このことから、近隣する土壙と古墳とにはある程度の時間差が考えられる。新旧関係についてはBⅡ—60・61土壙がBⅡ—1号古墳より古いほかは出土遺物が少ないため両者の時期が不明である。

〈土坑〉

10基検出されている。平面形は隅丸方形、不整な方形、方形、不整な台形などの方形を基調とするもの4基、不整な楕円、円、細長い円などの円形基調とする3基、不整形が1基、不明が2基である。他の遺構との新旧関係が明らかなものは、BⅡ—1号古墳(旧)→BⅡ—52土坑(新)、BⅡ—104溝跡(旧)→BⅡ—53土坑(新)、BⅡ—102溝跡(旧)→BⅡ—54土坑(新)、EⅡ—52土坑(旧)→EⅡ—54土坑(新)、BⅡ—58・59土坑(旧)→BⅡ—105溝跡(新)の5例である。BⅡ—54土坑は馬の蹄鉄などの鉄製品が出土していることからかなり新しい時代の土坑である。そのほかの土坑の時期は出土遺物がないためほとんど不明である。

〈溝跡〉

20条検出されている。幅の長さから次のように分けられる。最大幅が1m未満のもの(A)13条、1～2m未満のもの(B)4条、2m以上のもの(C)2条、不明1条である。Aの溝

で走る方向が南北のもの７条、東西のもの６条、Ｂの溝で北西－南東、東西、北東－南西のもの各１条、Ｃ溝で東西、北東－南西のもの各１条である。

Ａの溝では南北または東西方向に走るもので占められている。ＢⅠ－101溝はＢⅠ－１号古墳周湟を、ＦⅠ－102・103溝は平安時代に竪穴住居跡を切ってつくられている。しかし、出土遺物がないことや時期の判明している遺構に切られていないことから時期を決定することができない。ＦⅠ－101溝はＦⅠ－102溝に、ＢⅡ－104溝はＢⅡ－53土坑に切られているが、両遺構からの出土遺物がないため時期は不明である。ＢⅡ－106溝は奈良または奈良以前の土壙に切られていることから、古い溝であるといえる。そのほかの溝は出土遺物がないため時期は不明である。

参考引用文献

相原康二　1981『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書－Ⅹ－　岩手県文化財調査報告書第59集』岩手教育委員会

高橋信雄　1982「古代」『岩手の土器』岩手県立博物館

朴沢正耕　1979　「古舘橋遺跡」『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書－Ⅲ－　岩手県文化財調査報告書第35集』岩手県教育委員会

沼山源喜治　1976　「陸奥北半における末期群集墳の性格」『北奥古代文化』第８号

岩手県埋蔵文化財センター　1985『岩手の遺跡』

矢巾町教育委員会　1986『渋川遺跡』現地説明会資料

高橋信雄・赤沼英男　1986「岩手の古代鉄器に関する検討－自然科学的手法による古代鉄器の調査―」『岩手県立博物館研究報告』第４号

岡田茂弘・桑原滋郎　1974「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『研究紀要Ⅰ』　宮城県多賀城跡調査研究所

狄森古墳群遺跡出土の火山灰の蛍光X線分析

奈良教育大学　　三 辻 利 一

1．分析方法

火山灰試料は空気乾燥の中で、120 ℃で5時間乾燥したのち、タングステンカーバイド製乳針で100～200メッシュ程度に粉砕した。粉末試料は約15トンの圧力を加えて固め、コイン状の錠剤を作成した。この錠剤試料にX線を照射し、発生する蛍光X線を理学電機製エネルギー分散型蛍光X線分析装置で測定した。定量分析には、岩石標準試料ＪＧ－１を標準試料として使用した。分析値は、ＪＧ－１による標準化値で表示した。

2．分析結果

図１のＲｂ－Ｓｒ分布図より、十和田系火山灰であることが確認される。つぎに、十和田系火山灰のうち、十和田ａ火山灰、十和田ｂ火山灰、二ノ倉火山灰の相互識別には、K－Ca分布図が有効である。

図２にはK－Ca分布図を示す。明らかに十和田ａ火山灰領域に分布する。また、Fe因子も十和田ａ火山灰に対応したことから、Ｋ、Ｃａ、Ｆｅ、Ｒｂ、Ｓｒの全因子で十和田ａ火山灰に対応したことになり、十和田ａ火山灰と推定された。

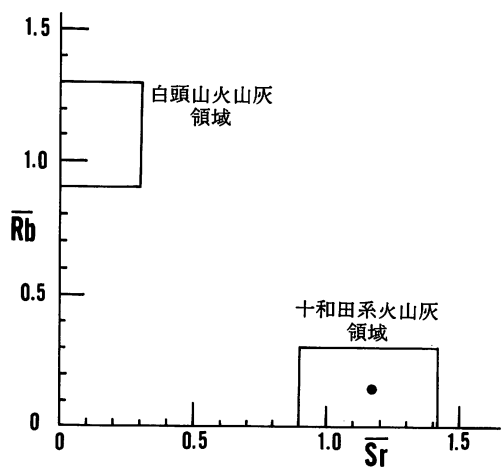


図1　狄森古墳群遺跡出土火山灰のRb－Sr分布図

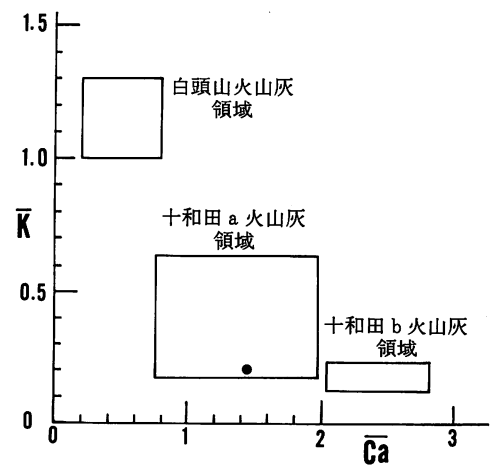


図2　狄森古墳群遺跡出土火山灰のK－Ca分布図

狄森古墳群遺跡出土直刀の金属学的解析結果

岩手県文化振興事業団 博物館　　赤 沼 英 男

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターから、狄森古墳群遺跡出土の直刀について金属学的な解析の依頼を受けた。狄森古墳群は７Ｃ後半から８Ｃ代に位置すると考えられており、同古墳群より出土した鉄器の材質と製作技法を明らかにすることは、同時期における東北地方北部の古代製鉄技術を解明するうえできわめて重要である。調査は継続中であるが、以下にこれまでの結果について報告する。

１．調査試料及び調査方法

試料鉄器は図１に示す直刀である。赤錆化が進みいくつかに切断されているものの製作時の形態をよくとどめている。

調査試料採取位置は図１のＡ部である。採取した試料は２分し一方は化学成分分析用に、他方は樹脂に埋め込み十分研磨した後組織観察に供した。なお、化学成分の分析には極力黒錆部を用い、結合誘導プラズマ法（ＩＣＰ法）により行った。また、組織観察用試料の研磨にあたっては、試料の膨潤及び崩壊防止のため水を一切使用しない方法をとった。

２．調査結果並びに考察

図２は直刀の断面マクロ組織である。断面中央部はＦｅ分がイオン化し外部に流出したためそのほとんどが失われている。わずかに刃先部と皮金部を残すだけである。

比較的残存状態の良好な部分（図２のＡからＤ部）を高倍で観察したものが図３のａからｄである。いずれも内部に白色、または微小な黒点群からなる網目状組織を確認することができる。白色をした結晶は、もとの健全な鋼中におけるパーライト相のうちフェライト相が銹化によって失われセメンタイトのみが残ったものである。一方、微小な黒点群からなる網目状組織はセメンタイトが欠落して生じた組織であろう。また、これらの組織によって囲まれる黒錆層の小領域はもとのフェライト相に対応する。銹化による結晶の膨張を無視すれば図３－ａ及びｂはフェライト結晶の大きさが15～20μとなる。さらに白色結晶及び微小な黒点群が占める領域をもとの鋼のパーライト相とすれば、これらはいずれも炭素含有量が０.１～０.２％と評価される。フェライト結晶が比較的小さいことから、この直刀の刀先から刀身断面中央の皮金部はパーライト変態点以上の高温領域から比較的はやい速度で冷却された軟鋼によって構成されていたものと考えられる。

図３－ｃ及びｄは棟部の代表的な組織である。図３－ｃはａ及びｂと同様炭素含有量が０.２％程度、図３－ｄは内部にフェライト結晶を読みとることができないことから、炭素含有量が０.６～０.７％に対応する組織と推定される。いずれの組織も熱的処理の跡を読みとることはで

きない。棟部はパーライト変態点以上の高温領域からゆるやかに冷却された軟鋼と炭素含有量の比較的高い硬鋼によって構成されていたことがわかる。

刀身断面中央部の大半が鉄分の流出によって失われているため、製刀法について詳細に検討することは困難であるが、これらの観察結果から少なくともこの直刀は炭素含有量が0.6～0.7％程度の硬鋼と0.1～0.2％程度の軟鋼による合せ鍛えの構造をとっていたことを指摘できる。

鋼中に残存する介在物は非常に少なく、刀身断面中央から棟部にかけてウスタイト主体あるいはファヤライトが珪酸塩質のガラスに包み込まれたタイプのものが確認されるにすぎない。チタン鉱物を含む介在物が存在しないことから、原料は鉱石であり、製刀に当たっては比較的清純な鋼が使用されたものと考えられる。

表１は錆片の化学成分分析結果である。鉄は銹化の過程で酸素と水素分を増し、Ｆｅ分の含有量は減ずる。従ってもとの鋼中の化学組成を推定するためには対Ｆｅ比をとって検討する必要がある。表１には上段に分析値を、また対Ｆｅ比を下段に示している。この表に従えば砂鉄の標識成分であるＴｉは0.005％と低い値をとる。またＣａ、Ｍｇといった介在物成分も少ない。一方、鉱石の標識成分であるＣｕは、0.185％と極めて高い値を示している。この分析結果から、使用原料は含銅磁鉄鉱であり、作刀にあたっては不純物の少ない鋼が使用されたものと推定される。先の組織観察の結果とよく一致する。なお、Ｓｉが0.253％と他に比べ高い値をとるが、試料の銹化の状態とを考え合わせれば、これは粘土や土砂による汚染の影響と判断される。

東北地方北部より出土した鉄器の調査で含銅磁鉄鉱の使用が確認された初めての例である。この直刀に使用された地金は大陸から輸入された可能性がきわめて高い。

蕨手刀を始めとする鉄器の自然科学的調査の結果、８Ｃには東北地方北部でも砂鉄の使用が確認されている[1)]。今回調査した直刀は７Ｃ後半～８Ｃ代のものと推定される。これらの結果を総合すれば７Ｃ後半から８Ｃ前半が東北地方における製鉄技術上の大きな移行期とみることができる。今後同古墳及び同時期の遺跡から出土した数多くの鉄器の調査を進めることにより、この時期の製鉄技術の変遷をより明確にすることができるであろう。

表１　直刀の化学組成

T.Fe	Cu	Mn	Ti	Ca	Si	Mg
61.553	0.114 / 0.185	0.002 / 0.003	0.003 / 0.005	0.016 / 0.026	0.156 / 0.253	0.004 / 0.006

参考文献

1）高橋信雄・赤沼英男　1984「蕨手刀からみた東北北部の古代製鉄技術」『季刊考古学』８号Ｐ27～33

高橋信雄・赤沼英男　1985「岩手の古代鉄器に関する検討(3)」『岩手県立博物館研究報告3号』Ｐ1～8

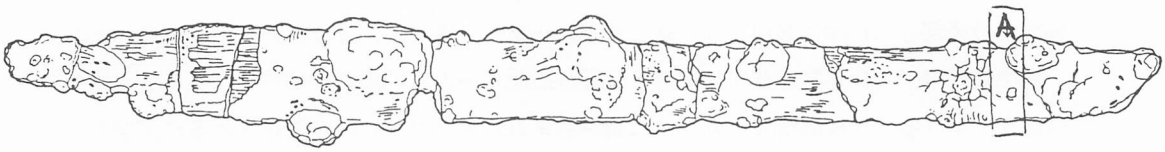


図1　調　査　資　料

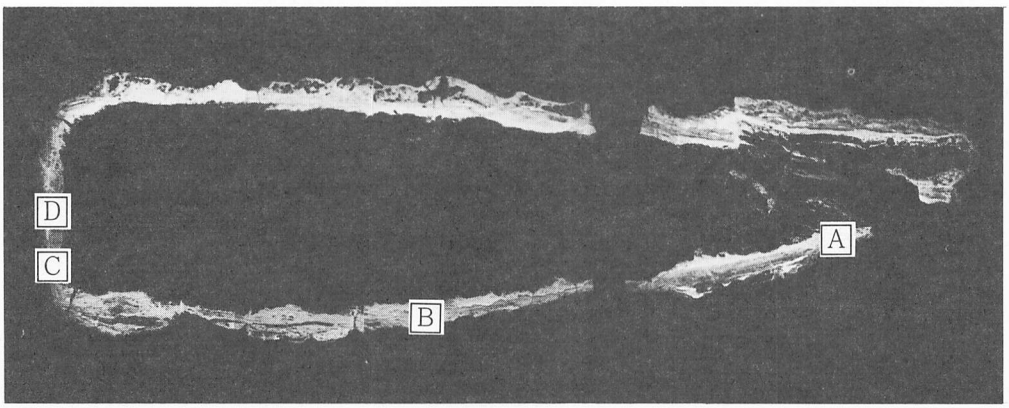


図2　刀身断面マクロ組織

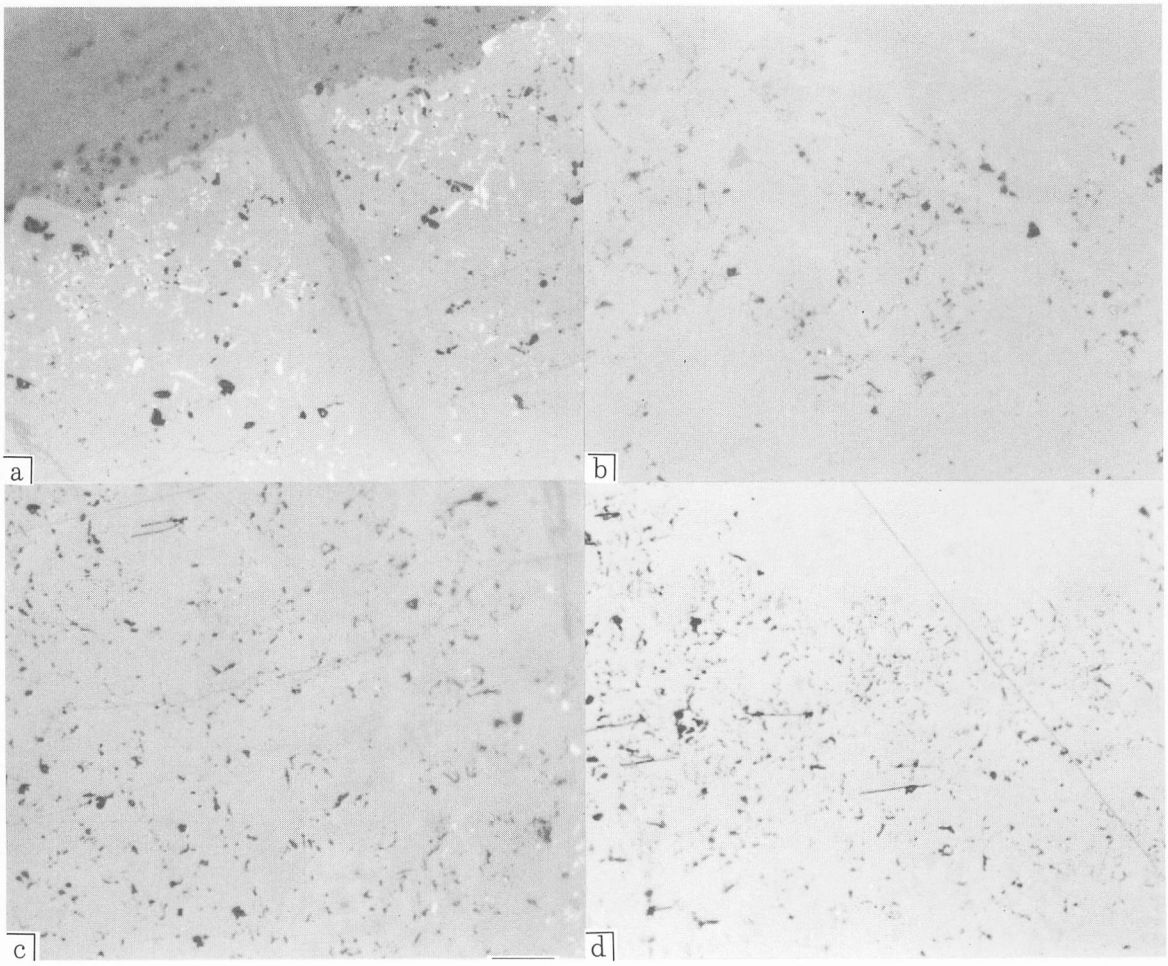


図３　黒錆層中の残留セメタイト及びフェライト結晶組織

写真図版

a．調査前の遺跡現況西側（ＢⅠ区）

b．調査前の遺跡現況西側（D・ＥⅠ区）

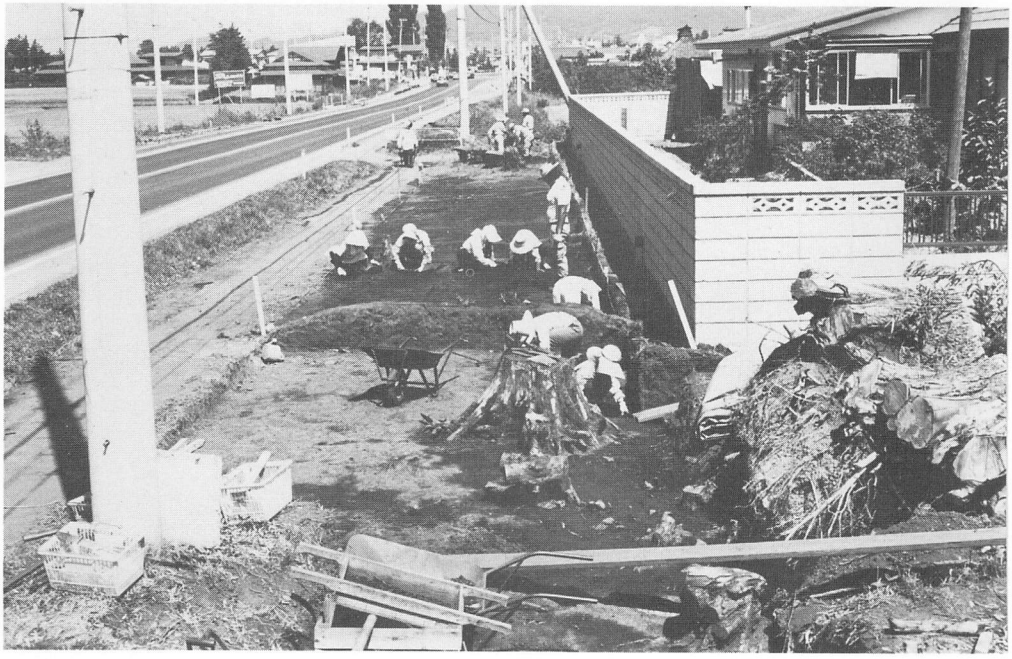
写真図版 1

a．調査前の遺跡現況東側（CⅡ区）

b．調査前の遺跡現況東側（D・EⅡ区）

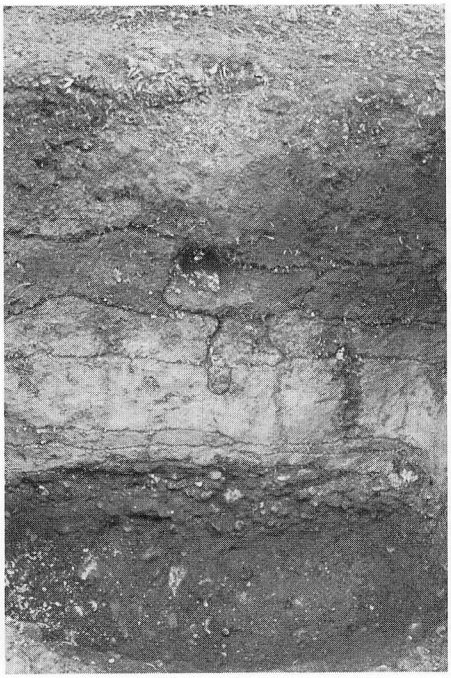
写真図版 2

a．粗掘作業状況東側（BⅡ区）

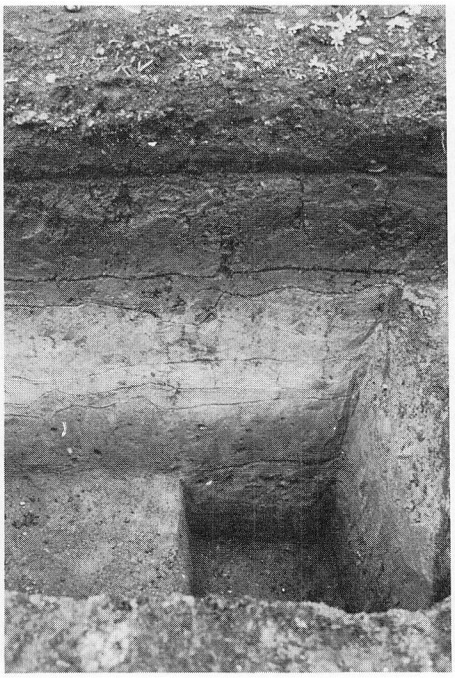


b．遺構検出作業状況東側（A・BⅡ区）

写真図版 3



a．東側No.2深掘（土層断面）

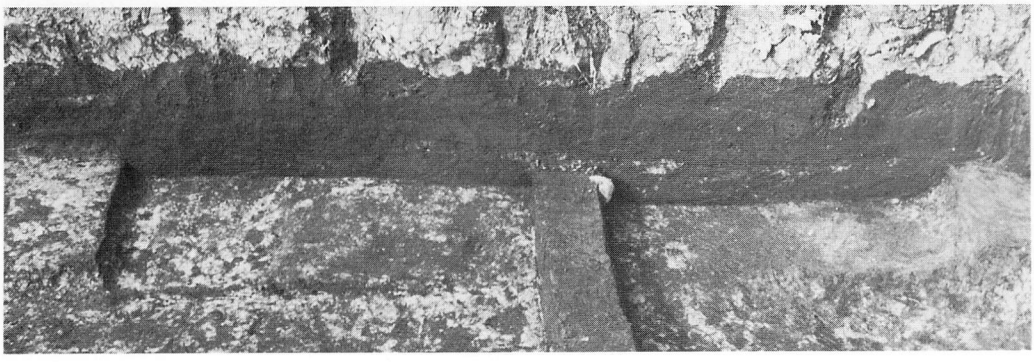


b．西側No.2深掘（土層断面）

c．西側No.1深掘（土層断面）

写真図版 4

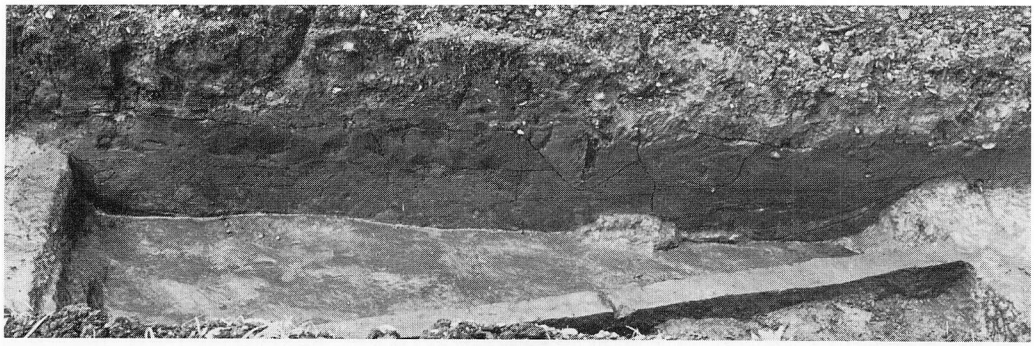
a．ＦⅠ-１住居跡（埋土断面No.1）



b．ＦⅠ-１住居跡（埋土断面No.2）

写真図版５

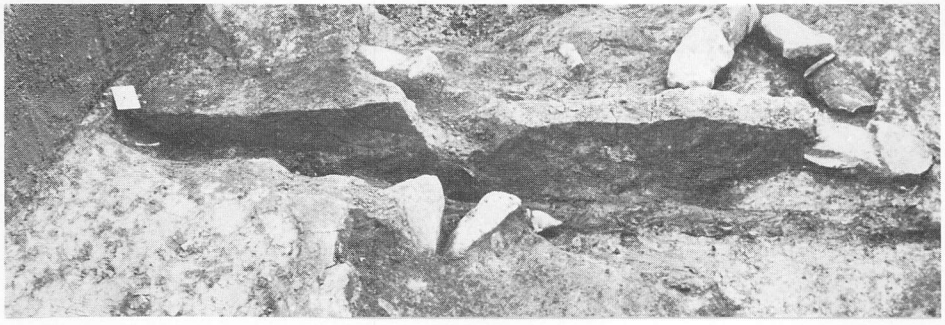
a．ＦⅠ-２住居跡（平面）



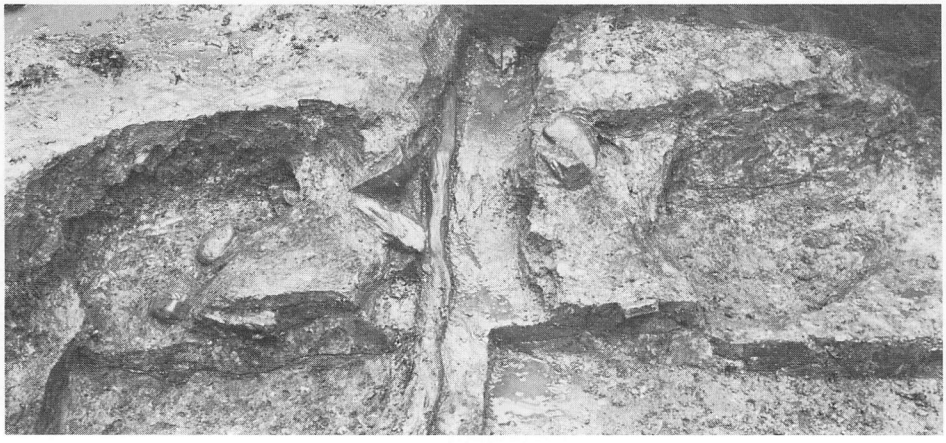
b．ＦⅠ-２住居跡（埋土断面No.２）

写真図版６

a．ＦⅠ-２住居跡カマド（平面）



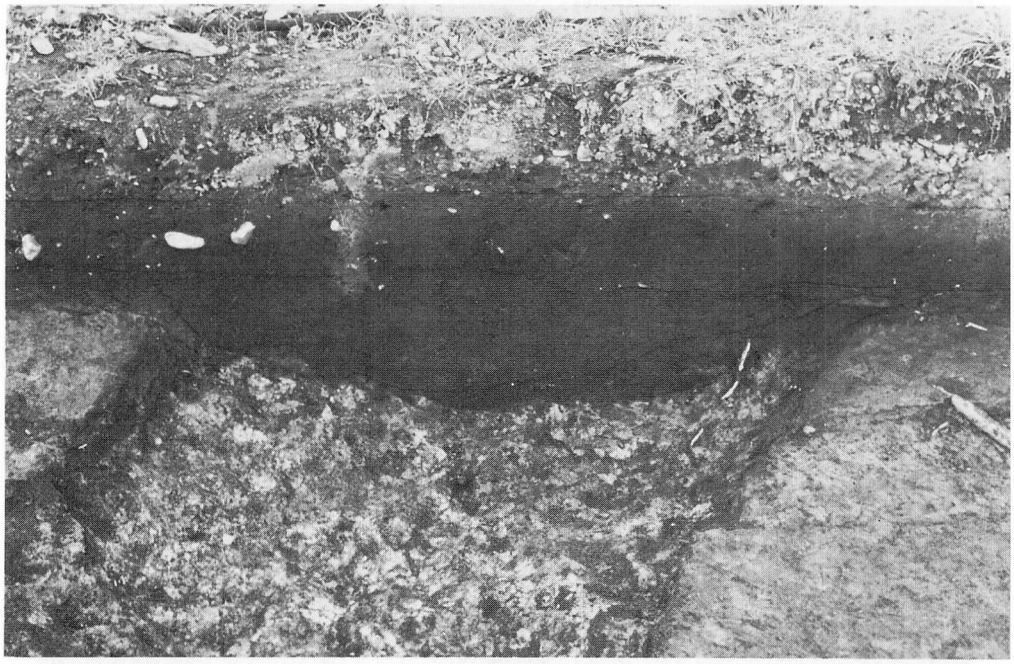
b．ＦⅠ-２住居跡カマド（埋土断面）



c．ＦⅠ-２住居跡カマド（右袖断面）

写真図版７

a．ＢⅠ-１号古墳（平面）



b．ＢⅠ-１号古墳周湟（埋土断面No.2）

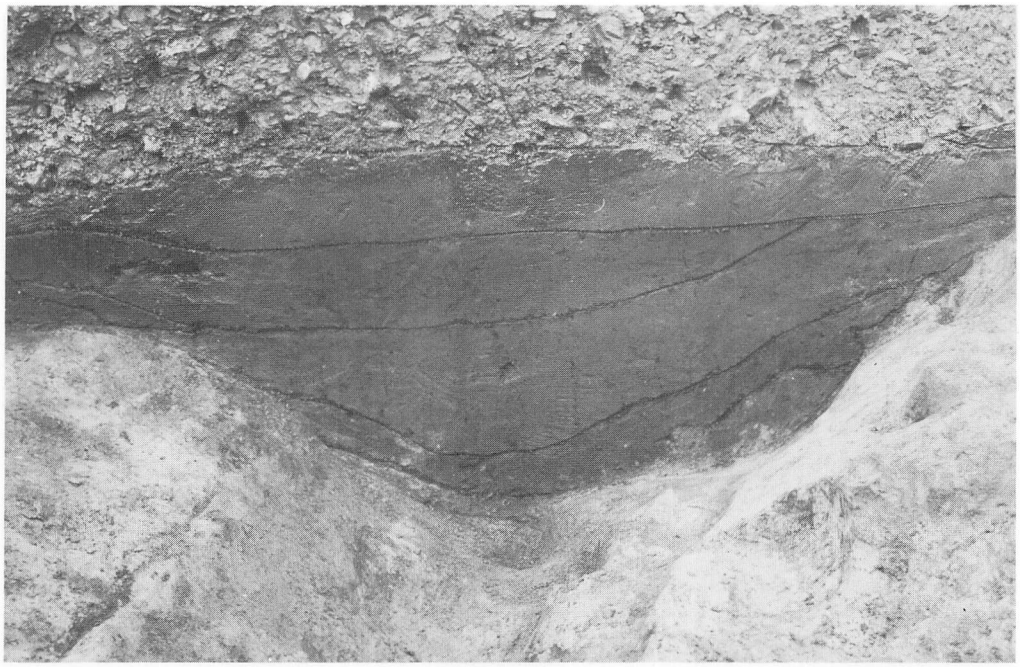
写真図版８

a．ＤⅠ-１号古墳（平面）

b．ＤⅠ-１号古墳周湟（埋土断面No.1）

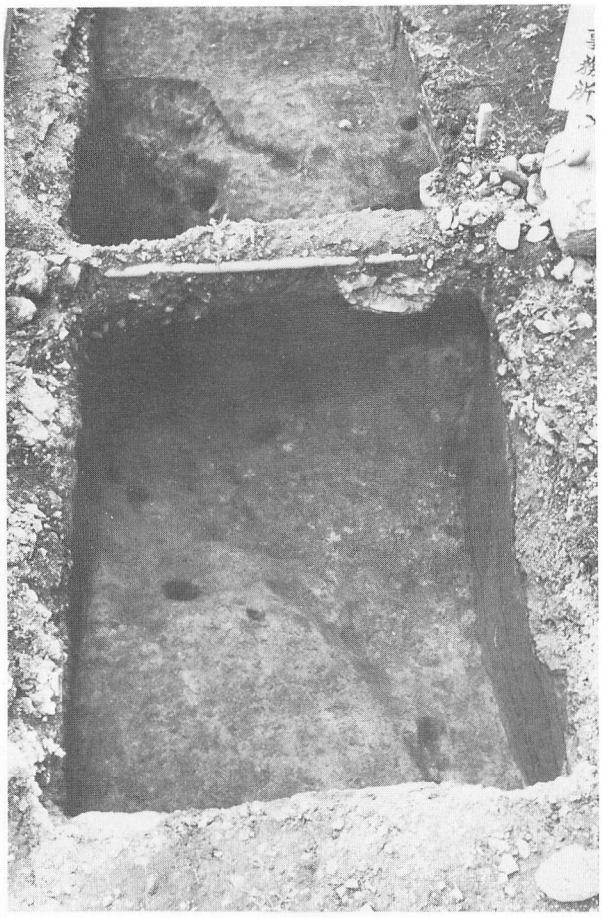
写真図版９

a．ＤⅠ-２号古墳（平面）

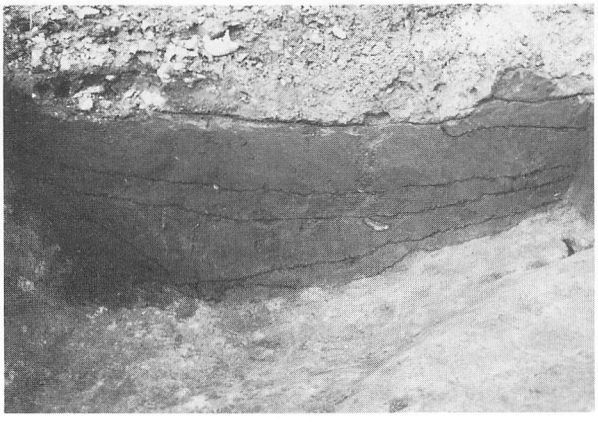


b．ＤⅠ-２号古墳周湟（埋土断面No.1）

写真図版10



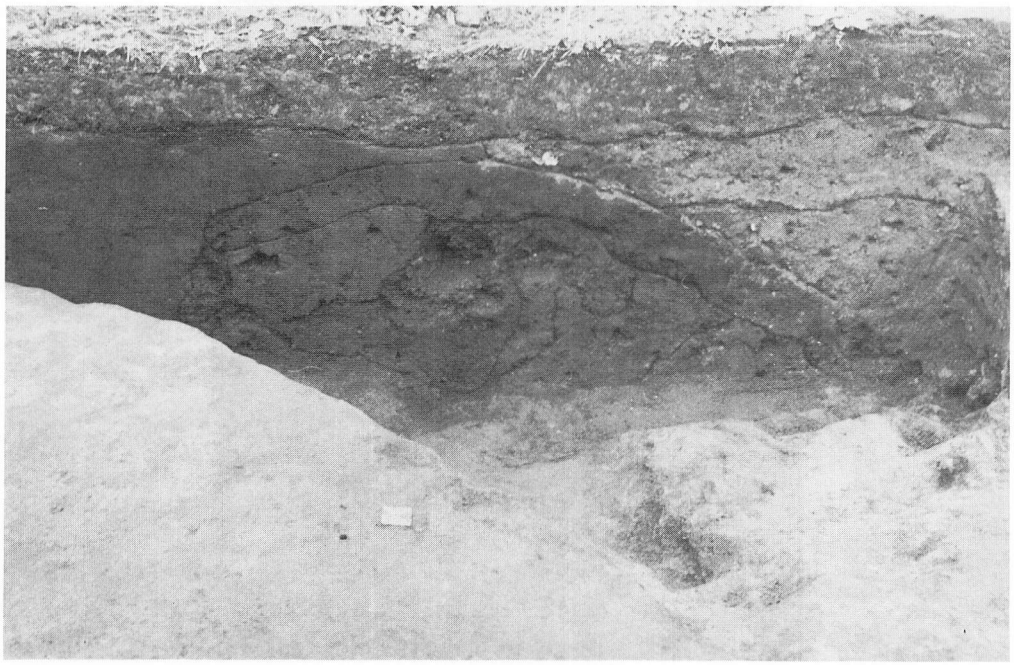
a．ＤⅠ-３号古墳（平面）



b．ＤⅠ-３号古墳周湟（埋土断面No.2）

写真図版11

a．ＥⅠ-１号古墳（平面）



b．ＥⅠ-１号古墳周湟（埋土断面No.2）

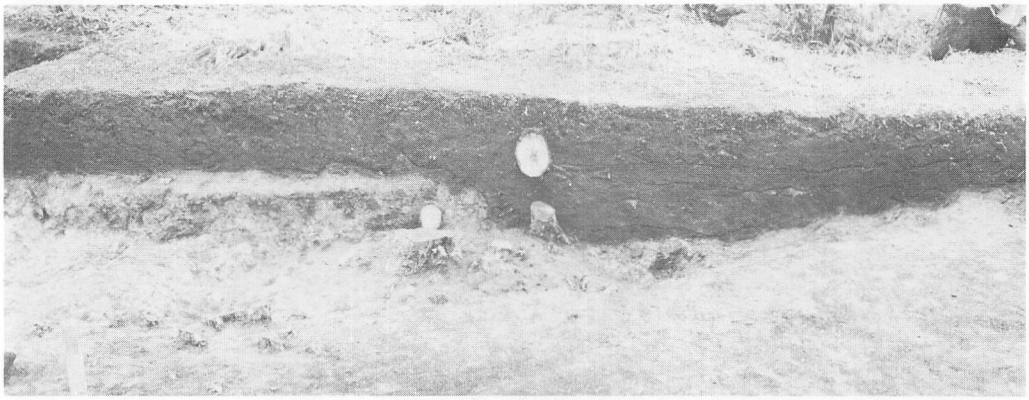
写真図版12

a．ＢⅡ-１号古墳（平面）

b．ＢⅡ-１号古墳周湟（埋土断面No.2）

写真図版13

a．ＢⅡ-２号古墳（平面）



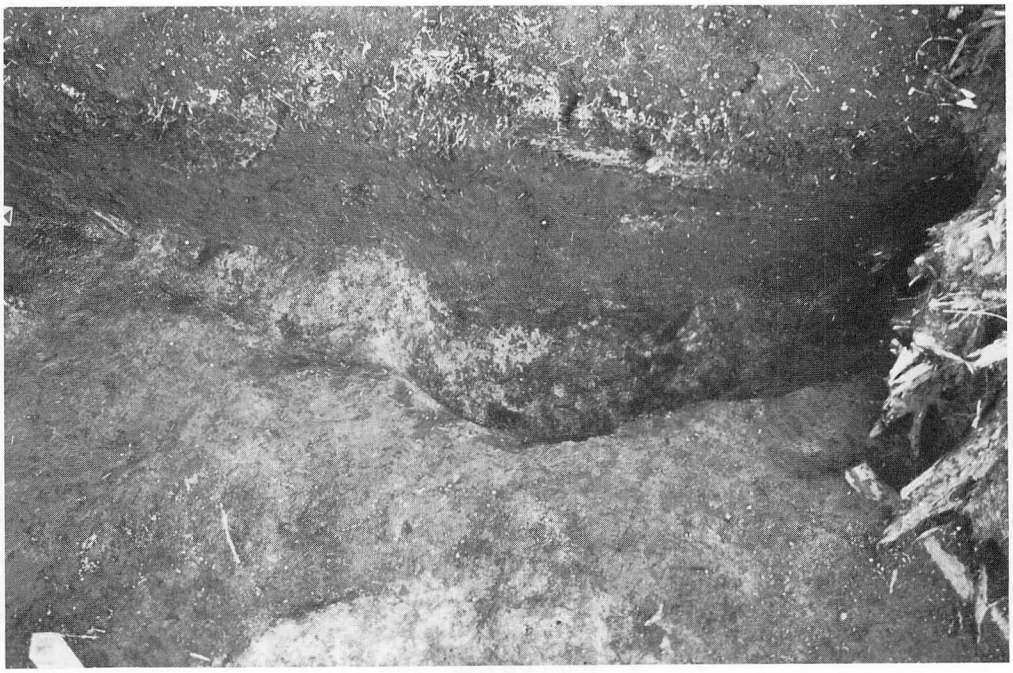
b．ＢⅡ-２号古墳周湟（埋土断面No.2）

写真図版14

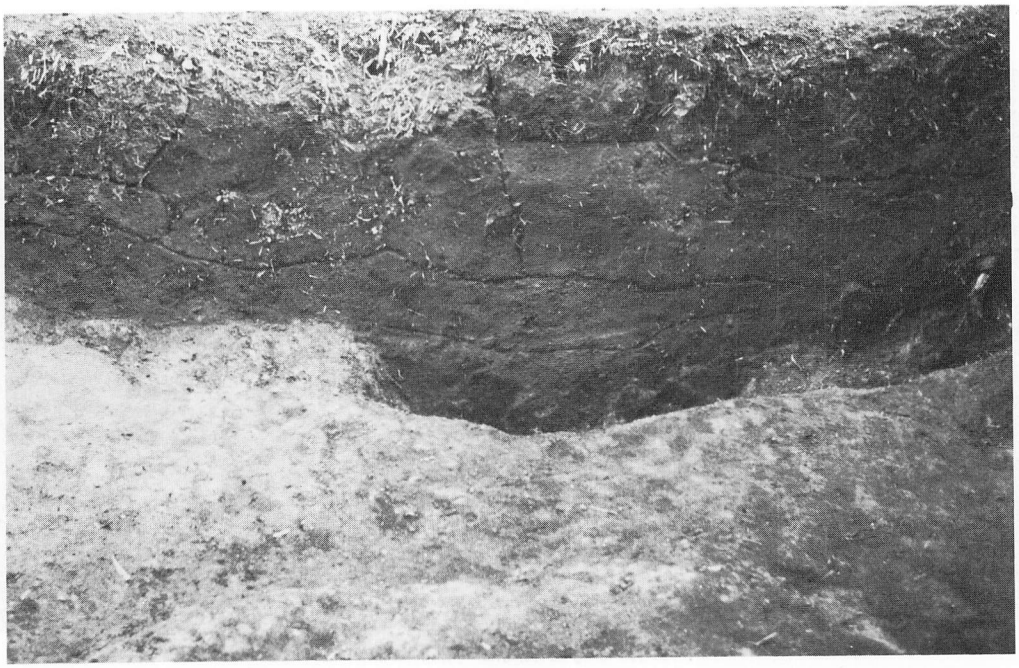
a．ＢⅡ-３号古墳（平面）

b．ＢⅡ-３号古墳周湟（埋土断面No.1）

写真図版15



a．ＢⅡ-４号古墳（平面）



b．ＢⅡ-４号古墳周湟（埋土断面）

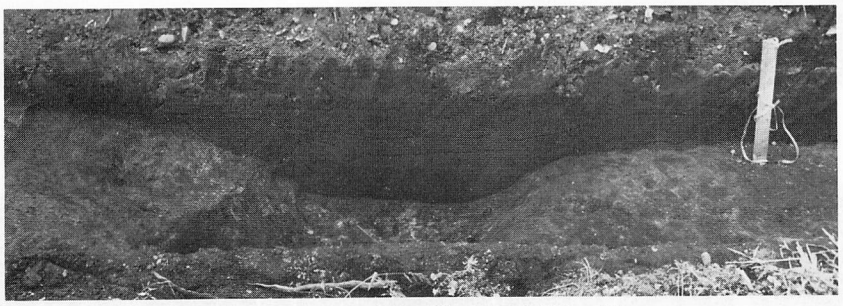
写真図版16

a．ＢⅡ-５号古墳（平面）

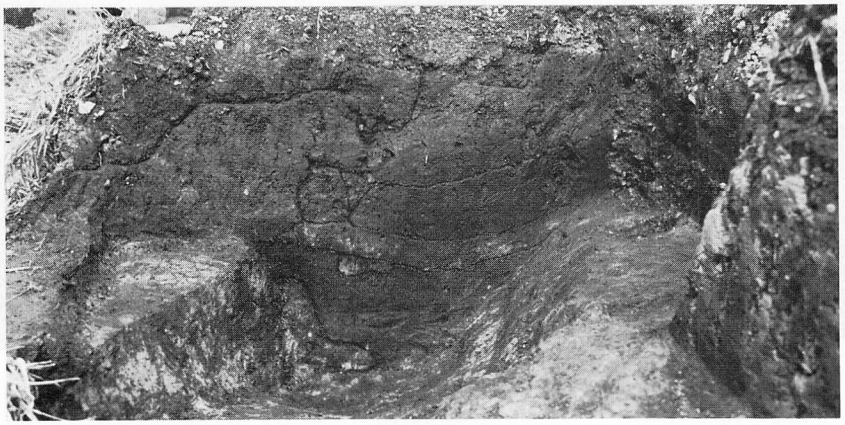
b．ＢⅡ-５号古墳周湟（埋土断面）

写真図版17

a．ＣⅡ-１号古墳（平面）



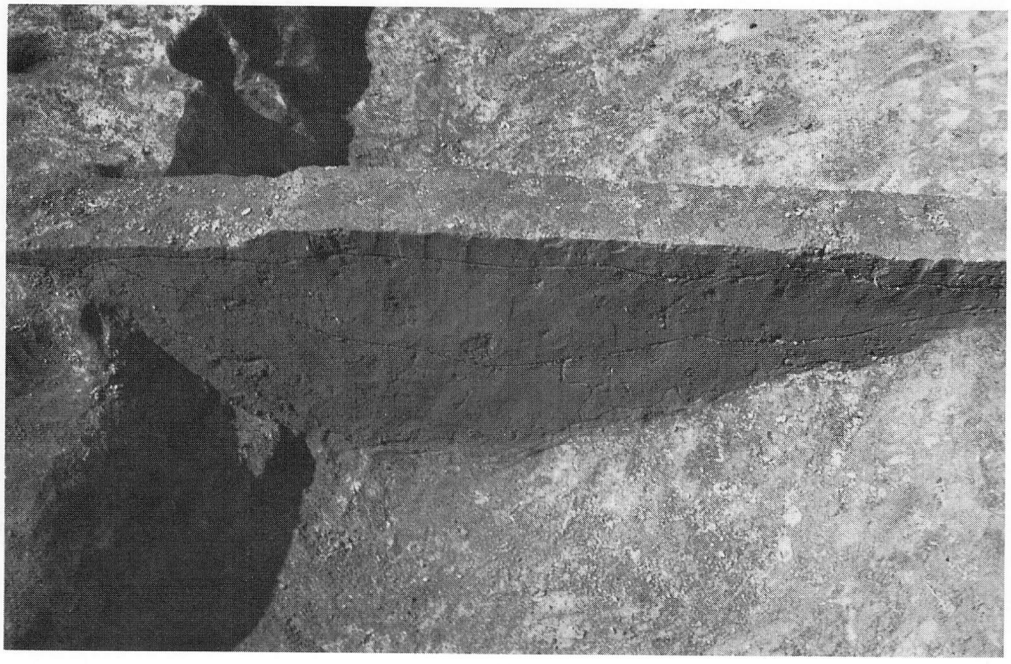
b．ＣⅡ-１号古墳周湟（埋土断面No.1）



c．ＣⅡ-１号古墳周湟（埋土断面No.3）

写真図版18

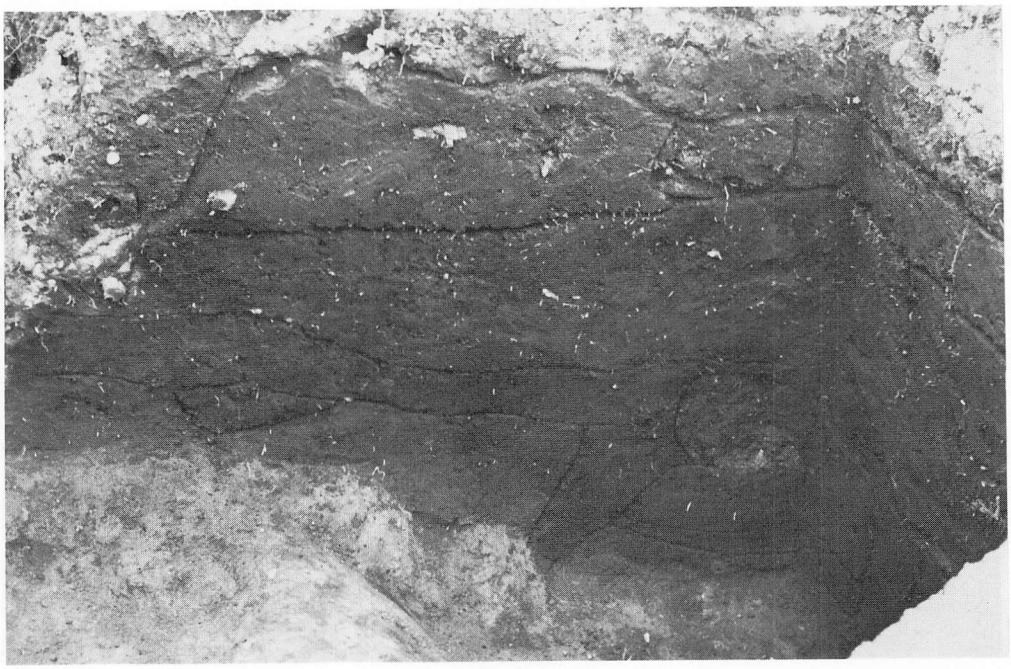
a．ＤⅡ-１号古墳（平面）



b．ＤⅡ-１号古墳周湟（埋土断面）

写真図版19

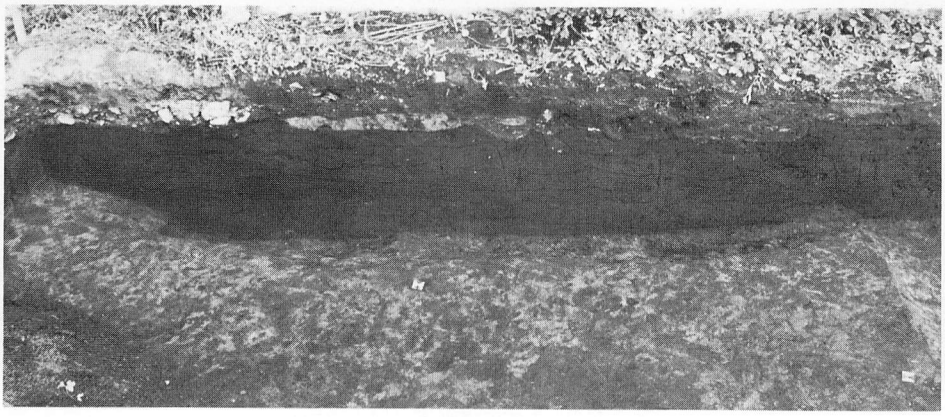
a．EⅡ-1号古墳（平面）



b．EⅡ-1号古墳周湟（埋土断面）

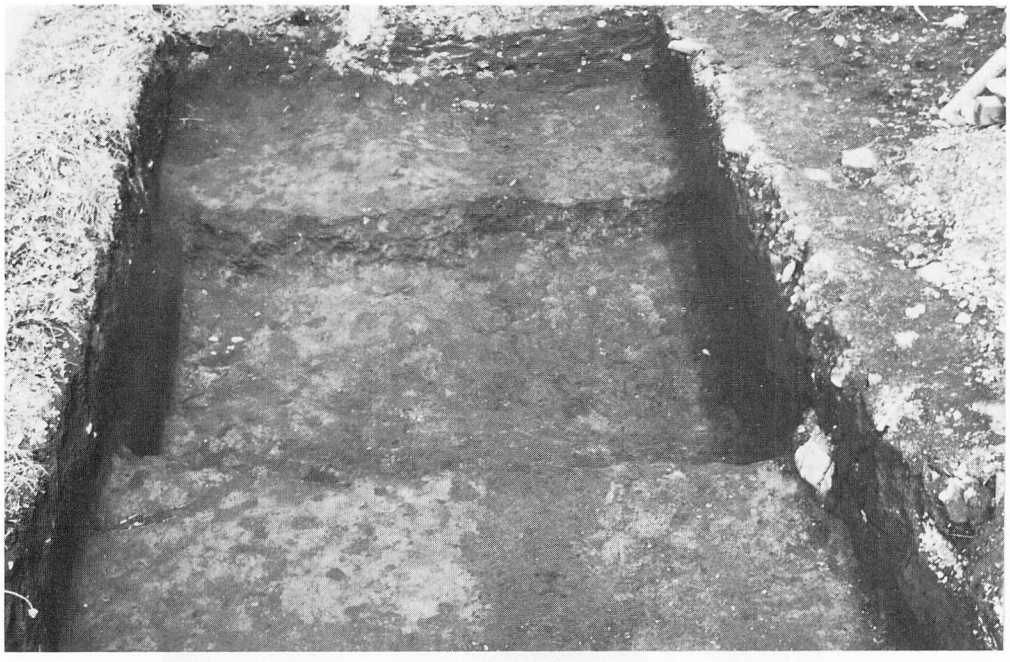
写真図版20

a．ＥⅡ-２号古墳（平面）

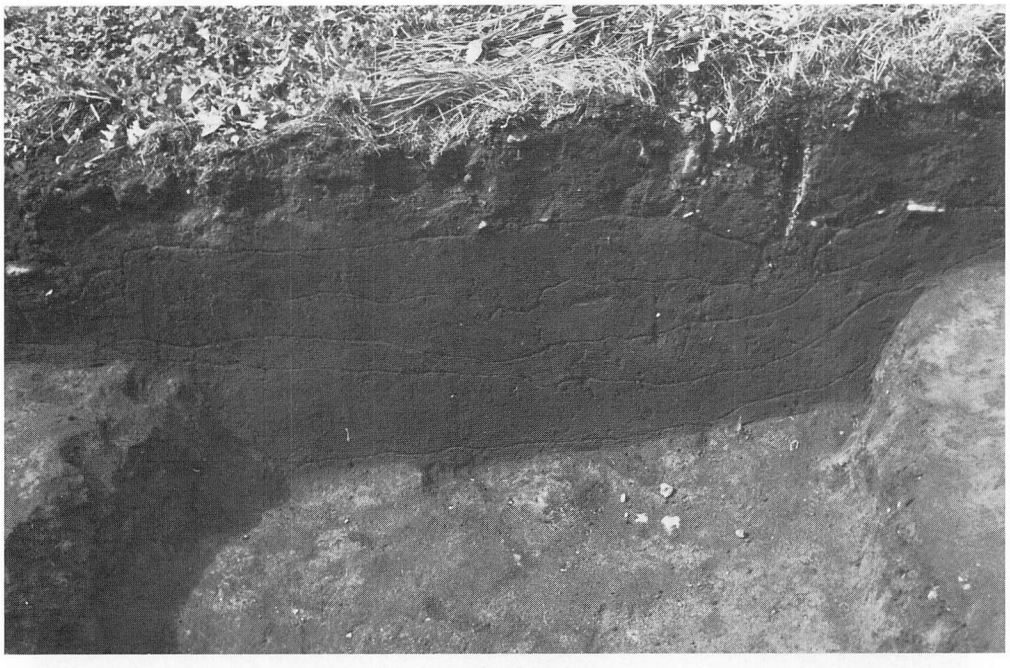


b．ＥⅡ-２号古墳周湟（埋土断面）

写真図版21



a．ＥⅡ-３号古墳（平面）



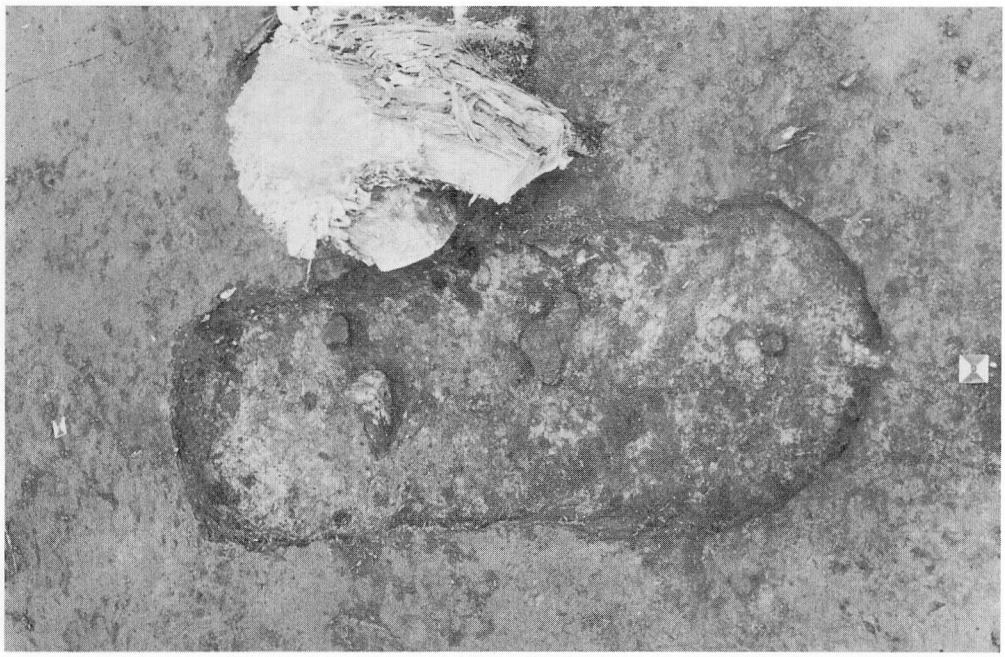
b．ＥⅡ-３号古墳周湟（埋土断面）

写真図版22

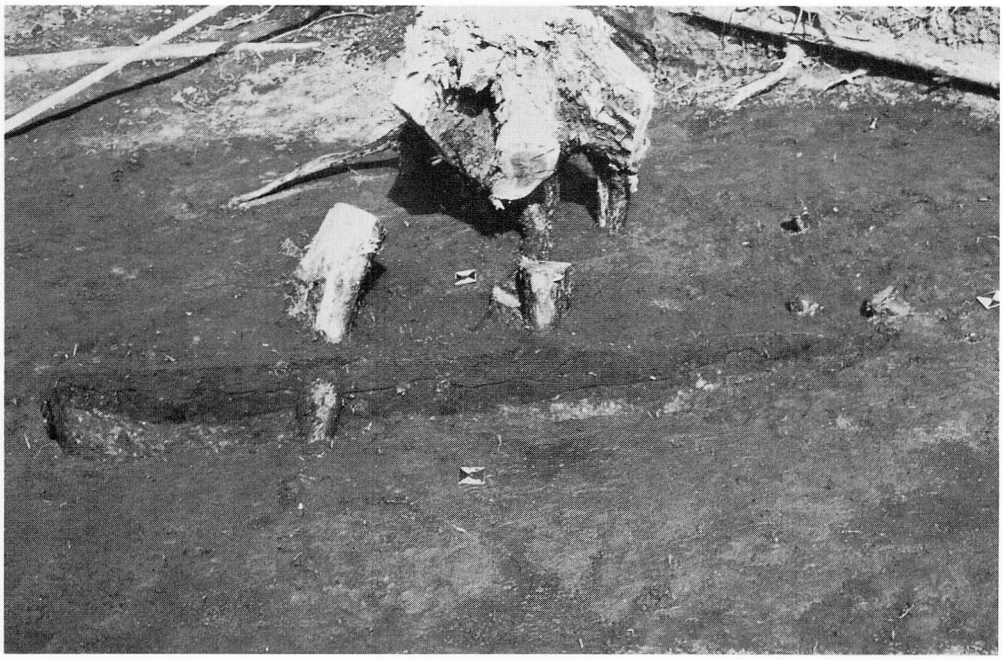
a．ＥⅠ-51土坑（平面）

b．ＥⅠ-51土坑（埋土断面No.3）

写真図版23

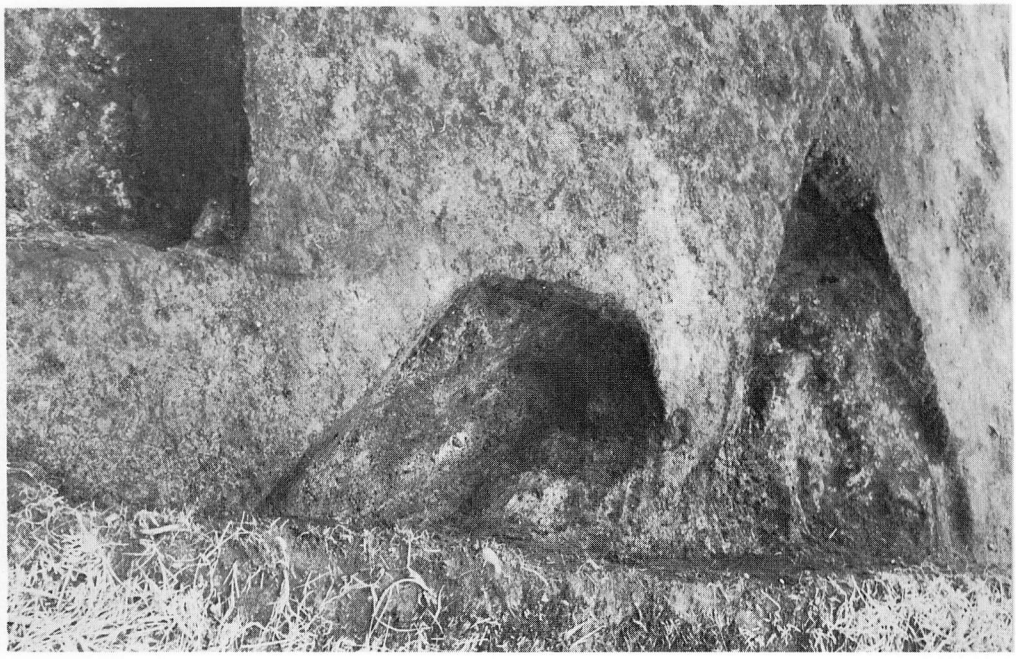


a．ＢⅡ-51土壙（平面）



b．ＢⅡ-51土壙（埋土断面No.1）

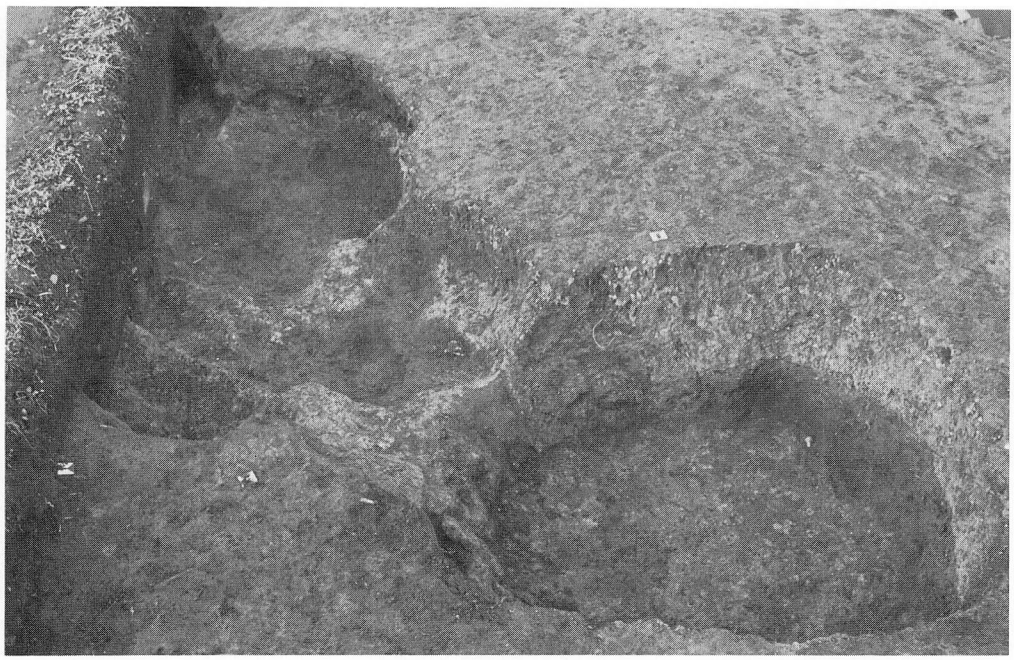
写真図版24



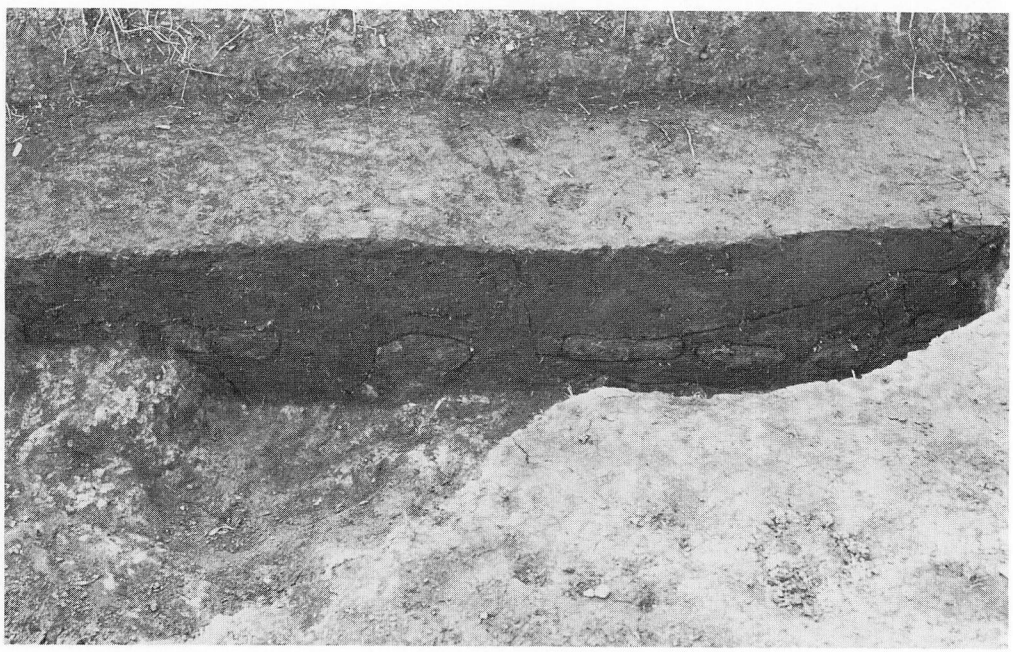
a．ＢⅡ-52土坑（平面）

b．ＢⅡ-52土坑（埋土断面）

写真図版25



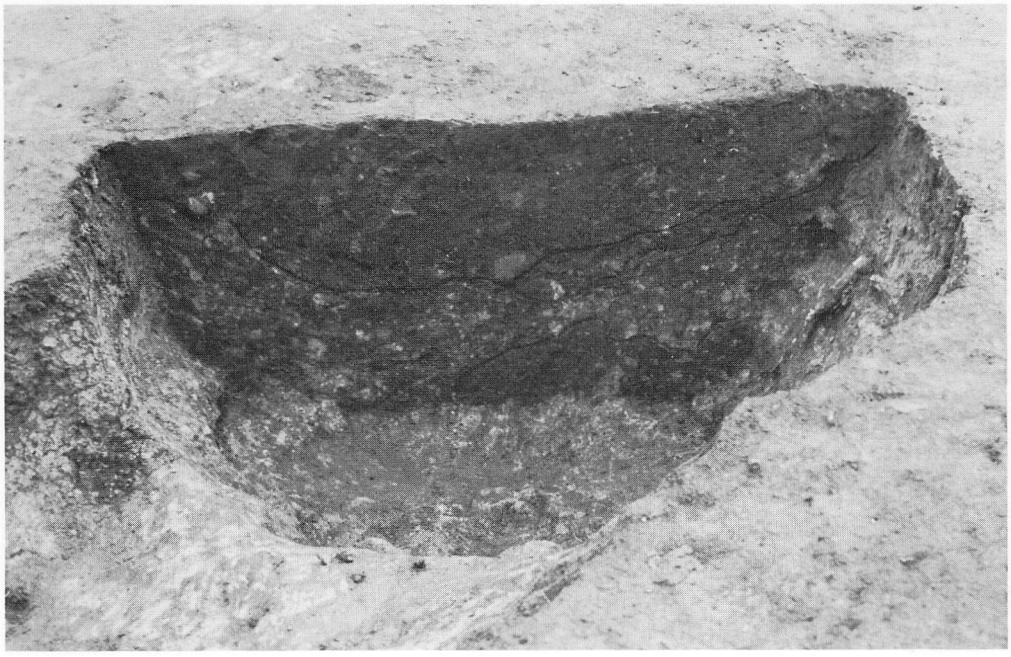
a．ＢⅡ-53土坑(左)　ＢⅡ-54土坑(右)(平面)



b．ＢⅡ-53土坑(右)　ＢⅡ-104溝跡(左)(埋土断面)

写真図版26

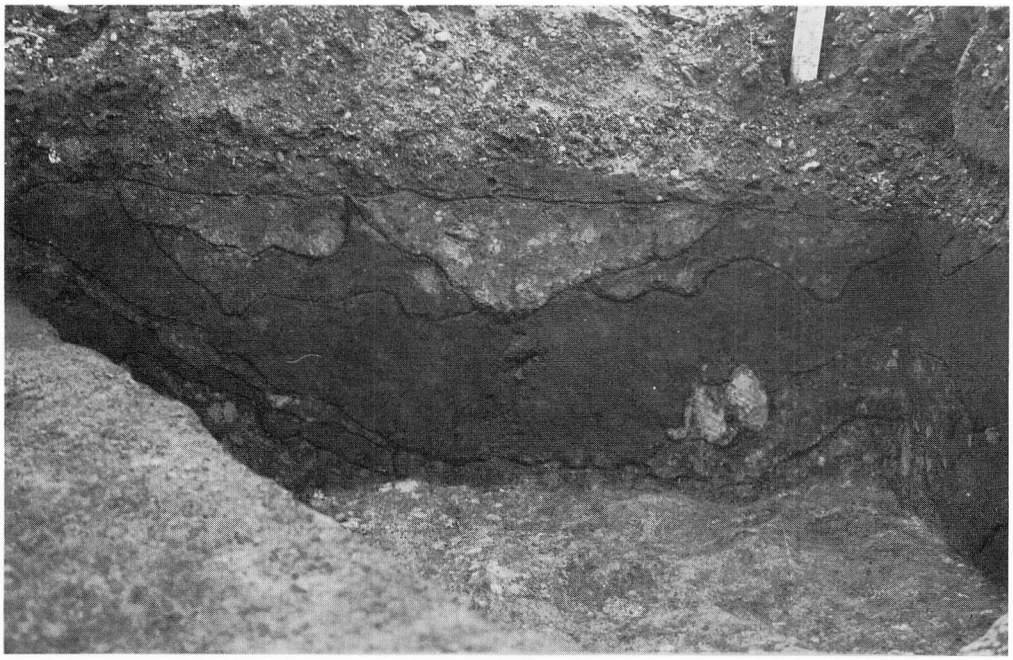
a．ＢⅡ-54土坑（平面）



b．ＢⅡ-54土坑（埋土断面）

写真図版27

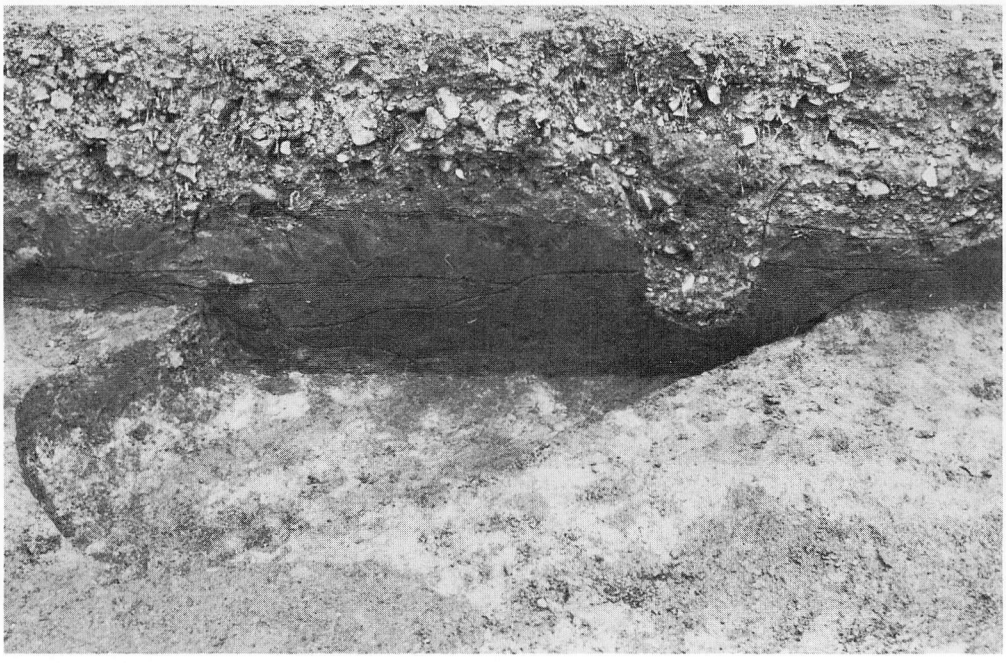
a．ＤⅡ-51土坑（平面）



b．ＤⅡ-51土坑（埋土断面No.1）

写真図版28

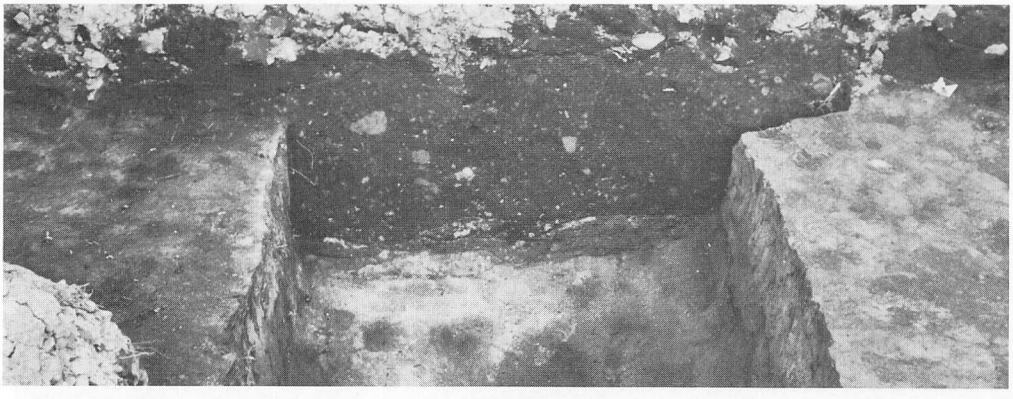
a．ＥⅡ-51土壙（平面）



b．ＥⅡ-51土壙（埋土断面）

写真図版29

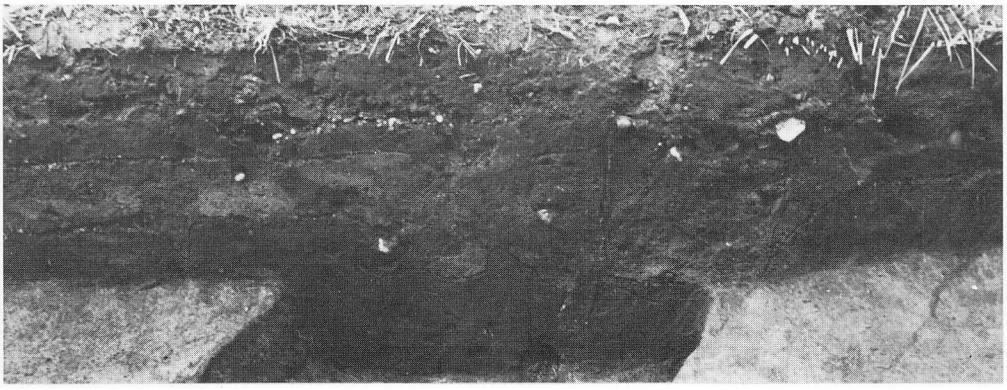
a．ＥⅡ-52・53土坑（平面）



b．ＥⅡ-54土坑（埋土断面）

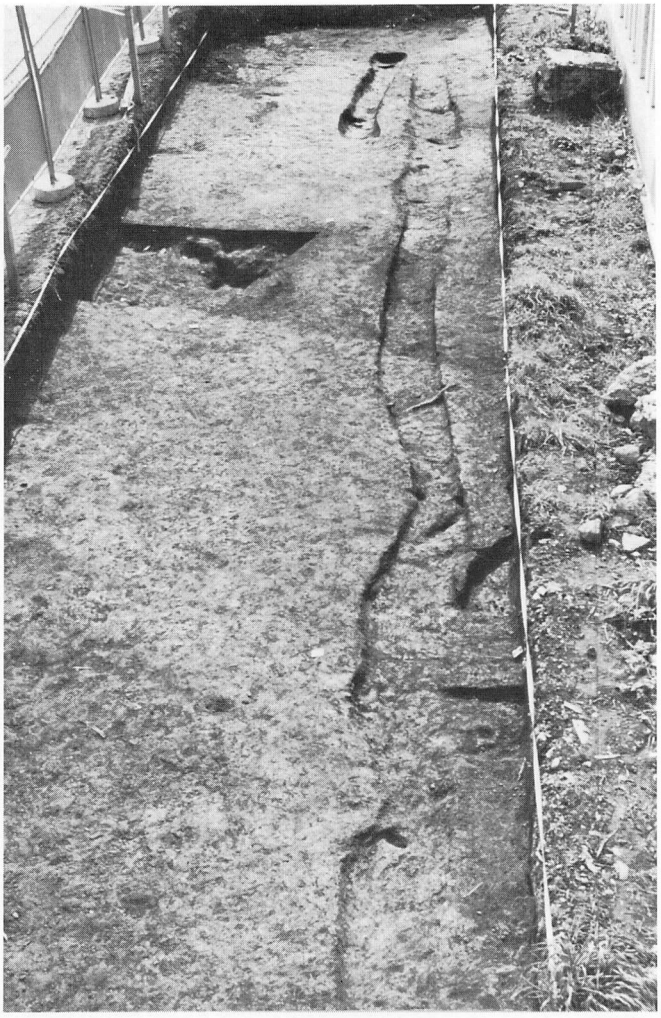
写真図版30

a．ＥⅡ-53土壙（平面）

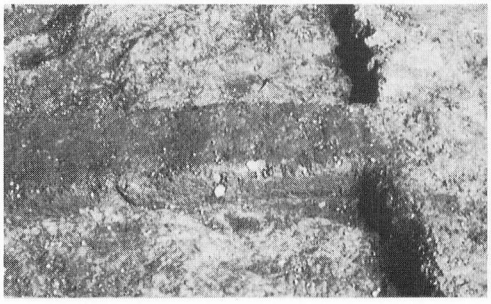


b．ＥⅡ-53土壙（埋土断面）

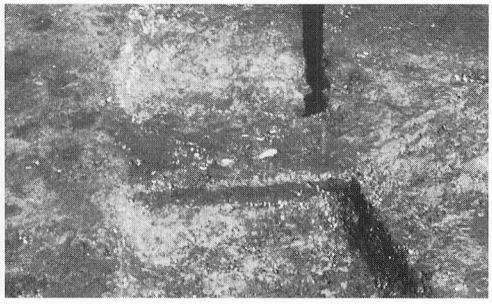
写真図版31



a．ＢⅠ-101溝跡（平面）

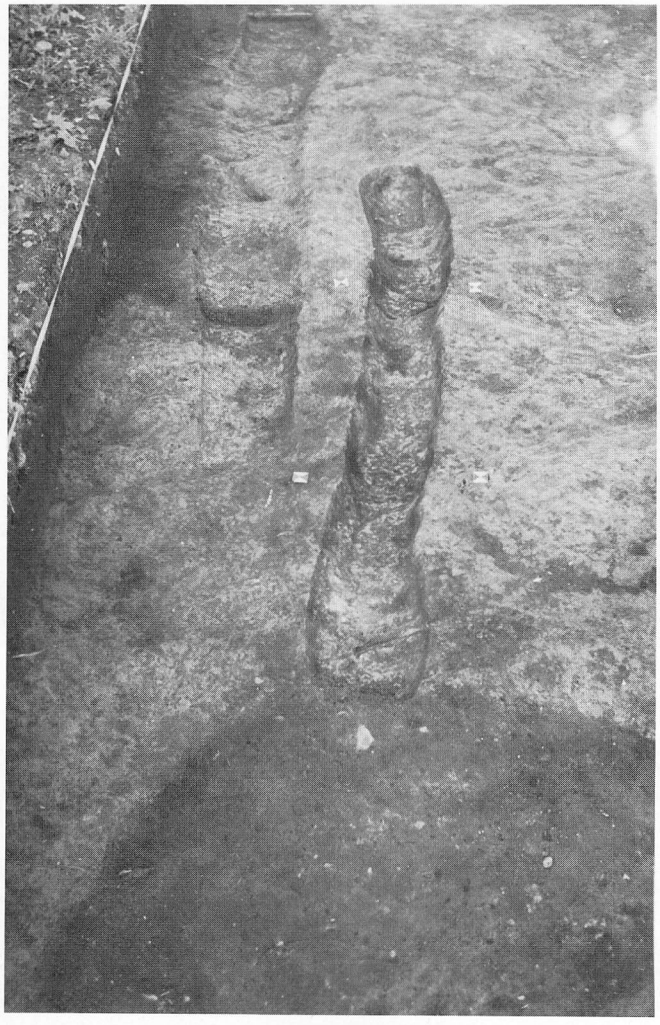


b．ＢⅠ-101溝跡（埋土断面No.5）

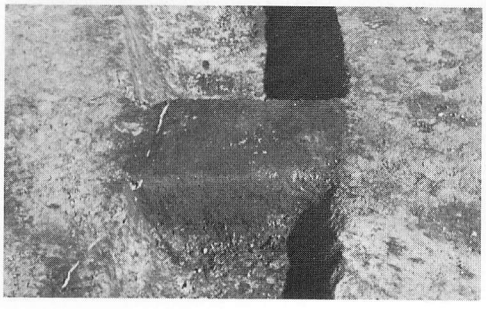


c．ＢⅠ-101溝跡（埋土断面No.6）

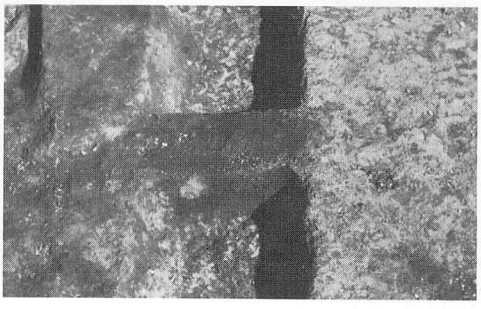
写真図版32



a．ＢⅠ-102溝跡（平面）



b．ＢⅠ-102溝跡（埋土断面No.1）



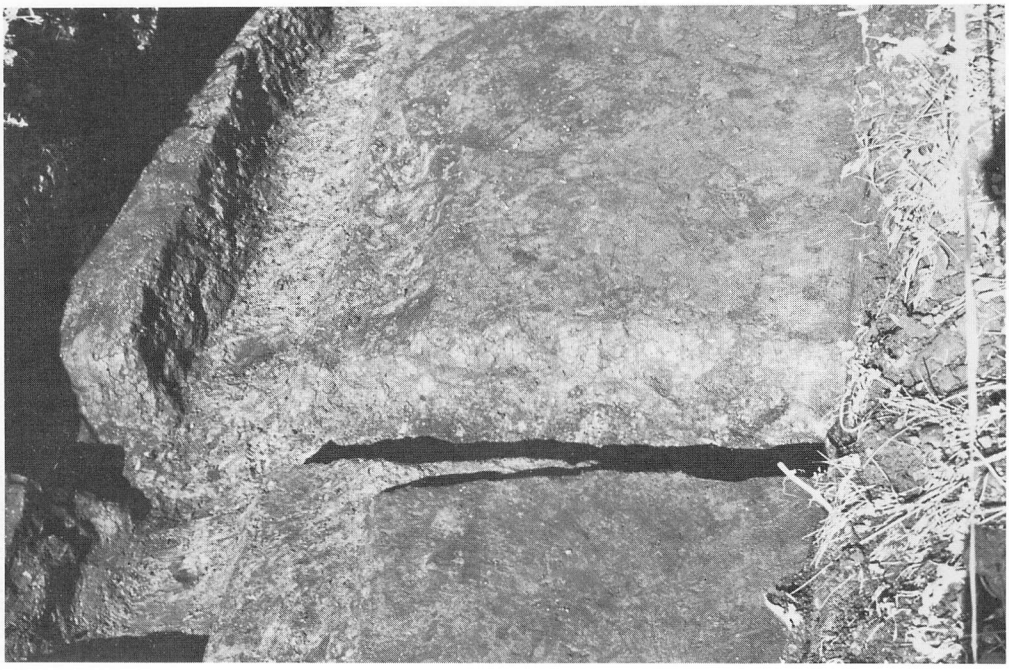
c．ＢⅠ-102溝跡（埋土断面No.2）

写真図版33

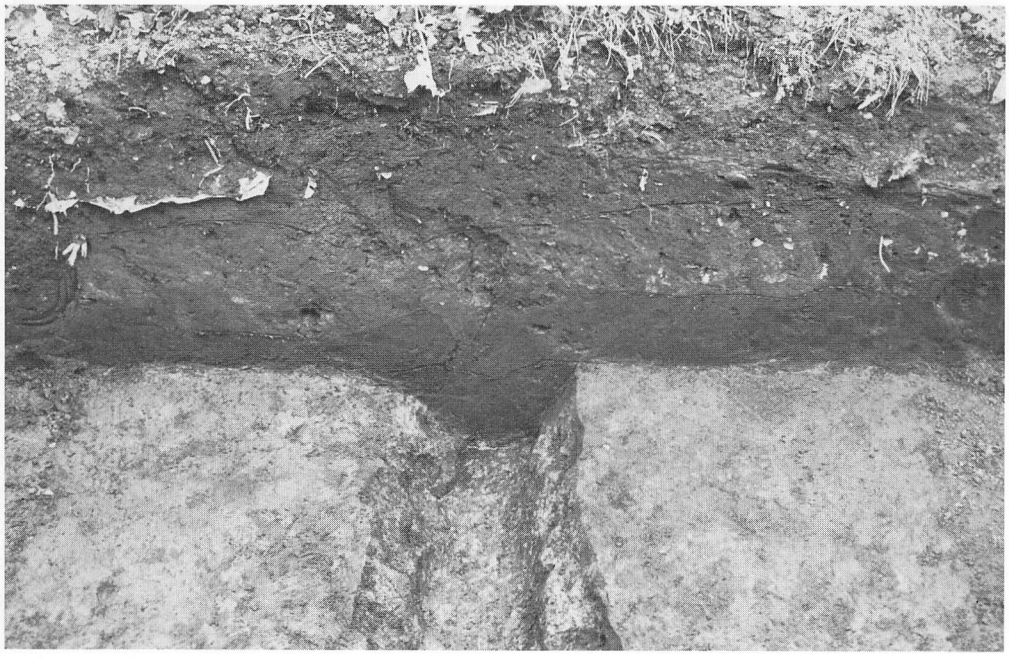
a．ＤⅠ-101溝跡（平面）

b．ＤⅠ-101溝跡（埋土断面）

写真図版34

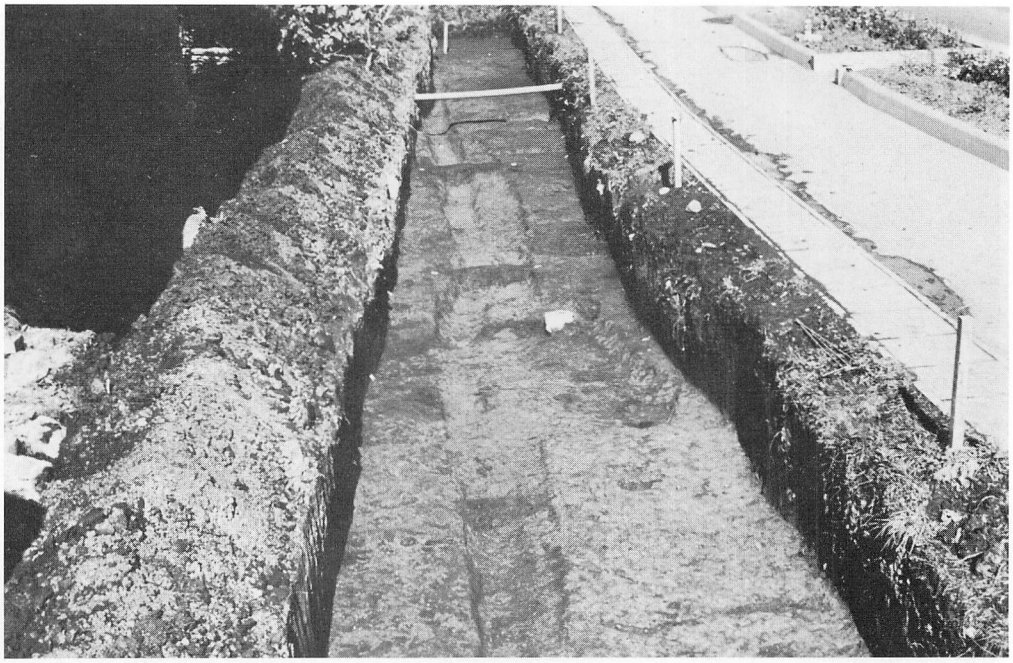


a．ＦⅠ-101溝跡（平面）

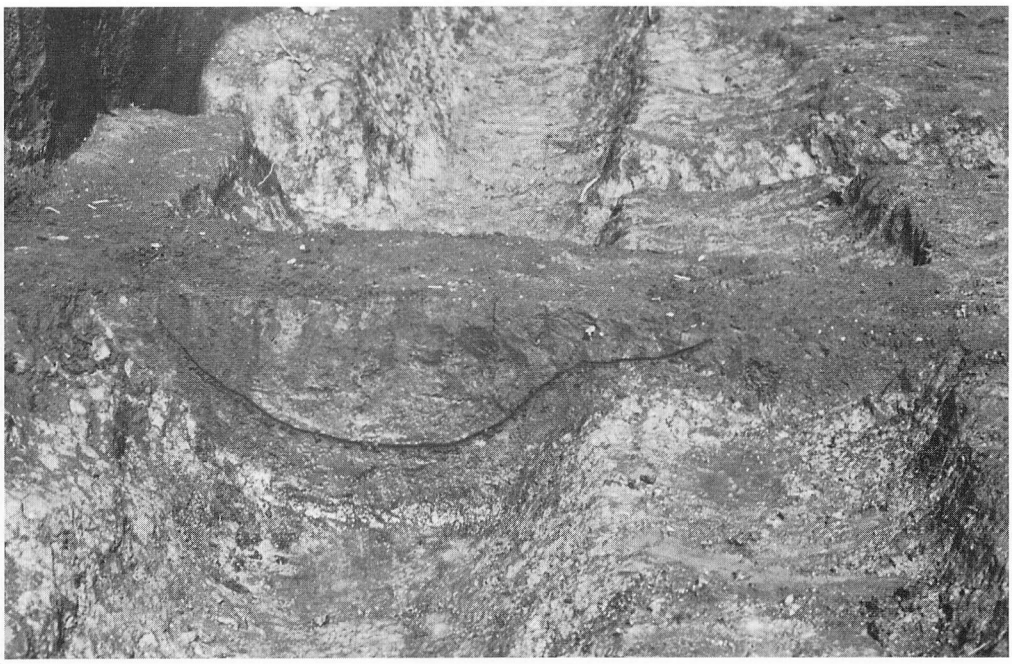


b．ＦⅠ-101溝跡（埋土断面）

写真図版35



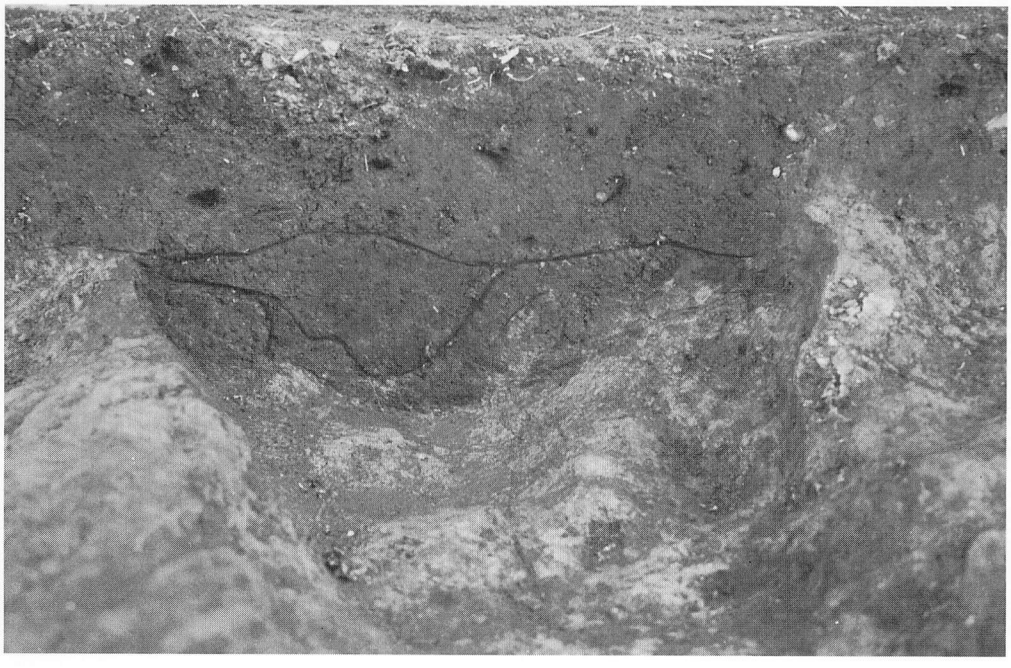
a．ＦⅠ-102溝跡（平面）



b．ＦⅠ-102溝跡（埋土断面No.4）

写真図版36

a．ＡⅡ-101溝跡（平面）



b．ＡⅡ-101溝跡（埋土断面No.1）

a．ＡⅡ-102溝跡（平面）

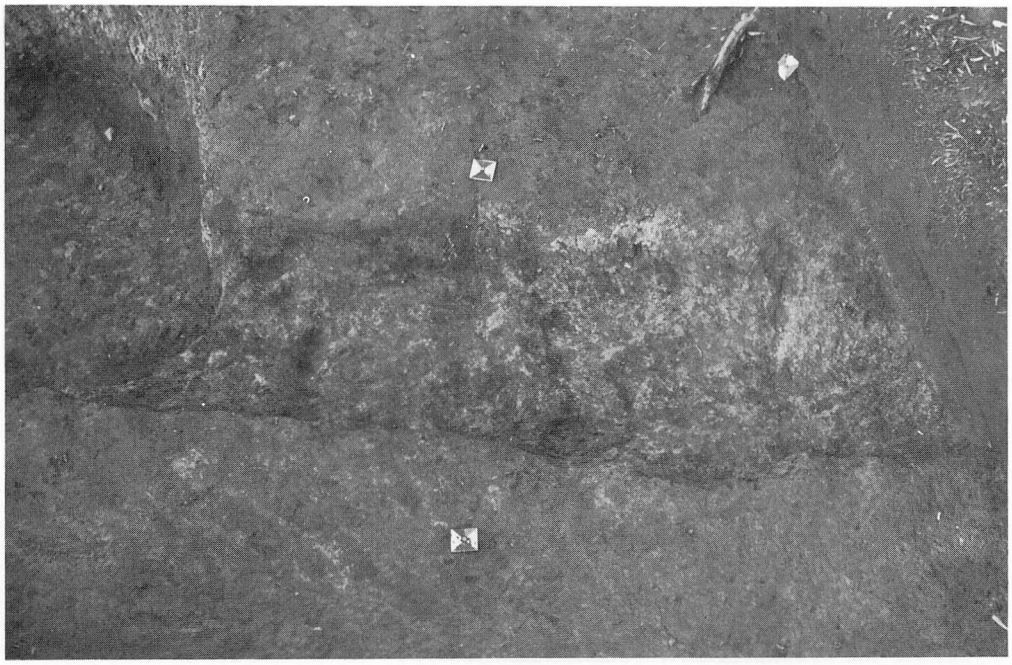
b．ＡⅡ-102溝跡（埋土断面）

写真図版38

a．ＢⅡ-101溝跡（平面）

b．ＢⅡ-101溝跡（埋土断面No.2）

写真図版39



a．ＢⅡ-102溝跡（平面）

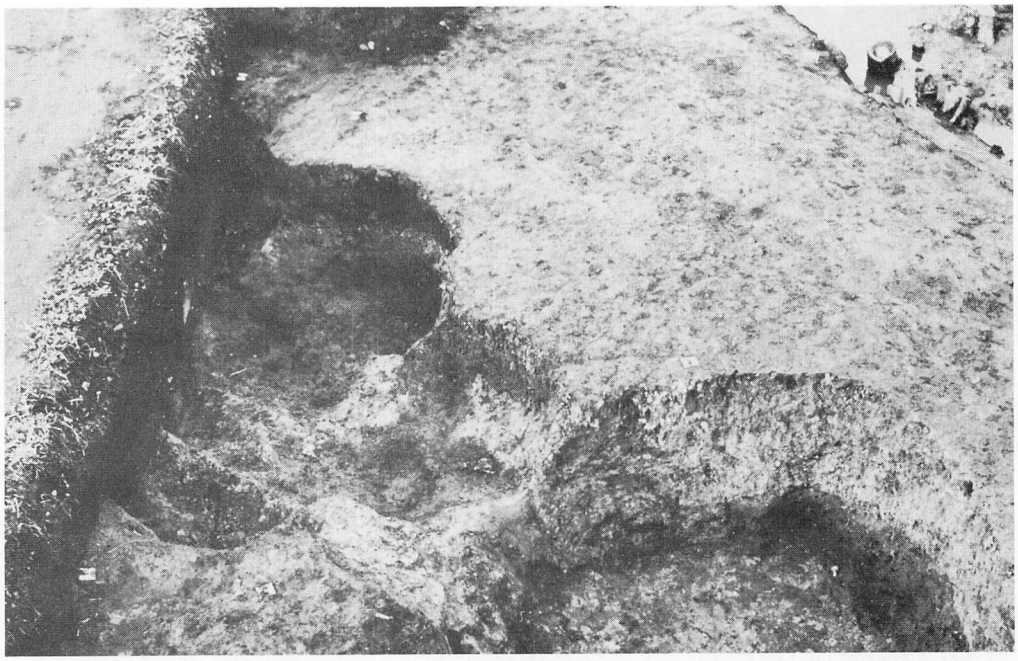
b．ＢⅡ-102溝跡（埋土断面No.2）

写真図版40

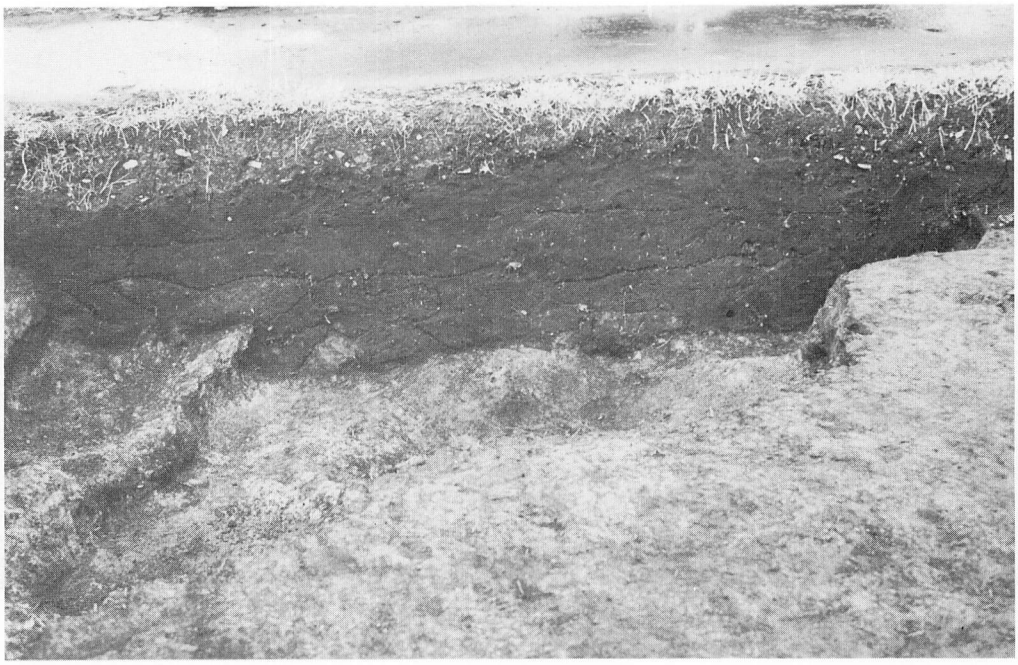
a．ＢⅡ-103溝跡（平面）

b．ＢⅡ-103溝跡（埋土断面）

写真図版41



a．ＢⅡ-104溝跡．ＢⅡ-53土坑（平面）



b．ＢⅡ-104溝跡（埋土断面）

写真図版42

a．ＣⅡ-101溝跡（平面）

b．ＣⅡ-101溝跡（埋土断面No.1）

写真図版43

c．CⅡ-101溝跡（埋土断面No.2）

d．CⅡ-102溝跡（平面）

写真図版44

d．ＤⅡ-101溝跡（平面）

b．ＤⅡ-101溝跡（埋土断面No.2）

写真図版45

d．ＥⅡ-101・102溝跡（平面）

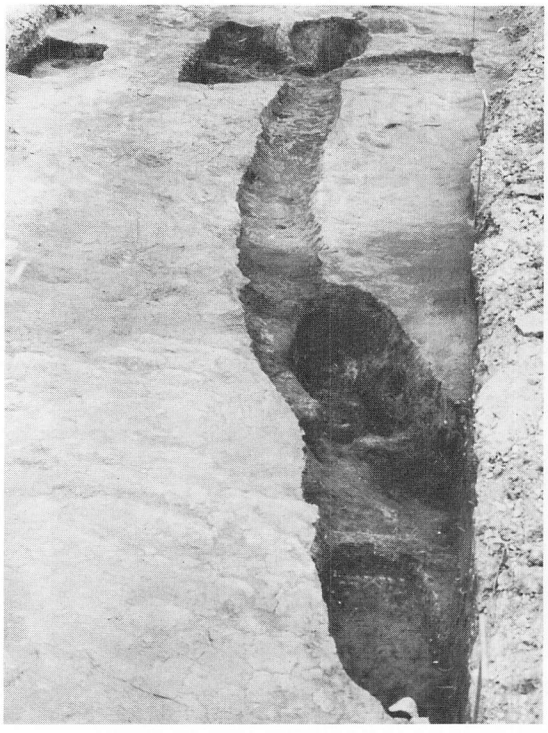
b．ＥⅡ-101・102溝跡（埋土断面No.2）

写真図版46

d．ＥⅡ-103溝跡（平面）

b．ＥⅡ-103溝跡（埋土断面No.2）

写真図版47



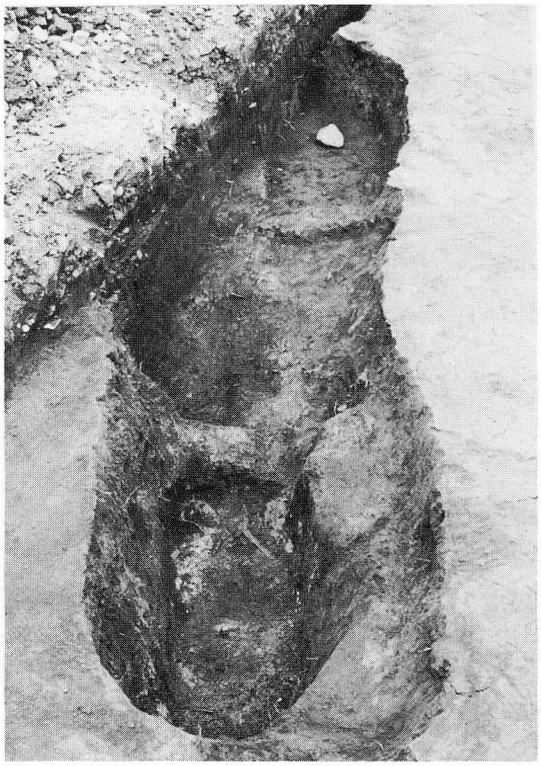
a．ＢⅡ-106溝跡（平面）

b．ＢⅡ-105溝跡（平面）

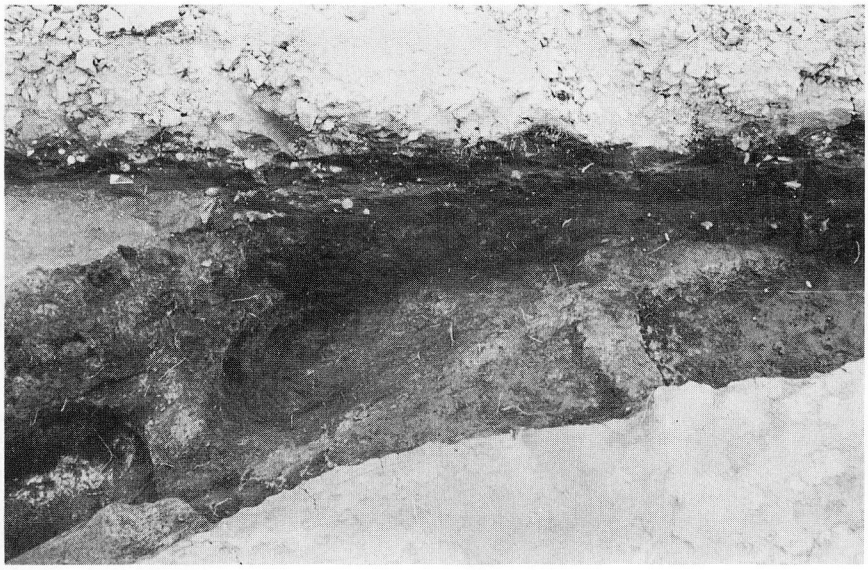
c．ＢⅡ-55～59土壙・土坑，ＢⅡ-105溝跡（平面）

写真図版48

a．ＢⅡ-55・56土壙（平面）

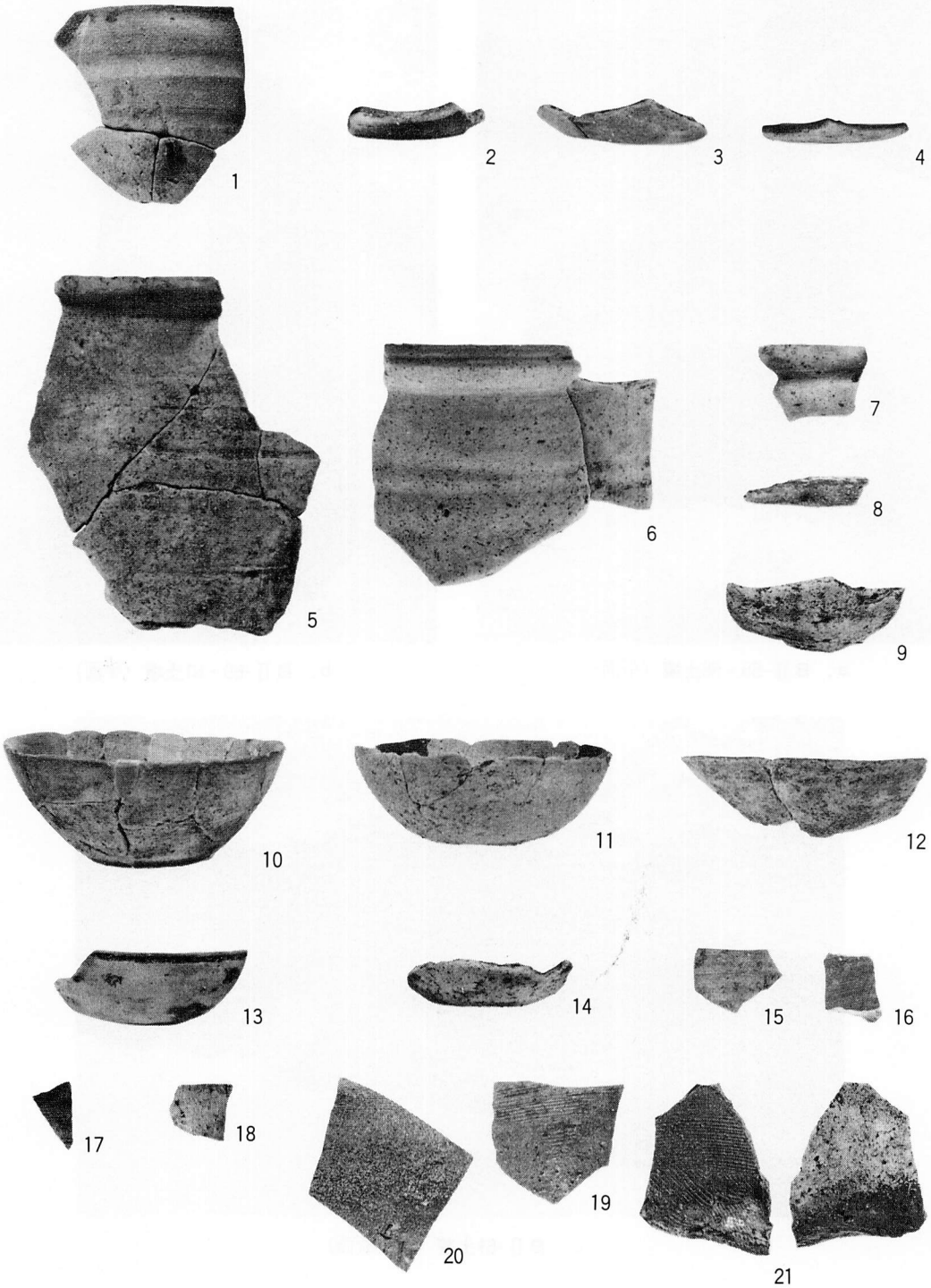


b．ＢⅡ-60・61土壙（平面）



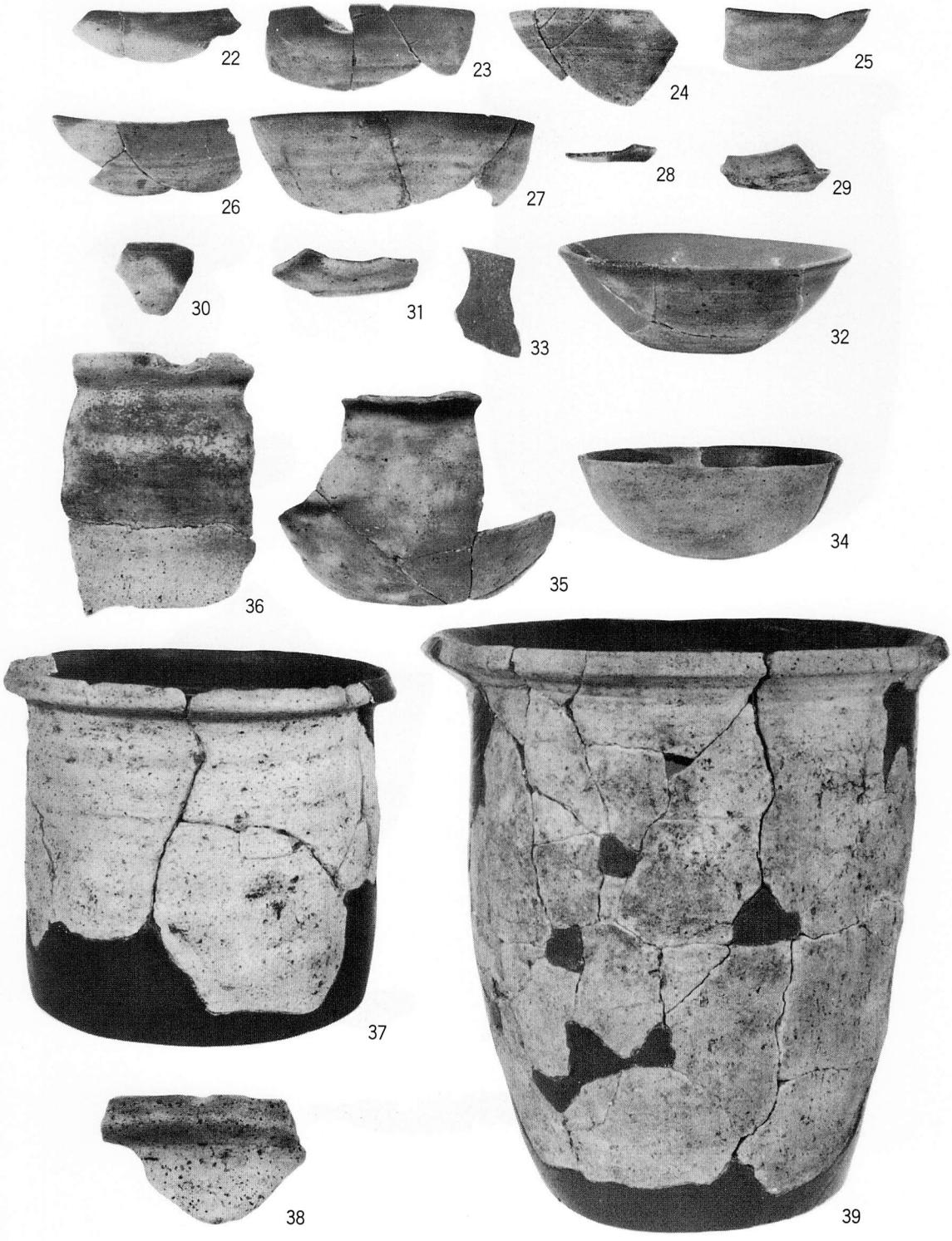
c．ＢⅡ-61土壙（埋土断面）

写真図版49



縮尺1/3

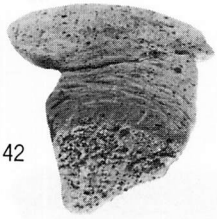
写真図版50　Ｆ Ⅰ-1住居跡出土遺物



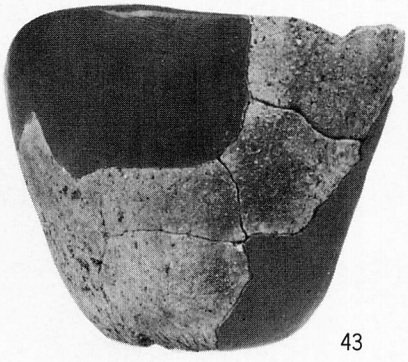
縮尺1/3

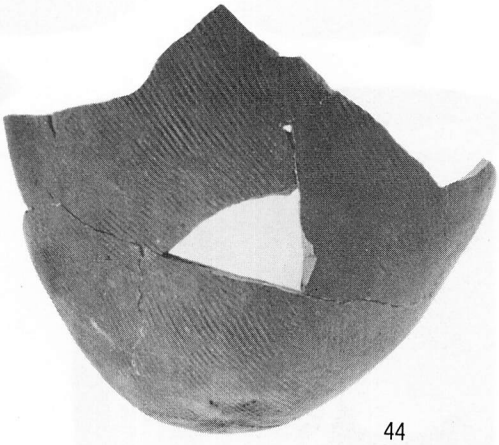
写真図版51　Ｆ Ⅰ－２住居跡出土遺物(1)

40


42

41


43


44

44のみ
縮尺1/6

45

46

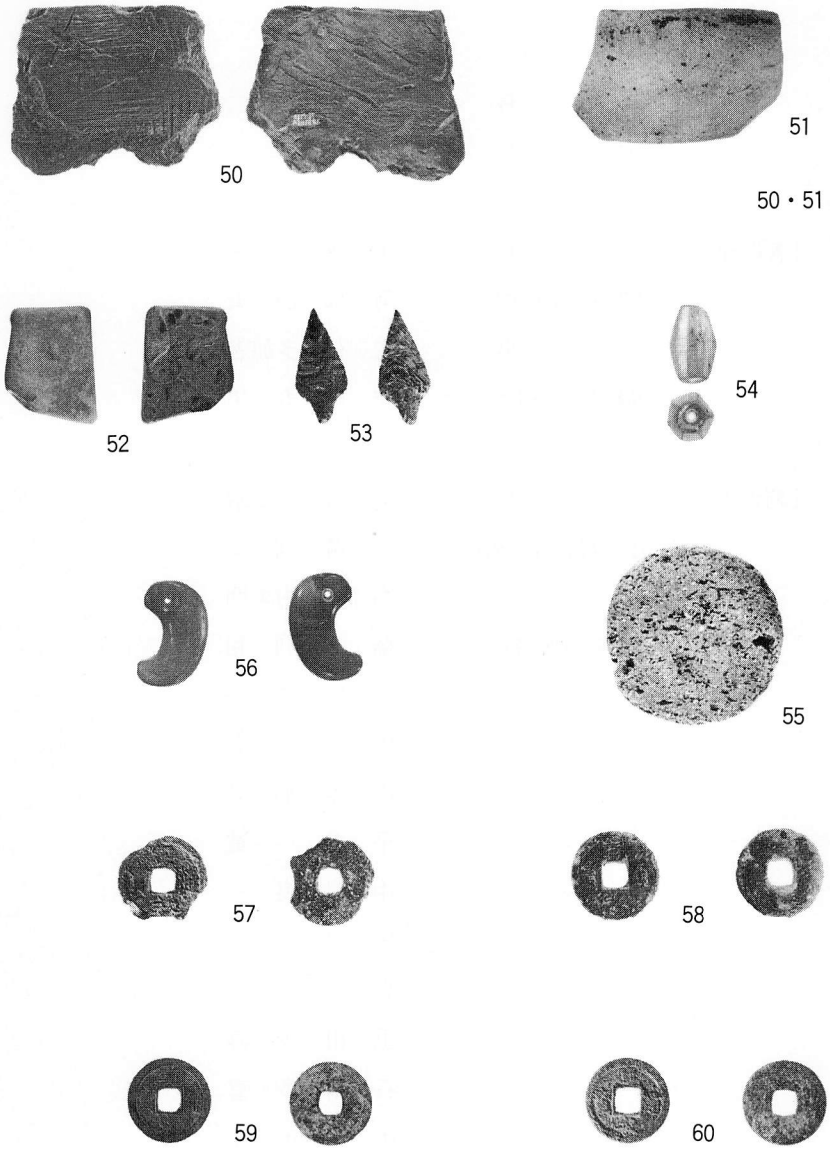
47

48

49

縮尺1/3

写真図版52　ＦＩ－２住居跡出土遺物(2)



写真図版53　ＥⅡ-51土壙・遺構外出土遺物・古銭

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

	所　　長	及川昌二
	副所長	宮　英一
〔管理課〕	課　　長	千葉久夫
	課長補佐	阿部詔夫
	主　　事	立花多加志
	運転技士兼技能士	佐藤春男
〔調査課〕	課　　長	昆野　靖
	主任文化財専門調査員	工藤利幸
	〃	高橋与右エ門
	文化財専門調査員	菊池利和
	〃	渡辺洋一
	〃	田鎖寿夫
	〃	佐々木嘉直
	〃	平井　進
	〃	中村良一
	〃	田村壮一
	〃	光井文行
	〃	玉川英喜
	〃	石川長喜
	〃	中川重紀
	〃	高橋義介
	〃	酒井宗孝
〔資料課〕	課　　長	名須川溢男
	主任文化財専門調査員	三浦謙一
	文化財専門調査員	佐々木清文

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第113集

狄森古墳群遺跡発掘調査報告書

国道4号拡幅工事関連遺跡発掘調査

印刷　昭和61年11月25日
発行　昭和61年11月30日

発　行　財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020　紫波郡都南村大字下飯岡１１－１８５
電　話　(0196) ３８－９００１～２
印　刷　株式会社　熊　谷　印　刷
〒020　盛岡市上田一丁目６－４９
電　話　(0196) ５３－４１５１

© (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1986